

## ドイツ 1848 年革命期における教員運動史史料集成

勝 山 吉 章

(人文学部 教育・臨床心理学科)

筆者は主としてフリードリヒ・フレーベルを研究対象としてきたが、以下の理由からフレーベルを、ドイツ 1848 年革命と革命期の教員運動とのかかわりのなかで論じる必要性を認識するに至った。したがって今後のフレーベル研究の進展のためにも、ドイツ 1848 年革命においてドイツの教育や学校がどう揺さぶられ、いかなる教員運動が繰り広げられたかについてまとめておく必要があるだろう。そのために、ドイツ本国の文献や論考のなかからフレーベルと 1848 年革命に関係する箇所を引用・蒐集し、史料集成とした。

フレーベルの時代は、まさしく激動の時代であり、彼は時代によって激しく揺さぶられ続けた。カイルハウ学園への迫害 (1829) も、幼稚園禁止令 (1851) も、時代によって揺さぶられた証左といえる。フレーベル自身が、「子どもの問題は政党とは無関係であり、私はどの党派にも属しません・・・でも実際、幼稚園の問題は保守的な政党によって拒否され、反対する党派がそれを受け入れるという党派問題の烙印を押されるのです」(「プロイセン王への請願」)と述べているように、彼の周囲には常に共和主義者や革命家があった。いや、王侯、貴族との関係性を大切にしたいフレーベルは、その王侯、貴族の打倒を目指した革命家からも愛され続けた。彼はどのような時代を生きてきたのか。

イエナ敗戦 (1806) によって神聖ローマ帝国が消滅した。フランス主導によるプロイセン改革は、農奴的立場に置かれた農民の解放や、営業の自由など、封建制的支配体制の打破と、教育面ではペスタロッチ主義導入など自由主義的な教育改革をもたらした。このようななか 1812 年にフレーベルは、ペスタロッチ主義者ブラーマンの模範学校の教師となるが、同校には後にリュッツオー義勇軍に参加し、反体制的學生運動であるブルシェンシャフトのリーダーとなるヤーン、フリーセン、ハルニッシュらがいた。やがて、フランス支配からの解放を唱えるフィヒテやアルントの愛国心はフレーベルを動か

し、彼は祖国解放戦争に従軍する (1813)。その戦友たちと、カイルハウ学園を設立するのだが、戦友たちの多くは、ブルシェンシャフトとなった。

ブルシェンシャフトとは、ナポレオンから解放された後のドイツの保守化、反動化に失望し、王制・貴族制を廃止し、ドイツ統一と共和主義を求めた學生運動である。やがてこの運動は先鋭化していくことから、メッテルニヒによって徹底的な弾圧を受けた。弾圧された彼らは、労働運動家たちと共にスイス、フランス、イギリスなどへ亡命し、パリで追放者同盟を結成する (1834)。この同盟は 1836 年に義人同盟に、47 年には共産主義者同盟となって、ドイツ 3 月革命に参加していく。ランゲタール、ミッテンドルフ、パーロップといったカイルハウ学園を支えた教師たちがこのブルシェンシャフトであった。とくにハレ大学のブルシェンシャフトのリーダーだったパーロップは 1825 年に逮捕され、拘禁されていた。彼はまた、聖職にありながら教会を批判し、共和主義を求めた自由信仰教団の創設者ヴィスリセヌスと、ハレ・ブルシェンシャフトで同志だった。ここに「扇動家の巢窟」とされたカイルハウ学園迫害の原因があった。

フランスによるドイツ支配は、営業の自由などのブルジョア自由主義をもたらし、ドイツにおける産業資本家の成長を促した。1830 年代にはドイツ関税同盟が結成され、鉄道の開通などによりドイツにおける工業化が進展した。ベルリンなどの大都市では、中間層を形成していた親方・職人層が没落し、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立が激化していった。

そのようななか、1840 年代には社会主義運動が隆盛となっていくが、カイルハウ学園の卒業生たちが、この社会主義運動に投じていく。なかでも、フレーベルの兄クリストフの遺児で、カイルハウ学園の初期の生徒であった、ユリウス・フレーベルとカール・フレーベルは、イエナ大学でブルシェンシャフトとなると同時に、ヨーロッパでも著名な社会主義者となる。

ユリウスは、イエナ大学やベルリン大学で鉱物学を学

び、チューリッヒ大学の鉱物学教授に就任した(1836)。1840年には出版業に転じて、ドイツで出版禁止となったエンゲルスやフォイエルバッハなど社会主義者の著作を刊行し続けた。このことから彼は、ドイツ社会主義の祖とされるモーゼス・ヒスによって「ユリウス・フレーベルはチューリッヒ大学教授の職をなげうち、社会主義のために闘う勇気を示したたった一人の人物である」と賞賛された(『資料ドイツ初期社会主義』平凡社)。ユリウスは、ドイツ三月革命(1848-49)でフランクフルト国民議会最左翼(ドンネルスベルク派)議員として活躍し、ウィーン10月蜂起に応援に駆けつけたところ、反革命によって逮捕され死刑判決を受けた(後に恩赦)。

カールは、イェナ大学で哲学を学んだ後、ロンドンのペスタロッチ学校で数学教師。後に、ユリウスに招かれてチューリッヒの州立学校で英語教師。1845年に、チューリッヒで幼稚園をもつ教育舎を開校。同校でカールは、後にドイツ社会民主党を創設するリープクネヒトや、後の共産主義者同盟の重鎮ボイストを教師に迎えていた。また、スイスに亡命していたロシアの著名な無政府主義者・社会主義者バクーニンとも交流していた。

1848年のドイツ三月革命では、自由主義者、無政府主義者、社会主義者たちが自由主義、共和主義を掲げて様々な国民集会を開催した。マルクスやエンゲルスたちは「ドイツにおける共産主義者の要求」として共和主義と無償の普通国民教育などを求めた。共産主義者同盟のリーダー・ボルンは、労働者友愛会などの労働運動を組織すると同時に、教師たちにも団結を求めた。労働者集会では、無償の国民教育や、誰もが受けられる職業教育の充実が求められた。教師たちは各地で教員集会を開き、待遇改善と新たな自由主義的な教育を訴えた。1848年8月4日、全ドイツ教員集会がドレスデンで開催され、シュレージエンの国民学校教師ヴァンダーによって、全ドイツ教員組合の結成が呼びかけられた。フレーベルたちは、8月17日にリードルシュタットで教員集会を開き、幼稚園を全ドイツの学校制度として普及させることを決議し、各領邦政府とフランクフルト国民議会に請願書を送った。そして、9月28日にアイゼナハで開催された全ドイツ教員組合大会では、幼稚園にはじまる統一学校制度の実現が、綱領に第一の目標として掲げられた。

この間、フレーベルはイェナのブルシェンシャフトで、フランクフルト国民議会最左翼(ドンネルスベルク派)議員のカール・ハーゲンに宛てた書簡で(48年7月17日)、全ドイツ国民教育制度の第一階梯としての幼稚園の普及を訴えた。その際彼は、「私は共和国を目指して教育していきます」と結んでいる。革命勃発期には、友人ホフマンに宛てた書簡のなかで「プロレタリアートの諸要求を根本から満たすこと、これが私の全ての活動の究極の目標です」と書き送っていた。また、革命期には、反体制的で共和主義的なキリスト教集団である自由信仰

教団やドイツ・カトリックが、フレーベル主義に基づく幼稚園を各地に設立していた。

1849年にはじまる反動によって、多くのフレーベル主義者が国外に亡命した。例えばアメリカに亡命した無政府主義・社会主義者ドゥエー。彼はテキサスで、ジャーナリストとして奴隷解放論の論陣を張り、マサチューセッツでフレーベル主義幼稚園を設立。その時の彼の幼稚園入門書が、関信三によって『幼稚園法二十遊嬉』として訳された。

これらのことから、フレーベルと彼の幼稚園が、反動の嵐のなかで、共和主義、無政府主義、社会主義、無神論の烙印を押されていったのである。

これからのフレーベル研究にあたっては、彼の思想を哲学的に分析することはもちろん重要だが、彼が生きた激動の時代状況をも把握しながら、彼がその時代においてどのような教育的価値を切り開こうとしたのかを見ることも重要だろう。(ペスタロッチ・フレーベル学会シンポジウム「過去30年の日本のペスタロッチ・フレーベル学会の歩みを振り返り、今後、本学会はどうあるべきかを考える」(『人間の教育』第25号)参照)。

以上の課題意識から、以下の文献・論考を引用・蒐集した。

1) C.L.A. プレッツェル「1848年の教員運動」(『ドイツ教員組合誕生50年史』ライプツヒ 1921年)  
C. L. A. Pretzel : Die Lehrerbewegung des Jahres 1848. IN : Geschichte des Deutschen Lehrervereins in den ersten fuenfzig Jahren seines Bestehens, Leipzig 1921, S.21-41.

三月革命期にドイツ各地の教員たちが結集し、教員組合等を組織して集会をもった。そのなかで彼らは、教員の待遇改善(官吏なみの給与と年金、高等教育の教師と初等教育の教師の給与および社会的ステータスの平等化など)、教育制度の民主化(就学前教育からはじまる初等、中等、高等教育もしくは実業教育につながる統一学校構想、保守的な教会監督からの学校の解放、全ての学校の国立化など)を求めてフランクフルト国民議会などに請願していった。そして同議会での教育に関する基本権制定に多大な影響を及ぼした。この基本権は、その後、ワイマール憲法や現行のドイツ基本法に生かされている。

2) C.L.A. プレッツェル「全ドイツ教員組合」(『ドイツ教員組合誕生50年史』ライプツヒ 1921年)  
C. L. A. Pretzel : Der Allgemeine Deutsche Lehrerverein. IN : Geschichte des Deutschen Lehrervereins in den ersten fuenfzig Jahren seines Bestehens, Leipzig 1921, S.42-53,63-65.

三月革命期、教員たちは様々な会合をもち、待遇改善

と教育の民主化を求めていったが、やがて領邦国家内での統一組合、そして全ドイツの統一組合結成を求めて活動した。その先頭にたったのがザクセンの教員達だった。三月革命ではベルリンの革命が反革命によって敗北したといった後でも、ドレスデンを中心とするザクセンでは革命の嵐が吹き荒れていた。そのような影響を教師たちは受けていたのであろう。1848年4月にはライプツヒで第1回ザクセン教員集会が開催され、8月にはドレスデンの第2回ザクセン教員集会で、全ドイツ教員集会と全ドイツ教員組合の結成を9月にアイゼナハで行うことが決議された。就学前教育から高等教育までを含む全ての教師の団結を訴えた第2回ザクセン教員集会でのヴァンダーの演説は、ドイツ教員運動史の白眉であろう。やがて反革命と反動化のなかで教員運動は衰退化し、教員組合禁止令（1850年／プロイセン）以降は、教員組合も多くの地方で解散を余儀なくされるか、ただの親睦会化していった。

3) C・ヴァインライン『全ドイツ教員集会史』1887年より、「全ドイツ教員集会の敵と友」および「全ドイツ教員集会議事内容」

Christian Weinlein :Gegner und Freund der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung, und Die Verhandlungsgegenstaende der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung, IN:Geschichte der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung , Leipzig und Berlin , Verlag von Julius Klinkhardt 1887, S.20-21, S.28-33.

ドイツ教員組合やドイツ教員集会に結集する教師は、ドイツ保守派や保守的なキリスト教関係者から、無神論に青少年を導く輩として激しく嫌悪されていた。そのようななかでフレーベルも、同類として嫌悪され幼稚園の禁令が出された。

第2回ザクセン教員集会では、全ドイツ教員組合の結成が目指されただけでなく、全ドイツ学校新聞やドイツ教員会議の創設も論議されていた。教員の待遇改善と教育制度の民主化の声を、フランクフルト国民会議に届けようとした。教員集会では改革派や左派だけではなく、とくに宗派に関する保守派も公平に論議の場に招聘されていた。

4) W・シュミット編『1848／49年ドイツ革命史図絵』（1988）より「ザクセンの革命」

Illustrierte Geschichte der deutschen Revolution 1848-49, Walter Schmidt(Leiter), Berlin 1973, S.70-71, S.310-318)

なぜザクセンで教員運動が盛んであったのか。それは教師たちだけでなく、前衛的で革命的な勤労大衆が多く存在していたからであろう。ザクセンでもフランス2月革命やベルリンの3月革命の影響が大きかった。他の領

邦と同じく、民主派とリベラル派が革命のヘゲモニーを握って拮抗する。やがて革命がはじまるや、リベラル派は革命を裏切り、体制と協調を模索し、それがザクセン5月革命の敗北の要因の一つとなる。ドレスデンでの闘争は、カール・フレーベルとスイスで親交のあったバクーニンや、教員組合結成に少なからず影響を与えたシュテファン・ボルンも応援に駆けつけた。フレーベルは5月革命勃発直前までドレスデンにいたが、チューリンゲンに講演旅行に出かけて無事だった。もしフレーベルがドレスデンにいたなら、この元リュッツォー義勇軍兵士が黙ってはいなかっただろうと、弟子達は安堵した。

5) W・レム編『ベルリン学校史』（1987）より、「ベルリン市立師範学校でのディースターベークの活動」および「1848・49年の市民民主主義革命におけるベルリンの教師たち」

Diesterwegs Wirken am Berliner Stadtschullehrerseminar, und Berliner Lehrer in der buergerlich-demokratischen Revolution von 1848/49, IN:Schulgeschichte in Berlin , Werner Lemm(Leiter), Berlin 1987, S.67-71.

三月前、ディースターベークは師範学校で、聖職者の影響下にあるドグマ的な暗記中心の教育を排除しようとしてプロイセン当局から危険視され、師範学校の教職を追われた。だが、彼の薫陶を受けた教え子の多くは、ドイツ三月革命では革命側にたって活動した。革命的労働者の会合では、初等教育や実業補習教育の無償化が求められた。48年4月26日にベルリンのチボリで開催された教員集会は、教員の待遇改善と教育の民主化を決議して、フランクフルト国民議会宛に請願書を認めたが、これが三月革命期における教員の諸要求実現を目指す運動のモデルとなった。反革命のなかで、反動的な警視総監の要注意人物のリストには多くの国民学校教師がいた。

6) ヘルムート・ケーニッヒ「1848・49年の市民民主革命の闘いにおいて民衆側にいた教師たち」

Helmut Koenig : Die Lehrer an der Seite der Volksmassen in der Kaempfen der Buergerlich-demokratischen Revolution 1848/49,IN: Jahrbuch fuer Erziehungs-und Schulgeschichte 20/1980 Berlin 1980.

三月革命には、実際多くの教師達が銃を持ちバリケード闘争に参加した。例えば、ケルンのギムナジウムの校長アウグスト。彼は古いヤーンの体操活動家でリュッツォー義勇軍の兵士だったが、反革命の兵士によって殺された。

ハレのギムナジウム校長だったカップは、「ドイツ国民教育改革への呼びかけ」を起草した。彼は、共産主義者同盟員ボルンの労働者友愛会に参加し、プロイセン国

民議会議員となってエーゼンベックやヴォルフたちとプロイセン憲法草案の教育に関する七条項案作成に貢献した。彼はまた、母親学校から大学に至る統一学校構想をもっていた。

ベルリンの国民学校教師コッホは、官憲によって共和主義者として危険視されていたが、1848年4月26日にチボリで教員集会を主催した。同集会では「プロイセン教師への呼びかけ」が採択された。

フランクフルト国民議会には、120名の教授と教師が、プロイセン国民議会には17名のギムナジウム教師と11名の国民学校教師がいたが、ラジカルな共和主義者は少数だった。フランクフルト国民議会の教師出身の議員ロースマスラーやラインハルトは、国民学校教師会議の代表と論議を重ね、ドイツ憲法草案における教育条項作成に貢献した。ラインハルトは、教育に関する予算措置の重要性を訴えながら、それに対して否定的な議員が多い中で孤軍奮闘した。

ドイツの小さな領邦では教員の待遇改善が主要な要求であって、教育制度の民主化は穏健なかたちで論議された。学校を聖職者支配から解放する論議は過激なものとなされた。

フレーベル主義者ドゥエーは、共産主義に共鳴し、アメリカに亡命した後は、マルクス主義者労働者党の設立者の一人となった。

#### 7) ヘルムート・ケーニヒ：19世紀前半におけるフリードリヒ・フレーベルと小市民民主主義の結びつき 第二部

Helmut Koenig : Friedrich Froebels Verbindungen zur kleinbuergerlichen Demokratie in der ersten Haelfte des 19. Jahrhunderts. Teil II, IN : Jahrbuch fuer Erziehungs- und Schulgeschichte 25/1985 Berlin 1980.

ドイツ三月革命の勃発にフレーベルは「新しいドイツの春が来た」と歓喜した。カイルハウでは生徒と教師による祝祭がもたれた。彼の愛弟子であるアマリエ・クリューガーや彼の友人フリードリヒ・ホフマンも1848年革命を絶賛した。彼の姪っ子ヘンリエッテ・ブレイマンは、オーソドックスな教会の家庭に育ち、貴族階級とも親密にしていたが、次第に革命に傾倒していった。カイルハウの家には、反体制的キリスト教団「光の友」のリーダーだったヴィスリセヌスの肖像画があり、光の友を継承した自由信仰教団に所属していたヒルデンハーゲンはアマリエ・クリューガーのおじでフレーベルの信奉者だった。共産主義者シュテファン・ボルンの同志だったルドルフ・ベンフェイは、フレーベルの幼稚園理論と実践を深化させた。またフレーベルは、フランクフルト国民議会極左派カール・ハーゲンと親交を結んだ。

革命期のフレーベルは、社会変革は教育によって可能と捉えていた。彼は、子どもの保育を行う狭義の幼稚園、その幼稚園教師養成、教育に関する機関誌や書籍の出版、教育教材や遊具の考案・販売などを含む広範な幼稚園構想をもっていた。そして、それがプロレタリアートの救済に繋がると考えていた。

第2回ザクセン教員集会に結集した、ケルやチェエたちは、その後、ドイツ各地で教員集会を開催し、教員組合の結成を呼びかけていたが、彼らはルードルシュタットでも教員集会を開催した。その場でフレーベルの幼稚園理論と実践が紹介された。フレーベルの幼稚園は様々な教員集会で、統一学校制度の第一階梯として扱われていった。革命的民主派の活動が活発だったドレスデンでフレーベルは幼稚園教師養成コースを主催した。

## 1) C.L.A. プレッツェル「1848年の教員運動」 (『ドイツ教員組合誕生 50 年史』 ライプツヒ 1921 年)

1848年の春の嵐は、国民学校教師にも、自由な意見表明の権利を与えた。十年以上苦痛に感じていた抑圧から解放されて、教師は再び自らの声を掲げることに踏み切った。あらゆる所で集会が開かれ、領主や役所、新たに誕生した国民代表に向けての陳情や申請が書かれ、組合が作られた。この運動で、当時のほとんどのあらゆるドイツ領邦で、教職を苦しめた苦境が、また新たな役割を演じたことを誰が否定するだろう。しかしながら注目すべき事は、当初から個人々が呻吟した心配ごとが、新たな時代に即応した国民教育の偉大な理念の背後でずっと後退したことである。また、三月前には貧しく虐げられ、侮蔑された学校親方が、かの高揚の日々には、いかに未来のもっとも誇るべき学校建設に熱心に共同し、自らの学校の藁葺き屋根の穴にはほとんど一瞥もくれないことを知ることは感動的である。当時の組合運動も、第一列において、教職関係のことではなく、新たなドイツの学校制度の建設という偉大な課題に貢献している。1848年のこの教員運動の理想的特徴に、教員運動が分離された、自己のために存在するものとして現れたのではなく、そもそも偉大なる国民運動によって担われたものであることが横たわっていることは、根拠あることでもある。人が得ようとした国民の自由は、時代に即した国民教育の基盤無くしては、獲得できないものであることは、前に進もうとした全ての人の確信だった。だから学校問題が、いたるところで、普遍的国民要求の本質的部分と見なされ、扱われることが説明される。だからまた、教師が国民運動に参加した熱意が理解できるだろうし、それに劣らずまた、後に反動がまさに教師を迫害した憎悪も、理解できるだろう。憎悪は、もし、1848年の教師が自分たちのためのパン以上のものを得ようとしなかったなら、もし、彼らの学校改善計画がただの非現実的な夢想の遊戯以上の何ものでもなかったなら理解できないだろう。

革命の勃発後数週間で、ディースターベークに向けられた質問：時代は何を求めているか？ 彼は自らの『ライン新聞』(38巻1号)で次のように答えた。時代が要求するもの。第1は、攪乱、無秩序、違法や無統制がはじまればそれだけ、人はより厳格で、良心的で、誠実であること。第2は、我々が身を置いている現在の状況を、一般的市民的関係と教育的関係において認識すること。

第3は、教師は自らに与えられた権利を、自らの職責(学校の職責)の発展のために行使すること。第4は、教師は共同体において、自由な組合において、国民学校の完全な組織に配慮すること。これらの言葉は鋭敏な土壌に降り注いだ<sup>(1)</sup>。

(1) すでに4月19日には、Siegen(ジーゲン)郡の教師が、文化相にディースターベークをプロイセンの国民学校制度の首脳に就かせることをお願いした。解答は、この願いを特別に考慮することなく以下を約束するものだった。彼には「相応の任務を与えること、国民学校制度の再組織化にあたって、彼の経験を課題に有効に利用すること」。ジーゲンの例は、プロイセンの教師集団のなかで多くの継承者を見いだした。だが、自由思想の教師の敵対者側からは、神学的に、教育的に、申請された請願書から、省が敵対者を特定する試みが為された。大臣—シュベールン伯爵(Graf Schwerin)—は、ディースターベークを授業に関する法律の準備作業に当たさせた。だが、その完成を前に、省は既に崩壊した。また後継者—ロードベルトゥス(Rodbertus)—も、ディースターベークを招聘したが、8日後には同様に辞職した。

既に3月31日に、フリードリッヒ・カッパ博士(Friedrich Kapp: ハムのギムナジウム校長、後年の著名な歴史家で国会議員<sup>(2)</sup>)パーレンによって、書かれた「ドイツ国民教育の改善のための呼びかけ」が生まれた。その30の(後に41に増えた)センテンスは多くの集会で熱心に論議された。「統一されたドイツの学校は、聖職者や法律家の監督から自由で、当局側の後見なしに、自由に自分自身で自己形成されること」が目的だったと、彼はそのなかに入れた。彼の最後のセンテンスは次のようになっていた。「これによって、ドイツの教師は独り立ちしていることを宣言する。そして、この自らの解放と、それに応じた自らの内的、外的自立を、例え人が、教師に対してどこかしら、恩知らずな疑いや不信感から認めようとしなかったとしても、この世の最も平和的な手段で獲得すること、確保することを知るだろう。すなわちこの24の文字で書かれたものを、何人も奪うこと

は出来ない」(ライン新聞 38 卷 1 号)。のちにキール大学の哲学・教育学の教授 (1883 年没) グスタフ・タウロウ (Gustav Thaulow) は、「シュレスビヒ=ホルシュタインの全教師へ」の呼びかけをもって続いた。フランクフルト (アム・オーデル) では「学校の解放のための組合」の局外者が加わった。彼らは嵐のような賛同を得た。

(2) カップは 1884 年に死去。彼の息子は、世界大戦における 1920 年 3 月の「カップ一揆」によって著名となった東プロイセンの総地方局長カップである。

既に 3 月には最初の教員集会が開催された。最も注目されるものの一つが、首都ベルリンで、当時は最も大きく、最も活動的な教員結社である「見習い教員組合」(Geselliger Lehrerverein) (1840 年設立) によって提唱され、ヴィルヘルム・コッホ (Willgelm Koch) の指導下で、彼が最初に議長をした 4 月 26 日にチボリ (Tivoli) で開催された集会である。その集会はベルリンと地方から約 500 名の参加者と、その中には組合の 62 名の代議員がいた。決議は、後に国民議会への陳情書となるが、おびただしい数の類似した集会の手本となった<sup>(3)</sup>。要点は以下の通りである。

(3) 執筆者は、1848 年で最も突出した手法で扇動的に活動した師範学校教師エドゥアルド・ヒントエ (Eduard Hintze) だった。彼は、1860 年に自らの責任によって、ベルリン師範学校の職を辞さねばならなくなった。そして職を転々とした後、ライプツヒの出版社の社員として 1877 年スパンダウ (Spandau) で死去した。

1. 特別な教育相の任命。
2. あらゆる種類の現場教師から選ばれた委員会の設置。
3. 教職員による学校の視察。
4. 秘密の素行調査票の廃止。
5. 教師と他の市民によって構成された郡、州、帝国 (Reich) の学校会議の設置。
6. 学校は国立の学校であること (だから、あらゆる宗教、宗派、パトロン、自治体の優先権は廃止! だから万人に無料の教育を! なぜなら、たまたまの財産が、未来の生活設計を規定するのではなく、能力のみであるはずだから)。
7. 前項目から生じるのが国民学校、高等市民学校、ギムナジウムそして大学となる系統的な教育施設の組織化 (個々の教育施設は系統的な全体を形成せねばならず、相互の関係性無しに並存できない。全ての教育の基礎は、万人にとって例外なしに国民学校である。国民学校は、標準的に理解すると、

だいたい 14 歳までの生徒を有する。そこから生徒は直接に職業生活に入るか、上の学校に進む)。

8. 女学校の校長は教師からだけ (女性ではない)。
9. 国民学校から職業生活に進んだ人たちのために、学校から継続教育への組織化。
10. 国民学校とリンクした児童養護施設 (Kleinkinderbewahlanstalt) の組織化 (産業の発達によって、父母がますます家族関係から奪い取られているから)。
11. 私立学校は、理事長や校長の権利を考慮しながら、国家的施設となる。
12. 私立学校が将来なお必用というのなら、私立学校の設立は認可制となる。
13. 教師を養成する施設は、大学の一部門であり、理論的・実践的教育がなされる (大学を出た者と初等教員のこれまでの差別はなくなり、教師は均等に養成される)!<sup>(4)</sup>
14. 専門の授業科目をもつ者は、高等市民学校もしくはギムナジウムの修了証書を得ていなくてはならない。
15. 女教師の養成施設の設立は、高等女学校に依拠する。
16. あらゆる教職員 (Schulamt) 候補者は、自らの人生を国民学校の第一学年から始める (なお、かつてのお決まりだった、初等教員とアカデミックに養成された教員との差別は無くされねばならないだろう)。
17. 田舎であろうと都市であろうと、給料の最低値は 250 から 400 ターラーである (お金は常に、現金である必用はない)。
18. 高い地位への昇進は能力による。しかし・・・
19. 給料のアップは、職務への忠誠と職務期間による。
20. 寡婦や孤児の年金や扶養に関しては、教師は他の国家官吏と同等である。
21. 私立学校の校長や教師はあらゆる点で、他の国家施設の教師と同等である。

(4) 当時、どんな公平な方法で、知識人の間でこの要求が考慮されたかについては、例えば、1848 年 7 月にマグデブルクで開催された、あらゆる団体の教師からなる集会でのメルゼブルクのヒーッケ (Hiecke) 教授のスピーチが教えてくれる。教授は、あらゆる種類の教師の緊密な統合は必然と思うと述べた。今まで、このことは多くのギムナジウムの教師の高慢と、国民学校教師の傷付けられたプライドによって挫折しているが、国民学校教師の一部は、ギムナジウム教師との統合において、彼らはギムナジウム教師によって軽蔑され、背後に追いやられると考えたのだろう。両者の先入観は破棄されねばならない。さらに、「国民学校教師の利益を、ギムナ

ジウムや実科学校 (Realschule) の教師の利益から分離しようとする事全てに抵抗すること、なぜなら、両者の教師は将来的に手を繋ぎ、共同の偉大な目的を追っていくものだから」と締めくくった(1848年のマグデブルクのヒッターマン (Hittermann) 報告を参照)。また注目すべきことはつまり、実科学校教師たちが、彼らの学校の生存権をめぐる闘いを主導し、学校と教師の自由と統一のための闘いの、ともに、最前線に立っていたことである。

また全ての領邦の教師たちが団結した。すでに三月には、ひどく困窮したウィーンの教師助手たちが、ヤーコプ・シュピッツァー (Jakob Spitzer) 議長の下で会議を行い、コーブルク侯国の教師助手たちは、マルバッハ (Marbach) の下でコーブルク近郊のローゼナウで (第二回集会にはフレーベルも参加したが、5月には再びローゼナウで開催された)、4月には600人のザクセンの教師たちがライプツヒに実科学校校長 Dr. フォーゲル (Vogel) の指導下で (第二回ザクセン教員集会は、次章で詳細に論じられるが、ライプツヒの3分の2の教師がそれに異論を唱えたが、チェツェ (Zetzsch) の指導下で8月にドレスデンで開催された)、さらにヘッセン選帝侯国の教師たちがカッセルで Dr. グレーフェ (Graefe) の下で (この第1回集会で環学校教会会議と地方学校教会会議の設立が決議された、後者はその後10月に、グレーフェ議長のもとでたった一度だけ集まった)、シュレーゲン人はブレスラウでショルツ (Scholz) とレンドシュミット (Rendschmidt) <sup>5)</sup> の下で、ホルシュタイン人はノイミュンスターで、ブラウンシュバイク人はブラウンシュバイクで、ルックルムのシュミット (Schmidt) とベールスムのベーレンス (Behrens) の下で (10月には再びボルフェンビュッテルで)、ゴータ人は M・シュルツェ (Schultze) の下で、ゴータで、東西プロイセンの教師は師範学校長スルイメル (Sluymer) の下で、プロイセンのエイラウで <sup>6)</sup>、フォルツ人はペーター・ゲルトナー (Peter Gaertner) の下でノイシュタットで (10月には第二回目)、5月にはオルデンプルク人がオルデンプルクで、ナッサウ人がオラニエンシュタインで、マイニンゲン人がヒルデブルグハウゼンで、6月にはハノーバー人がローゼンタール (Rosenthal) の下でハノーバーで、ヘッセン人がシュミット (Schmitt) の下でフリードベルクで、7月には北バイエルンの教師がシューバハで、高地フランク人がクルムバッハで、低地フランク人がキッチンガーで、8月にはコーブルグ人が、10月にはシュレスビヒ・ホルシュタイン人がタウロー (Thaulow) とアスムッセン (Asmussen) の下でキールで、アンハルター人がデッサウで、12月には最終的には、彼らはケーテンでもう一度、高地バイエルン人は、たいていは田舎教師だが、ミュンヘンで。これらの集会では、

しばしば大学教授や高等教育機関の教師が参加した。

(5) ブレスラウのカトリック師範学校の教師で、かつてはペスタロッチの同僚だった (1853年頃)。

(6) 招待は一部、次のような方法でうまくいった。つまり、休暇に旅行する師範学校生は、「その学校の教師を招待することなしに、いかなる学校の前を通り過ぎてはならない」との任務をもって放校された。守備は上々だった。

何よりも普遍的な意義を有したのが、8月5～7日に、Th. ホフマン (Hoffmann) 議長の下でハンブルクで開催された「北ドイツ国民学校教師集会」で、約500名が参加した。それは、ハンブルクで著名な孤児院教師 Dr. J. C. クレーガー (Kroeger) によって署名されたハンブルクとマルキナの教員組合の呼びかけに参集したものであって、「教育と教授の根本を、尋常的なとくに唯一のドイツ国民教育において、さらに詳細に検討するためのものであり、しかも個々の領邦の特殊な組合の目的を全く除外することを伴うものであった」。世論にもっと強く影響を及ぼしたのが、9月28日から30日にアイゼナハで集められた、ほとんど全てのドイツの領邦から代議員が集まった最初の全ドイツ教員集会である。それについては次章でも詳細に扱っている。同集会は2日目の集会において、Dr. ケーヒリー (Koechly) によってもたれた講演をもとにドイツ国民学校組織について協議し、次のことを決議した。

1. 幼稚園から高等教育機関まで統一的に繋がって組織され、全ての人間的・民族的基盤に基づくドイツ国民学校は、他の国家の学校と同一の権利と責任をもつものとして国家の全機関に属す。
2. 統一された国民学校の独立した指導は、それゆえに教員組合や学校宗教会議の法的に確認された考慮下で - とくに公的国民教育の省庁によって生じる。同省のメンバー (教育評議員) ならびに郡や地区の学校評議員は、学校の実践家からのみ成り立ち、様々な種類の国民学校を代弁する。
3. 直接的にもっぱら省庁の下で、国庫からのみ保持される特別な国民教育施設が存在する。実科学校、ギムナジウム、専門学校、大学、師範学校である。一部、自治体の資金で維持されている一般的な国民学校 (幼稚園、初等学校、市民学校、補習学校) を省庁は郡や地区の学校評議員 (Schulrat) を通して指導するのだが、自治体は学校、家庭、教会の代表者からなる学校理事会 (Schulvorstand) を通して、法的に規定された影響を行使する。すなわち、教師の選考、学校の外的管理に関わることである。

(採決後、非常に強固な少数派から議事録に対する度重なる抗議がなされた。一つは、文章全文に対して、一つは、その中で確認された国家や教会や自治体に対する学校の関係に対して)。

4. 一般的な学校の全ての授業に対して授業料は徴収されない。また、特別な教育施設の無料登校は、規則に従って、そのための能力と素質のある貧民に継続される。
5. 教師の適切な準備教育と試験、きちんとした雇用と昇進、平等な市民的地位と資格、十分な俸給と年金、ならびに教師の寡婦と孤児の扶養は、現在の諸要求に相応した教師の職務に必要な不可欠な条件であり、また、新たな国民学校の必用不可欠な条件である。

それから三日目の集会では、フランクフルト国民議会によって起草された「基本権」が協議された。基本権は集会の意志に従って、次の草稿をもつものとされた。

17. 学問とその教授は自由。
18. a) 当局による道徳的、学問的ないし技術的能力が証明されたドイツ人ならすべて、授業をすること、学校をたてることは自由。b) ドイツの青少年は、十分な公的な学校を通じて、一般的な人間的・市民的教育の権利を保障される。c) 自らの後見に委ねられた青少年を、最低限の国民教育に定められている学力なしに、教育を去らせることはできない。d) 全ての教育制度は、国家の監督下にある。全ての公的の学校は、国家施設であり、聖職者の監督から解放され、将来は教育の実践家によって監督される。e) 全ての公的な教師は国家官吏である。f) 国家は合法的に定められた自治体の関与下で、有資格者から国民学校の教師を選ぶ。
19. a) 国民学校と初級実業学校の授業料は無料。b) やる気と能力はあるが財力の無いものは、全ての公的な教育施設での無料の授業が保障されるものとする。c) 貧民学校は開設されない。d) 国家は適当な方法で、国庫から教師の給料を支払い、学校の他の必需品も配慮しなくてはならない。
20. 各人には職業選択の自由があり、どこで、どのように自らの職業のために教育を受けようとも自由である。

協議の最終テーマは、教会に対する学校の位置づけについての話し合いだった。決議では次のことが強調される。「宗派の授業は排除される」(92対11で可決)、「従来の宗派学校はコミュニティー学校(すなわち宗派混合学校)に変えられる」(81対17)。それに対して宗教教育の排除に関する動議は、だいたい102対17で否決さ

れた。バックナーゲルの動議「国民学校は教会学校であり、国家から自立しており、必然的に宗派学校である」は、ほんの僅かな賛成しか得られなかった。

「基本権」に関して、彼らの要求を実際に主張するために、集会は、国民議会そのものの在所で、国民議会の協議と決議に直接に影響を及ぼすために、「ドイツ国民学校教員会議」の開催を決議した。この会議には、バーデン、ビュルテンベルグ、ラインファルツ、バイエルン、ナッサウから79名の代表が集まった—北ドイツの組合は招待状があまりに遅れて届いた—ならびに多数の来賓がやってきて、フランクフルトで10月16-21日に開催された。指導したのは、ライプツヒのユリウス・ケル(Julius Kell)、フランケンクルムバッハのヨハン・シュミット(Johann Schmitt)、マイスバッハのフィリップ・シュタイ(Philipp Stay)、バーデンの教員組合の議長。国民議会の議員たち、とくに学校委員会との関係は、本当にうまくいった。学校委員会には、なかでも、ザクセンのロースメスラー(Rossmessler)、メクレンブルクのラインハルト(Reinhard)、ブレスラウの師範学校教師フランツ・シュミット(Franz Schmidt)がいた。彼ら3人は、既に以前より、ドイツの学校関係者に、学校制度の改善に関するあらゆる希望を遠慮なく届けるように呼びかけていた。議会のほんの二つの小会派のみが、教職に対する認識が不十分なままだった。キリスト教的最右翼と、ラジカルな最左翼である。教員会議の努力が無駄でなかったことを、基本権第4条(後に第6条)に対する国民会議の決議が明瞭に教えてくれる<sup>(7)</sup>。

(7) この条項は、第2回の読会での決議にしたがう内容だった。「学問とその教育は自由。教授と教育制度は、国家の監督下に置かれ、そして宗教の授業を除いて聖職者それ自体による監督は免除される。教授と教育の施設を建てること、管理すること、そこで授業をすることは、その能力を関係する国家の官庁に証明した全てのドイツ人にとって自由である。家庭教育は何らの制限を受けない。ドイツの青少年の教育のために、公的な学校を通じて、いたるところで十分に配慮がなされる。両親や代理人は、その子どもや扶養している子に対して、国民学校用として定められた授業を受けさせないことは許されない。公的教師は国家官吏の権利をもつ。国家は、自治体の規則に則ったちゃんとした参加の下で、有資格者の中から国民学校の教師を採用する。国民学校と初級の実業学校の授業には、金銭は支払われない。資産のないものは、全ての公的な教育施設で無料の教育を保障される。自らの職業を選ぶこと、職業のための自己形成を、どのように、どこで望もうとも誰もが自由である」。

フランクフルト議会での学校に関する話し合いを



公的文書によって明瞭にしたのを、J・アイゼンホッフア(Eisenhofer)が「ドイツの学校」第2年版(1989年)に書いた。

良心的なレポーターであるカール・ナッケ(Karl Nacke)は、この時代の出来事について次のように書き残した。「これら全ての会議において、しばしば議会秩序が犠牲になったことは残念だが、古い支配に対する決定的な嫌悪と、また、前進に向けての精神的活気と努力が表明された。ある種の敵対的な党派によって言われたスローガン：「彼らは完全な改革には、まだ成熟していない」は、完全に嘘であることが暴露された。(Paedagogischer Jahresbericht 1849, S.5)

プロイセンでは、穏健リベラルな文科相グラーフエン・シュベリン(Grafen Schwerin)の布告によって(ディースターベークの提案で)、既に、5月には郡(Kreis)会議が置かれた。その会議は郡長の指導や視学官の招来下で会議が開かれることになっていた。そこで選出された議員は、それから、教員の希望を統一してまとめるために、州(Provinz)会議に参集した。多数の異議が、当初はディースターベークの指示で、ヴァンダー(Wander)によって唱えられたが(ライン新聞38巻の「公開宣言」を参照)、そのことで、後者のために予定された督学官(Schulrat)や師範学校長の招来が省庁(ラーデンベルク)のサイドで断念され、政府代表の臨席のみが命じられることになった。ナッケは述べる。「でも、このような公的な会議の結論と、自由な会議の結論を比較するなら、十分に説明できない大きな矛盾にぶつかる。それは、教師に対する聖職者の途方もない影響をこの矛盾の調停にあたって考慮しようとしないうときだ。」(Paedagogischer Jahresbericht 1849, S. 7)。翌年、省庁によって任命された師範学校教師の会議がまた、そしてすぐさま、自由に選出されたギムナジウムの教師の会議が、そしてとうとう大学の代議員の会議も、ベルリンに招聘された。

この多数の集会の決議は、非常に著しい異議をみせるが、このことにより、様々な地方の教師の間に精神的なつながりが少なかったことを明瞭に示している。以下の公告は、進歩的多数派の主たる決議だけである。これらの多くの要求には、まさしく正反対が見いだされることに、明確に気付くであろう。

1. 教会ないし聖職者による今日までの後見から国民学校を解放すること。学校は国家施設であること。(コーブルク市：国民学校はもっぱら教会の施設でもなければ、国家の施設でも自治体の施設でもない。それは、むしろ、国民生活のこれら三つの権力と最も親密な結びつきのなかにある。類似したものは、ラインランドなど)<sup>(8)</sup>。

2. 教育施設を建てること授業をすることは、合法的規定を充たせば自由であるが、国家は例外なく全ての教育・教授施設を監督する。
3. 全ての初等国民教育施設の維持は、国家の資金から(少数は：国家と自治体の資金もしくは自治体によってのみ)。授業料の中止。
4. 教育施設の組織的分化。国民学校と接続した幼児保護施設の設定。国民学校から実生活に移行する人々(青年男女)のための継続教育に関する学校の組織化。女子学校の最高指導者は男性にのみよること。
5. 宗派の授業はないこと(ビュルテンベルク：宗教の授業は、当該宗派の聖職者によってなされる。一般の教師は教会の監視下で歴史的部分にとどまる)<sup>(9)</sup>。
6. 体操訓練と女子手工の受け入れ(フランクフルト議会などはドイツの憲法と法律の学問も求めた。シュレージエンは果樹栽培の振興)。
7. もはや教員養成所は必要ない。授業に奉職するものは、その資格証明を高等市民学校かギムナジウムでとっておかねばならない。
8. 師範学校で、生徒が全く自由で学術的な教育と実践力を与えられるように、師範学校の再編。3年間の師範課程。今までのような師範生の入営の中止。師範学校は大都市に置かれ、大学と繋げられる。(ハノーファーなど：師範学校の師範大学への拡張。フランクフルト議会など：教員養成校は、大学の一部門であり、理論と実践の教育を行う)<sup>(10)</sup>。
9. 教職は、直に、官職である。
10. 雇用は国家によってなされる(法律で規定された自治体の関与の下で)。昇進は能力に応じて。昇給は職務への忠実さと職務期間に応じて。
11. 十分な給料(もちろん、個人では、ばらばらの金額になるが)。年金ならびに寡婦や孤児年金については、教師は、他の国家官吏と同じ立場にある。
12. 教会奉仕から教師の解放。
13. 学校教員による学校の視察。
14. 教師と他の市民によって構成された、郡・州・領邦の教会会議の設置。
15. 秘密の素行調査表の廃止(ポーゼンでとくに。ならびに、秘密の視察・調査・検査報告書の廃止)。
16. 町村の学校理事会への教師の受け入れ。
17. 郡(Kreis)の学校監督局(Schulbehoerde)設置にあたって教職との協働(シュレージエンでとくに。この監督局の選出は、郡の教師による)。
18. 自立した州学校監督局は、あらゆる種類の現場教師の選出による。
19. 特別な教育省の設置。

(8) 多くの党派から要求された教員の選考権を自治

体に移譲することは、教職員の間で大変な反対にあった。

(9) ディースターベークやカップの指導下、プロイセン国民議会の21人の代議員によって起草された1848年7月21日の法案は、宗教教育に関する要求を書いている。「授業は全ての宗派に共通のものである。一般的な宗教の授業は、学校に留まり、宗派的な授業は学校から排除される」(ライン新聞38巻、265頁参照) - 法案は、新聞と同様、組合において非常に熱心な論議を呼び起こした。師範学校長で、ディースターベークの婿で有名なティーロー(Thilo)は、この条文に反対するピラを配った。「その23人は、プロイセンのキリスト教国民学校に対して何を目論んでいるのか」。

(10) 「議会は、今までのような、そして今のような大学ではなく、近世の諸条件に相応しくなるであろう大学を考えている」。

これら全ての決議は実現されないままの希望で留まり続け、たいして今日でもなおそうである。48年の学校運動は、鳴り物入りの決議や、素晴らしい法案、長ったらしい委員会や会議室での協議に終わった。そして政府によって慎重に検討され、珍しく約束された約束ごっだけに終わった<sup>(11)</sup>。実際、学校関係で改善を誇れたのは、若干の小国にすぎなかった。例えば、ザクセン・アンハルト国々では、教師の給料が改善されたのみならず、実際の時代に即応した学校法規が採用された。そう、リッペは同様に新しい学校法規を得たし、ブランシュバイクやヘッセンは、教師の給料を高めた、等々。

(11) われわれの時代の運動後の75年史は、これらのことについて他に判断できるのだろうか？ 今まで何らの変化が見られない。

進歩的運動は、多くの妨害によって阻止された。それらの妨害は、反対党派に由来するものであり、とくに教会支配からの学校の解放をめぐる闘いに結びついた。これは、学校から宗教を排除するに等しいというスローガンとなって、キリスト教信仰をもつ人々を煽った。多数の反対が、当局や代議員に届けられ、多数の反論書が大衆のなかに広まった。ディースターベークは述べた。「反対運動の頂点には、たいしては、あらゆる宗派の聖職者がいる。彼らは、ここでは教師や町村民-学童のリーダーである。ラインやヴェストファーレンやポーゼンでは多くのカトリックの聖職者が学童を有していて、学童たちに、「教会からの学校の分離に抗議する」と署名させることが可能だった。このようにして多数の署名が

集められた… 全ては偉大なる救いの神の誉れにおいて、最も聖なる宗教を守るために」(『ライン新聞』第38巻第5号)。ラインランドやヴェストファーレン、ここでは当時、24歳のデルプフェルト(Doerpfeld)が宗派学校のための闘いにおいて手柄を立てたが、当地のために、デュイスブルクで設立された「福音派教員組合」(Evangelische Lehrerverein:後に、「福音派の教師と学校の友の組合」)が活動に入った。「ヘッセン教員信義連盟」(Lehrertreubund)や後にヘッセン選帝侯国に設立された「キリスト教の学校教師の組合」が、同じ目標を追った。シュレージエンでは、同じ中央組合に対して、「カトリック中央組合」が生じた。同じことが、ビュルテンベルクやバイエルンなどで起こった。

教職員が当初、自らの要求を主張していた活動力も、次第に弱まった。リーダーたちによって据えられた要求の中心点に関して、多くの郡(Kreis)ではもともと不明瞭さが支配していた。「国家学校」の概念が、まず最初にそのことに所属する<sup>(12)</sup>。多くの他の諸点では、地域的な関心事が頑強に顕在化したので、採決は異論の多い決議を生じた。とくに、主張された理想と実際の状況との間には、非常に大きな隔たりがあったので、運動の中心地から遠く離れたところにあった郡(Kreis)では、このような高尚な目標を獲得するあらゆる動機が欠けていた。リーダーたちは、理想のもつ力を過剰に評価して、理想が実現されるためにも、理想を声高に主張するためにも、理想が国民生活に広範な基盤を有していなければならないことを無視していた。さらに中途半端な満足感、小心者で臆病な者のもつ小心さと卑屈さが加わった。1848年9月にはもうヴァンダーが、シュレージエンの州議会に宛てた手紙で、運動の衰退についての怒りを露骨に表現した。この書簡は次のように締めくくられていた。「我々の希望の期待と実現は、日々沈下していき、君たちの議会は困難なものになる。我々は、国民学校の真の繁栄を望み期待したことの全てが、長きにわたって努力してきたことの実現が、再び、押しやられるのを見なければならぬだろう。それを私は、君たちと同様、悲嘆にくれるだろう。だが、その際、私のこころを最も傷付けることは、こわばった学校親方根性によって結果が引き起こされる状況である…君たちが私の死を聞いたとしても、私が水腫やクソ坊主が原因で死んだなんて思わないでくれ-そんなものは、ユーモアや風刺を服用すれば防げるってことを知っている-。否、学校親方根性のために私は死ぬだろう。そしてそのことを私の墓碑に記そう」。

(12) おそらく1848年の学校改革者の一部、例えば、ディースターベークやヴァンダーは、「国家学校」の概念を、ただ単に、「教会学校」に対峙するものとして理解していて、それ故に、その要求を通して、

学校制度の形成にあたって政治的に町村と協力することを決して排除したのではなかったが、この時代の要求において、「国家学校」の概念はまた、頻繁に、「町村学校」(Gemeindeschule)との対峙に据えられ、それ故、「純粋な国家学校」として理解された。否、教師の絶対多数は、この見解を受け入れていたように見える。

当時、多くの人がこの意見に共感したのではなかった。ヴァンダーは悲観主義者だと罵られた。だが、1859年の終わりには、それまで希望に満ちた人々にとって、彼が正しかったことが明瞭になった。ディースターバー

クは、彼のライン新聞の1849年版に次のように記した。「ほとんど全ての教師に大きな敗北感が襲っているという噂がある。このことは説明できるだろう。人はさらに言う。会議や組合への参加が目に見えるかたちで減っていると。だが、それが正当化されることはないことも、説明されるだろう。ちょうど、かかる時代状況において、仲間は、親密に確固として仲間たちと結びつかねばならない。組合から新鮮な勇気、上機嫌さ、快活さ、勤労意欲をもって戻ってくるのだ。教師の仲間から、学校から、このような特質が消えてしまったなら、ドイツの青少年や、教職はどうなるというのだろうか?」。



## 2) C.L.A. プレッツェル「全ドイツ教員組合」 (『ドイツ教員組合誕生 50 年史』 ライプツヒ 1921 年)

1848 年この年は、最初の「全ドイツ教員組合」の誕生年である。既に 40 年代には、その設立構想が何度も浮かび上がった。1843 年にはもう、シュレージエン教員祭の禁止後に、ヴァンダーがライプツヒで参集されるとする全ドイツ教員集会を繰り返して提案した。『ザクセン祖国新聞』(1843 年 76 号)で、ローベルト・ブルームの指示によって起草されたアピールは次のように述べている。「祖国ドイツのいたるところで起こっている。教師の間にも、正義をもって。教師のみが現在の課題を理解しようとしなないなんて悲しいことだろう。さらに、教師の努力において統一がほとんどないなんて。多くの教育雑誌や組合にもかかわらず、ただ教育するだけといった教師根性がいたるところでそのままだなんて。みんなを活気付けるための中心点が欠けているように思われる。毎年盛夏に、ドイツ中からライプツヒの教員組合に集まってくるなんてどうだろう? … というのも、ドイツのりっぱな学校教師は、教育の進歩の旗に誓いをたてた彼らは、今年の 7 月に既にドイツ国民学校教員組合(DeutschVolksschullehrerverein)に集まったから! … ライプツヒに集まった教師たちは、彼らの領域で光の友(Lichtfreund)であろうとする。彼らは教育の進歩を望み、それ故、まだ居眠っているドイツの教師の地位の覚醒を望む。彼らは国民教育を、言葉通り以上に高めることを望む。彼らは学校と生活の宥和を望む」。

同年、マーガー(Mager)は『教育レビュー』(Paedagogische Revue)(第 7 巻)で、同様の考えを主張した。彼は「ドイツ学校組合」の定款のアウトラインを構想しながら、あらゆる等級(クラス)の教師、教育を受けた社会階層からなる学校の友(関係者)(Schulfreunde)、つまりはドイツ語を話す全ての地方の構成員が団結して、全体会議ではそもそも学校制度を、ギムナジウムの教育のためのセクションでも、実科学校や国民学校の制度を、これらの学校種の特別な問題を話し合いにもちこむべきことを主張したのである。この組合は、メンバーを毎年、州集会に招集し、2 年毎に全体集会に招集するものとされたが、この組合に確固たる組織を与えるためにマーガーは、トップに常任の「教育アカデミー」を設置することを提案した。その課題はとりわけ組合の集会を準備することにあった。マーガーは彼の雑誌の後の巻でもう一度この「教育的空想」に帰って

きた(16 巻、1847 年)。

激動の年の暑い夏、この思想はその実現を経験した。4 月 25 日にライプツヒに集まったザクセン教員集会は、8 月にドレスデンで再び全ザクセン教員集会を行うこと、このための準備を委員会に委ねることを決定した。この委員会は、ライプツヒの私講師 Dr. フリック(Fricke)とユリウス・ケル(Julius Kell)、メッケルのトーマス(Thomas)、ならびにドレスデンの Dr. ケヒリー(Koehly)とチェチェ(Zschetzsche)から成り立っていた。この委員会は、もともと、全ザクセン教員組合の結成を促進することを予定していたのだが、とくにヘッセンからの(シュミット Schmitt による<sup>(13)</sup>)、シュレージエンからの(ヴァンダーによる)、オルデンプルクからの書簡によって、同時に、全ドイツ教員組合の設立を提起することを説得された<sup>(14)</sup>。このことは 8 月 4 日のドレスデン集会の第 3 日目の会議で生じた。参加者たちは、Dr. ケヒリーによって格調高く設立が根拠付けられた提案に感激して同意した。それからシュレージエンから急いでやってきたヴァンダーによって、彼によって書かれた呼びかけ<sup>(15)</sup>が読み上げられた。それは、集会によって、同様に、熱狂的な賛意を得た。この呼びかけは次の通りだった。

(13) シュミットは、既に 1847 年のクリスマスに、ユリウス・ケルに、一緒にドイツ教員組合設立の呼びかけを發すること、そして、例えば、1848 年のオースターの週にフランクフルト a.M. で設立集会を行うこととする提案をしていた。ケルは、次のように返事した。アイデアは理解した、しかし、それは教職者の間においてまだ十分に熟していない、それ故、まずはプレスを通して普及されるべきだと。

(14) また 7 月 22 日にクールバッハで集まったオーバーフランケンの教師たちは、全ドイツ教員組合の設立を促進することを決議した。

(15) 「集会の決定によって、私に、全ドイツの教師に呼びかけ文を作成する依頼がきた。私は、協議が行われていた孤児院教会を去って、トランペット城つまり私の宿舎に行き、ドイツ中に広まった呼び

かけを書いた。それは、ほとんど重要な変更もなく採択された」(ヴァンダー：彼の息子によって刊行された1903年の記念誌参照)。

ドイツ教員に告ぐ！

ドイツ国民は目覚めた。新たな新鮮な生命が血管のなかで脈動している。メーメルロシアの風から、モーゼルのフランスの波打ち際まで、我々は統一ドイツへの呼びかけを聞く。数世紀の間、無益に切望されてきたことが、今や生命を得たというべきだ。フランクフルトのパウル教会は、ドイツの統一と自由の建物を建てるだろう。だが、真の精神がそこに息づいていないのに、何と、この素敵な建物が利用されるなんて！ この真の精神を、それが居眠っているところで、国民のなかで目覚ますこと - それがかぐつたり寝込んでいるところで力づけること - それがかぐつたり道で迷っているところで導くこと - それがか、そのほとんどがドイツの教員の手中にある、ドイツ国民教育の課題である。彼らが、いかに現状に立ち向かうかという課題を達成できるのは、彼らがこの偉大な目的のために団結したときだけである。団結の願望は、もちろんずっと以前から教師たちにはあった。相互の刺激と啓蒙のために協会(Verein)は作られた。だが、これは現在にとってはもはや不十分だ。なぜなら協会は、古い時代にとっては十分だが、国民教育に関する非常に狭い考えに立脚しており、それ故、特定の学校の教師だけを常に抱えていた。各学校種は、他校種の教師とは故意に関係を絶っていた。労働者(Arbeiter)は、国民教育の多様な階梯で働いていたので、お互い、つんとして、高慢に見えていた。天上高いところにいた人は、地の底の深いところにいた人の仕事を認めがたらない。しかも、中層から外を見上げている人は、自分たちよりもまだ上層があることを感じていたが、自分たちよりも下層で働いている人たちを無視出来ることを神に感謝した。統一された強いドイツ国民を求める声が、真実となるであろう時に、そんなことが続いてはいけぬのだ。かの古い精神は、まず最初に教師の頭から追い払われねばならない。そして、新しい精神が教師の頭に入り込まねばならない。そうすれば、新しい精神は聖霊降臨祭を祝ってドイツ国民に流れるのだ。だから、あらゆるドイツの地方から、すなわちプロイセン、チューリンゲン、ハノーバー、ヘッセン、ビュルテンベルクから、ドイツの教員の団結に確かな契機を与える「第二回ザクセン教員集会」に注意を促す声が発せられているのだ。だから、君たち、ドイツの教師たち、青年の教師たちに、いま、われわれから全ドイツ教員組合結成の呼びかけが発せられるのだ。すなわち、ドイツの青少年の教育に従事している全ての人に。それは、託児所(Bewahranstalt)の幼子に、母国語の最初の音節を教えている君たちであろうと。大きく成熟した生徒にホメロスやキケロを講読して

いる君たちであろうと。児童にABCを説明している君たちであろうと。学問の聖なる殿堂へ青年を導いている君たちであろうと。インテリヤプロフェッショナルを育てている君たちであろうと。いまいるか、未来のメシアを信じている君たちであろうと。ローマか、ドイツ・カトリックを自称している君たちであろうと。厳格な信仰の教団(Gemeinde)か自由教団(freie Gemeinde)に所属する君たちであろうと。一つの仕事を為そう、われわれは団結しよう、進歩のために！ 全ドイツ教員組合に結集しよう！ その目的は、ドイツ国民学校の全ての学校組織における統一である。この全ドイツ教員組合の設立あたり、われわれは次の提案をしたい。各ドイツの領邦(Land)は領邦組合をつくり、領邦組合は地区(Bezirk)や郡(Kreis)の組合を基盤とする。これらの領邦組合から、全ドイツ教員組合大会に代議員が送られる。われわれは、各領邦で直ちに、全ての学校の教師からなる委員会が招集され、教員組合を組織することを希望する。今日、ドレスデンでザクセン領邦組合が設立された。この組合は、署名した非ザクセン人の教師と共同してドレスデンをしばらくは中心地としないことを決めた。同時に、今年9月の28日と29日、必要なら30日も、アイゼナハで全ドイツ教員組合の第1回大会を開催し、そこにドイツ中の全ての教師が喜んで招聘されること、あらゆるドイツの地から代議員が必ず期待されることが決議された。「ドレスデンの全ドイツ教員組合の暫定的理事」に宛てた加入宣言やその他のあらゆる手紙は、郵便料金別納でいい。全ては統一の旗の下に集まる。ドイツの教師たち、君たちを分け隔てている障害物をぶち壊すのだ！ われわれは兄弟として、われわれに委ねられた偉大なる仕事、ドイツ国民教育に従事するのだ！

8月5日に集まった「全ドイツ教員組合暫定的理事」による呼びかけは、以下によって署名された。ベルトハイト(Bertheit)・市民学校校長、ランスキー(Lansky)・郡学校教師、Dr. ケヒリー(Koechly)・ギムナジウム教師、シュテグリッヒ(Steglich)・師範学校校長、チェチュ(Zschetzsche)・市民学校校長、これらはみなドレスデンの人。さらに、カスパリ(Caspari)・ケムニッツの副学長、ドレスラー(Dressler)・パウツェンの師範学校校長、フェルドナー(Feldner)・ハイニヘンの上級教師、フィンケ(Finke)・プラウエンの音楽教師、Dr. フリッケ(Fricke)・ライプツヒの私講師、ゴルニッシュ(Gollnisch)・シュティエガウの教師、グュンネル(Guennel)・プラウエンの教師、ホイジンガー(Heusinger)・ローダッハ(コーブルク)の教師、ヒーンツシュ(Hientzsch)・ポツダムの師範学校校長、ケンメル(Kaemmel)・チッタウのギムナジウムの副校長、ケル(Kell)・ライプツヒのザクセン学校新聞の編集者、Dr. レーデブーア(Ledebur)・マグデブルクの実科・商業学校校長、リン

デマン (Lindemann)・ツビッカウのギムナジウムの教頭、リュッツェルベルガー (Luetzelberger)・アルテンベルクのギムナジウム教師、メレー (Meloe)・レーバウ近郊の大デーザの教師、ノアック (Noack)・エールバッハの教師、ザムラー (Sammler)・エルスニッツの教師、ショルツ (Scholz)・プレスラウの師範学校教師、シュルトハイツ (Schultheiz)・ニュールンベルクの教師、トーマス (Thomas)・メッケルンの教師、ヴァンダー・ヒルシュベルクの教師、ツァイス (Zeiss)・イエナの学校長<sup>(16)</sup>。

(16) 署名リストは、その一覧表作成が若干急がれたのだが - ヨハン・シュミットの名前さえ、そのたった一つの名前を挙げるのも、徒労に終わったりした - 幾人かの当時の有名な人物、そう、ケヒリー、チュチュ、ケル、ショルツ、ヴァンダーと並んで、三人の師範学校長をあげている。ドレスデンのシュテグリッヒ (後に、長期にわたって全ザクセン教員組合理事、1870 年ムーツシェンで上級牧師として死去)。パウツェンのドレスラー (Dressler: 熱心に、Fr. Ed. ベネッケ (Beneke) の精神的・教育的思想を教師に広め、宣伝したことで有名、1867 年に死去)。そしてポツダムのヒーンツシュ (かつて、イベルドンのペスタロッチの同僚。それから、ノイツェレ、プレスラウ、ポツダムの師範学校教師もしくは学校長、最後は、ベルリン盲学校校長。1856 年死去。とくに音楽教育や音楽祭の導入で貢献する。それ以外では、人間として教師として素晴らしい聖者)。さらにチッタウのギムナジウムの副校長で、フランクフルトの国民議会議員 H.J. ケンメル (Kaemmel: 著名な教育学者、とくに学校史の領域で、1881 年に死去)。そしてマゲブルク出身の商業学校校長 Dr. レーベプーア (Lebebur: 1851 年死去、彼についてはディースターベークの 1852 年の年報参照)。他は、後に多くの郡で有名になる、だからとりわけ、ベルトヘルト (Berthelt) やランスキー (Lansky: 1866 年からは学校長で、長い間、ザクセン教員組合の書記で、ほぼ半世紀にわたってザクセン学校新聞の編集長、1897 年死去)。呼びかけに署名した人たちのなかで最も長生きしたのが、当時私講師で、後の上級教会顧問で大学教授であるライプツヒの神学博士フリッケ (Fricke: 1908 年 3 月 30 日に 86 歳で死去)。

ケヒリーは、8 月 27 日にヨハン・シュミットに次のように書いた。「第 2 回全ザクセン教員集会は、とりわけ次のことによって重大な意義をもち、単なる同日の集会以上のものとなった。すなわち、この集会の参加者は、全ザクセンのみならずドイツの教員組合の発祥の地にいたのであり、ドイツの教員組合活動の偉大な転換点にい

たのである」。

このドレスデン集会についてザクセン当局が知ることは、決して魅力が無いことではなかった。市委員会 (Rat) は、孤児院教会を集会所として使用出来るようにした。教会監督は、賛成しなかったが、政府は「彼の異議を共有しようとはしなかった」。集会の前に政府は、以下のことを告知した。集会は政府の意思に何ら反しておらず、完全に政府の希望に従って開催される。それ故、ザクセンの教師に集会参加に必要な公欠を認めることに何らの障害はない。集会の来賓には、国家や教会当局、身分制議会、ドレスデン市委員会や市議会議員団のメンバーがいた。文化相フライヘル・フォン・デア・プホルテン (Pfordten) も、多くの会議の話し合いに臨席し、「最も熱心な聴衆の一人」だった。別れ際に彼は、集会参加者に、審議の結果を政府に信頼して提示することを求め、それを誠意をもって試行し顧慮することを約束した。(ロイシュケ (Leuschke)、[全ザクセン教員組合創立 50 周年記念誌] 参照)。

そして、ドイツの各地から約 300 名の教師たちの参加の下 - ただ、ニュールンベルク、ホーエンツォレルン、ブラウンシュバイクや自由都市ブレーメン、リュューベック、フランクフルトは代表を送らなかったが - 既述したように、9 月 28 日、29 日、30 日にアイゼナッハで計画されていた集会が開催された。ケヒリーとチュチュが議長を務めた。集会は、報告が伝えるように、ドイツの教師界の統一に対して最も素晴らしい期待を目覚めさせる友愛精神によって担われた。最初に、新たな同盟 (Bund) の会則が定められた。第 1 章は次のように謳った。「全ドイツ教員組合は以下の目的をもつ。a) ドイツの様々な学校のあらゆる教師が結びつくこと。b) 民族的・ドイツ的、倫理的・宗教的国民教育を促進するために整った学校・教育制度を創作し、継続すること」。次の章は、組合の組織について扱っている。組合は領邦組合の集合体によって形成される。各領邦組合は、領邦や州の教員組合を含み、郡以下は自らの判断で具体化され組織化される。全組合の機関は、通常は、例年開催される全ドイツ教育集会である。ここから役員が選出され、その指導委員会は全ての組合の先頭にたつ。全ドイツ学校新聞は、あらゆる組合問題の恒常的中心となる。

会議の修了後に議長が、集会の鳴り止まぬ歓声のなかで次のように宣言した。全ドイツ教員組合が設立された! 本部所在地としてドレスデンが選ばれ、組合の機関誌として「全ドイツ教員組合新聞」が組合役員の手で創設された。<sup>(17)</sup>

(17) アイゼナハ集会の参加者リストから著名な名前を挙げると: ベルトヘルト (Berthelt・ドレスデン)、Dr. クレーメン (Clemen・カッセル)、フェルジング (Foelsing・ダルムシュタット)、Dr. フリッ

ケ (Fricke・ライプチッヒ)、ゴルニツシュ (Gollnisch・シュトリーガウ)、ヒンツェ (Hintze・ベルリン)、ケル (Kell・ライプチッヒ)、ケーラー (Koeler・ブレスラウ)、Dr. レーデブーア (Ledebur・マグデブルク)、リーバーマン (Liebermann・エシユベージェ)、メルゲート (Merget・ベルリン)、Dr. ミュッケ (Muecke・ベルリン)、シュテーグリッヒ (Steglich・ドレスデン)、シュミット (Schmitt・フランケン＝クルームバッハ)、キーク (Cilo・エアフルト)、フィリップ・バッケルナーゲル (Wackernagel・ヴィースバッハ)、ツァイス (Zeiss・イエナ) - 会議の終了後、参加者の大部分は、学生たち、合唱団員ならびにアイゼナッハの民主的組合に導かれて、団結祭が祝われるワルトブルクへの祝祭隊列に入った。

ドレスデンの呼びかけは、ドイツ中に反響し、フランクフルトの10月議会で取り決められた努力を通じて、多くの領邦で、領邦組合ないし州組合の結成につながったが、それらは、確かに、支部組合を得ようと無駄な努力をした「中央組合」につながるものにはしばしば限定されたものだった。また、大同盟に際しては、決して全てが全ドイツ教員組合に加入したのではなかった。むしろ連合は、多くの場合、それぞれのスクラップ・アンド・ビルドが完成してはじめて約束された。だが、そうなる前に、そもそも組合の寿命は終わるに違いなかった。また、多数の発生した個々の国民学校教員連盟 (Volksschulelehrerverband) は、しばしば、全ドイツ教員組合があらゆるグループの教師たちを繋ごうとしていることに立腹したように思える。

次に掲げるものは、手元にあるそれらについての報告に関する限りでは、当時の全ての領邦組合や州組合を包括している。ドイツ教員組合には、1849年8月までに次のものが加入した。シュレージエン州、ザクセン州、ポーゼン州、メクレンブルク・シュトラーリッツ、オルデンブルク、アンハルト、ヘッセン選帝侯国、ザクセン王国、ゴータ、コーブルク、マイニンゲン (ザールフェルド郡)、シュバルツブルク・ゾンダーハウゼン、ナッサウ、ヘッセン・ダルムシュタット、バーデンそしてバイエルン。

当時、プロイセン教員連盟によって次のことが言われた。

1. 自由な国民学校のためのシュレージエン中央組合が、1848年7月2日に、ブレスラウで設立され、組合の最初の年度の終わりには40の支部組合を数えるに至ったが、2年の存続後には既に反動によって解散を余儀なくされた。
2. ヴェストファーレンの国民学校教員組合は、1849年の5月30日にハム (Hamm) で設立され、約17の郡 (Kreis) 組合をもったが、年次集会

(Jahresversammlung) 以上は一度も行われなかった。

3. ポーゼン州中央組合は、1848年9月にポーゼン教員組合によって設立されたが、最初から、ポーランド人教師の無関心さのなかで受難していたが、1949年には7つの郡組合をもっていた。
4. ザクセン州の州組合は、1849年4月12日にマグデブルグで、当地の郡組合の提案で設立された。
5. ラインの国民学校教師の州組合は、1849年10月にドイツ (Deutz) で設立され、1850年には42の郡 (Kreis)・村 (Ort) と772名のメンバーを数えた。
6. プロイセン州の州組合は、1850年5月30日に、ケーニヒスベルクで当地の教員組合の提案で設立された。

－ブランデンブルクやボンメルンでは、大連盟が計画されたが、実現されなかった。前者の州では、フランクフルト (a.O) の公的州会議を機に、設立が見込まれた。だが、その準備を任された設立委員会は、1849年9月には、教師の無関心さ故に、解散した。1848年10月には、ここで、中等学校制度のための州組合が生じた。－

なお強調に値するのは1849年3月28日に設立された全ベルリン教員組合である。そこには、当時、ベルリンで発生した4つの教員組合<sup>(18)</sup>のたいていのメンバーが集まった。ディースターベークは議長だった。この組合から、シュレージエンの役員やザクセン州の賛成のなかで、プロイセンの州組合に、「全プロイセン教員組合」「または、帝国組合」と、ライン新聞の当該の発表では怪しげに言っているが) 設立のために、代表者集会をするための招待状が用意された。もちろん、この集会は政治的事情で開催できなかった。だが、ディースターベークは、自らの「ライン新聞」(40巻)で、見込まれる「全プロイセン教員組合」の規則を公表した。ここでは、次のことがその目的として述べられた。「プロイセン国家の全ての教師を統合すること、それは a) 教師の間で教育学教育を促進するため、b) あやゆる校種の教師を交わらせるため、c) プロイセンの学校制度に関する問題について、何度も審議し、決定を一致させるため、d) 個々の州の教員組合を統合し、それによって郡の教員組合を統合するため」。この組合だが、ベルリンに布告された戒厳令がすぐさまこの組合の生命を吹き消し、このような目的を実現させなかったことは、当然だった。1852年のナツケシェ年報 (Der Nackesche Jahresbericht) は、「ドイツ教師・教育組合」の部門に簡潔な注釈を残した「プロイセンには、もはや、そのような組合はもともとない」<sup>(19)</sup>。

(18) これらは年長者教員組合、若手教員組合、見習い教員 (Geselle) 組合、校長組合だった。

(19) もちろん言葉通りにそう取ることはできない。



だが、なお存続していた個々の組合は、最も小さな郡での活動に制限されていたか、学校政治的關係においては完全に色のない活動のみを行うことを許されただけに違いなかった。

北ドイツの他の領邦教員組合は以下の通りだった。

1. ハノーバー王国の国民学校教師の中央組合は、1848 年 10 月 2 日に、ハノーバーの集会で設立された。当地の教員グループが招かれたが、とくに Fr. ベーレ (Behre) が彼らによって名指しされている。提案は、オスト・フリーゼンの指導者ズンデルマン (Sundermann) に由来した。最初の二人の議長はオスナーブリュックのローゼンタール (Rosenthal) とリュエネブルクのシュタインフォルト (Steinvorth) で、彼らは、1849 年に国民学校教師の代表者として最初の会議にきた。組合は、11 の州組合と約 100 の個別組合 (Einzelverein) を有した。だが、1854 年の中央 (Haupt) 集会には、3 つの州組合が参加したに過ぎなかった。その結果、その後は、年にたった一度の「全ハノーバー教員集会」を召集することが決められた。だが、さらに、数年後には断念を余儀なくされた。たった二つの州組合、オスナーブリュックとリュエネブルクは、反動の時代を耐えた<sup>(20)</sup>。オスト・フリースラントでも、年に一回集まる自由会議の形で、組合の活動が持続した。

(20) オスナーブリュック地区の福音派の教師たちは、それでも活動家の影響で、1853 年に教会の役員会によって自由な会議を開くために、月に一度学校を休校することが認められた。

2. ヘッセン選帝侯国の教員組合は、1848 年 4 月 28 日に、グレーフェ (Graefe) によって起草された呼びかけによって、カッセルに設立された。この組合をナッケ (Nacke) は、最も良く組織されたドイツ教員組合と呼び、ディースターベークは、この組合について、より良い組織と、より活動的な生活が、いかなる他のドイツの州にない教師を作り上げたと判断した。この組合は、21 の「郡学校教会会議 (Kreissschulsynode)」から成り、それぞれは例年少なくとも 2 回会合をもった。頂点には、カッセルの指導的中央委員会がいた。この委員会は、年に一度、領邦 (Land) 会議を召集したが、そこには郡会議が一人の代議員を送った。選帝侯国の 1380 名の教師のうち、約 1200 名が組合員だった。教員組合を公的監視下に置くという 1852 年の反動的政府のハッセンプフルク (Hassenpflug) の指令は、花盛りの組合の生命を終わらせた。50 年代の組合の集会は、聖職者議長の下、公的な会議である。組合相互の結びつきも、断念された。

3. 全メクレンブルク教員組合は、シュテルンベルク

で 1848 年に設立され、16 の郡組合を数えたが、すぐさま、潰れた。

4. 全メクレンブルク=シュトレリッツ (Strelitz) 組合は、1848 年にシュタルガードで設立されたが、同じ運命をたどった。

5. 全シュレースヴィヒ・ホルシュタイン教員組合は、1849 年 10 月 10 日にノイミュンスターで、シュリヒテインク (Schlichting) によって指導された集会で設立が基礎され、1850 年 3 月 22 日にキールで最終的に設置された。1850 年 12 月にはもう 50 の組合が加入を申し込んだ。だが既に、シュレースヴィヒの教師たちは、1851 年の集会から距離を置かざるを得なくなり、その次の年には、さらなる参加が禁止された。その後、組合は「全ホルシュタイン教員組合」となった。シュレースヴィヒでは、組合の活動が、1851 年 7 月に設立された「南ユトランド公正学校教員組合」のように、デンマーク人的立場に配慮しないかぎり、組合の活動は中止した。ホルシュタインの組合は、1863 年まで相当規則的に年次集会をもった。

6. 全オルデンプルク教員組合は、1851 年には、なお 126 のメンバーを数え、50 年代にはまだ年に一回の中央集会を開催した (たいていは、ファーレルのバルアウフ (Ballauf) の主導下で)。10 年後には中止となった。

7. アンハルト教員組合は、1848 年 12 月 21 日 22 日に、3 つの地方組合ゲーテン、デッサウ、ベルンプルクの連合によって設立され、当初は 22 の郡連盟 (Kreisverband) を数えたが、既に 1851 年には「状況の不利からというよりも、アンハルトの教師の小心、優柔不断、無関心によって」消滅していった。

8. ブラウンシュバイク領邦 (Land) 教員組合は、1848 年のしばらくのゴタゴタの後で、1850 年 10 月 2 日に、ボルフェンビュッテルの全ブラウンシュバイク教員集会で設立された。同集会ではベーレン (Behren: 当時はベルスムの、後にはブラウンシュバイクの孤児院教師で、領邦組合の長年の議長、1901 年死去) が動議を出し、ディースターベークも参加した。運営は、当時のブラウンシュバイクの指導者で、「ブラウンシュバイク国の学校教師の寡婦や孤児を支える補助組合」の設立者にして、ルックルムの学校教師で領邦議会議員であるシュミット的手中にあった。この組合は存続したが、実際上は、10 年間、年毎に開催された集会でのみ、その姿を現したに過ぎない。本物の領邦教員組合は 1875 年になってはじめて設立された。

9. 「ヴァルデック侯国とフィルモントの領邦学校会議 (Schulsynode)」は、既に1843年に設立され、1850年に再建された領邦組合から生じた。1852年、この会議は4つの郡組合と145人のメンバーを数えた。組合は存続した。その議長であるヴィルデンプルクの校長(後年、牧師で教会会議役員)シュナイダー (Schneider) は、また、全ドイツ教員集会の委員だった。1869年、長い静止状態から、組合の活動は新たな活力を得た。

中部ドイツの組合の頂点には、全ザクセン教員組合があった。既述したように、1848年8月5日に、第二回ザクセン教員集会を機に、ドレスデンで設立された。組合は存続したが、役員自身は1850年に解散を命じられた。1874年まで組合の活動は、補助組合の要件を扱う年毎の全体集会の開催に、全く制限された。つまり、ペスタロッツ組合(1844)、健康保険(1851)、火災保険組合(1852)、退職組合(1855—83)の要件が論議の中心となった<sup>(21)</sup>。1874年になってやっと、新たな設立が、生き生きとした組合を創造した。それまでは、アウグスト・ベルトヘルト (August Berthelt) が頂点にいた。

(21) 以下の事情は、当時の組合の活動にとって特徴的なことだ。1855年、役員はこの年の全体集会を、審議するような差し迫った議題はないという理由で延期した。

比較的大きなチューリンゲンの連盟については、以下の通りである。

1. 1848年9月20日に構想され、1849年4月25日に最終的に設立されたゴータ教員組合には、1850年5月に、既に革命の年の6月にモリッツ・シュルツ (Moritz Schlitz) の指導下で集まったゴータ「国民学校教員組合」が加わった。この組合は、それ以降、組合の礎石となったが、組合の集会は、もう1852年からは通常、国民学校教師のみが参加した。1860年まで指導は、シュルツ校長の手中にあった。

2. 1848年に活動に入ったコーブルク公国の領邦教員組合。1851年からは、かつて隆盛だった組合活動への参加者は減り、1853年には個別組合は全部残らず潰れた。それで、次の年—組合史では唯一存在する事実だが—政府は、驚くことに、組合への幾ばくの影響さえ要求することなしに、領邦組合の再生を提案した。いや、1855年に政府はその提案を繰り返したが、個別の村組合 (Ortverein) が復活しただけだった。

3. マイニンゲン公国の教師の領邦組合は、1848年、20の個別組合を包括したが、もう次の年には解消したと捉えられている。1859年から、再び全体集会は開かれ、

1886年に領邦組合が活動した。

4. 1848年9月20日にロンネブルクで設立された全アルテンブルク領邦教員組合は、1853年来、形式上は解消されることなく、徐々に廃れた。

5. 1848年に集合したシュバルツブルク・ゾンダーハウゼン小国の教員組合。

6. シュバルツブルク・ルーデルシュタットの領邦教員組合は、1851年に設立されて、80年代の中頃まで存続した。1898年に、新たな領邦組合が活動した。

7. チューリンゲン森の教員組合は、ゲーレン地区 (Bezirk) のシュバルツブルク・ゾンダーハウゼンの教師と、イルメナウ地区 (Bezirk) のワイマールの教師が統合したもの。

ナッサウの教師も、中央組合のプランをもっていた。ヴィースバーデンの組合の提案で、1848年10月に、ドイツの全体集会で、領邦組合の設立が決議された。だが、状況は実行を阻害した。ヴィースバーデンの組合も、解消した。—フランクフルト (a.M.) では1848年に、今でもなお存続している「全教員集会」が活動した。

南ドイツでは、ヘッセン、バーデン、ビュルテンベルク、バイエルンに組合があった。

1. ヨハン・シュミット (Johann Schmitt) の提案で、1848年6月14日にフリードベルクに創設されたヘッセン・国民学校教員組合は、約700名のメンバーをもつだけだったが、そもそもほとんど活動はなかった。1850年の終わりに、禁止された。公的な会議が、自由な組合に代わった<sup>(22)</sup>。

(22) 「多くの地区 (Bezirk) でディースターバークの全ドイツ教員新聞や、園丁 (Gartenlaube) などを読むことが、許可されていないことは事実だ」と、まだヘッセンの1863年の全ドイツ教員新聞が報告している。

2. 同様の運命が、もっと早く全バーデン教員組合に現れた。既に50年代のはじめに、バーデンでは全ての組合の活動は停止した。「私は間違っていないと思う、というのも、毎年すごいことに、多数の—自由な福音派だけだが—教師たちが集まったからだ」と1853年にバーデンの同志は、全ドイツ教員新聞で述べる。1860年の政治的変化は、ここで学校の領域でも、新たな自由な時代を作った。自由な会議の禁止は破棄され、長期にわたる教員への暴力的で抑圧的な活動や営みが、ほとんど嵐のようなかたちで顕在化した。

3. それに対して、上述したように、既に 1840 年来存続するビュルテンベルク教員組合は、あらゆる敵対にもかかわらず、また、1847 年から 52 年にかけて、メンバーが 1700 名から 1200 名に減少したにもかかわらず、その存続を継続させることを確実にすることに成功した。この組合を、既に長きにわたって存続している「実科学校教員組合」とともに、全ビュルテンベルク教員組合へ統合しようとする 1848 年から 49 年にかけて追求された意図は、実行されなかった。1848 年に、Dr. リエック (Rieck) からカール・ハルトマン (Karl Hartmann) に代わり、1882 年にクリスティアン・ライストナー (Christian Laistner) が続いた。両者のおかげで組合は、まず第一に、満足できる発展を遂げた。その発展とは、既に 1856 年に試行され、1865 年に実現された「カトリック国民学校教員組合」の設立と、1870 年に活動に入った「福音派教員組合」が基本的には阻止されなかったことである。

4. バイエルンでも、1848 年は、教員組合の結成に向けての多様な提起がなされた。とくに、フランケンとラインプファルツが活発に運動に参加した。提案は、20 年代と同じく、ニュールンベルクの教員組合に由来した。この組合は、既に 3 月 12 日に、全てのバイエルンの国民学校教師に呼びかけを発した。そのなかで組合は、教師たちに力強い一致した行動を促した。陳情書や請願書が、ニュールンベルクからバイエルンの身分制議会やフランクフルト議会に届いた。180 人の教師がシュバーバッハに集まった集会は、ニュールンベルクの組合に、「中央組合」として、全バイエルン組合の設立に取り組むことを求めた。実際、既に次の月々には、フランケン、オーバープラッツ、シュバーベンで 37 の支部組合が続いた。1849 年 6 月には、バイエルンの組合は、ドイツ教員組合に加盟したが、既に 1850 年には禁止された。ラインプファルツでも、多くの地区組合 (Bezirkverein) が生じたが、それらと郡組合 (Kreisverein) の連盟は、直接的にすぐさま、反動として現れた。

オーストリアでは、1848 年以前には、何らの教員組合制度はなかった。同年 5 月に、ウィーンで教育組合が、活動に入った。この組合は「様々な学校の教師の共生」を目論み、さらに、全てのオーストリアの教師の組織化を予定していた。その議長には、インテリで自由主義者の工業専門学校 (Polytechnikum) 教授シュルツ・フォン・シュトラスニツキ (Strassnitzky) が就いた。彼は後年、聖職者の影響のなかで存続した「全オーストリア教員新聞」の編集者で、ディッテス (Dittes) や M.A. ベッカー (Becker) の敵対者だった。組合は、(1848 年 10 月にはもう) 反動によって弾圧されたとき、地方に既に支部をもっていた。

全ドイツ教員集会は、反動 (Reaktion) の暗い時代に、ドイツの自由意思をもつ教師が集う中心だった。彼らは何を目標としたか。彼らのリーダーである Dr. モリッツ・シュルツェ (Moritz Schulze) が、最初の会議 (ピルモント 1854) の講演で表明した原則のなかで次のように言い表されている。全ドイツ教員集会は、かくあるべき。a) ドイツの教師の親交をはかること、b) ドイツの学校制度の促進を援助すること、c) 教職に対する情熱を育てること、d) 教職に対する能力を高めること。これらの目的を獲得するための最初の制約として、原則の第三に「多くのサイドからこの集会在不信感で見られている、この不信の排除」が挙げられた。この不信は、支配権力においては、非常に強いまだだった。主に、1853 年のザルツゲンの会議<sup>(23)</sup>を通じて引き起こされたプロイセン文化相フォン・ラウマー (Raumer) の 1854 年 1 月の回状は、「学校の良き方向にとって有害な疑わしい特質を想起させる、いわゆるドイツ教員集会」に敵対して、学校庁に対して、教師がこの集会に参加することを禁止すること、禁令を犯したものは懲戒処分をすることを要求した。集会に対するこのような声は、決して、プロイセン政府にのみ存在したのではなかった。バイエルンでも、しかも同年に、教師に参加が禁止された。しばしば、この時期に、名前と住所を示す勇気をもたない参加者が現れた<sup>(24)</sup>。ほんの二三の小国や自由都市が、あえて、集会を受け入れただけである。参加者の数も減少した。それは、1851-60 年の 10 年間で平均して約 270 名だった<sup>(25)</sup>。だが、それから時代状況に喚起されて、上昇をみた。1860 年 6 月 5 日、エルンスト 2 世公自身が臨席した<sup>(26)</sup> コーブルク集会の直後、プロイセンで 1854 年の禁令が解かれた<sup>(27)</sup>。同じことが、1863 年のバイエルンでも起こった。1861 年の集会は、ケーテンでは、一層貧弱な参加者だった。だが、次の年のゲラでの集会では、参加者数は倍になり、マンハイム (1863) やライプツヒ (1865) では 2000 人を越えた。参加者数の最高は、1869 年のベルリン (4 千人以上)、1870 年のウィーン (ほぼ 5 千人) に達した。1867 年には、プロイセンの都市でははじめて、ヒルデスハイムで、集会が開催された。1868 年にはカッセルで。そこは、18 年前は集会の場所の提供を拒否したのだが。1869 年には、既述したように、プロイセンの首都で。文化相フォン・ミュラー (Muehler) も、この集会に臨席した。だが、彼は 1867 年にはなお、ある布告で、全ドイツ教員集会の話し合いは、それによってキリスト教的国民学校に秘密の影響を少なくとも与えるだろうことに、十分な保障を指し示してはいないと記した。この集会がこの時期、しばしば代議士を通じて、国家やゲマインデの当局によって代表を派遣されたことが、この集会が得た意義として示された。

(23) この集会では、フレーベルの精神的友で縁戚関係にあるヴィルヘルム・ミッデンドルフ（1853年11月死去）が、フレーベルの幼稚園に関する講演を行った。そして集会は、Th. ホフマン(Hoffmann)の動議に基づいて—もちろん、ブルクヴァルト(Burgwardt)が発する異議が無くはなかったが—フレーベルの教育方法を、真に合自然的で、発達に即した、何よりも自己活動を促すものとして承認し、フレーベルの幼稚園を最も適切な国民学校の前段階として宣言した。だが、ラウマー相は、既に1851年に、プロイセンでフレーベルの意味での幼稚園の設立を禁止していた。というも、彼は、設立者の甥で、熱心な民主主義的、社会主義的勢力の代弁者カール・フレーベルが、パンフレット「女子専門学校と幼稚園」で、自らの叔父の活動を熱く支持していた状況から、幼稚園は若い方のフレーベルによって主張される社会主義的制度、つまり、青年を無神論へと育てることが計算される制度の一部を構成すると結論付けねばならないと信じたからである。—当時のしばしば強い感情の沸騰に支配される時に特徴的で、今日のわれわれにとっては、ほとんど奇妙なものとして触れられない事象として言及されるの

は、ディースターベークが、ミッデンドルフの講演によって感涙し、講演者が終了後、彼を、集会の喝采のなかで抱擁したことである。

(24) まだ、コーブルク集会(1860)の参加者名簿には、6人の参加者が「N出身のN.N.」と記載されていた。

(25) 最も少ない参加者は、第6回ピルモント集会だった。たった83名の参加者だった。

(26) また、1863年のマンハイム集会は、2日目に、領邦君主であるフリードリッヒ・フォン・バーデン大公の臨席を得て、彼による短いスピーチで歓迎された。

(27) 集会委員会によって、プロイセン文化相ベーマン・ホルヴェーク(Bethmann=Hollweg)に宛てた禁令廃止の請願が、次のような返答、つまりプロイセン教師からは、そういう希望が出されておらず、したがって、閣僚にとっては、禁止令を廃止する何らの動機はないと返答されていたが、廃止が成就した。

### 3) C・ヴァインライン『全ドイツ教員集会史』1887年より、 「全ドイツ教員集会の敵と友」および「全ドイツ教員集会の議事内容」

#### 全ドイツ教員集会の敵と友人

「全ドイツ教員組合」の設立者や全ドイツ教員集会における代弁者たちに対しては、いかなる側面からも、次のことの正しさが拒否されてはならない—仮に、全ての言葉がいたるところで完全に承認される必要がなかったとしても—彼らの行為は、学校に貢献し、正義のみを欲し、大部分は今やこの数十年來、多くのドイツの国家で合法的に承認されている諸要求のみを据えた誠実な意思に由来していることである。

多くのドイツ政府は、集会を長きにわたって非常に疑い深く見ていた。というのも、反動家の熱心な捜査は、集会に「扇動家」の傾向をみていたからである。このような悪い見解の結末が禁止令だった。

「全ドイツ教員集会」での自由な意見表明は、政治的關係における保守派や教皇至上主義者や、キリスト教的關係におけるオーソドクス派にとっては、目の中の特殊なトゲだった。青少年の精神的成長を阻害するために、「解放」を求め続ける教師に対抗して、教師を屈辱的な境遇や従属状態に置いておこうとした。というのも、彼らは、自由な状況が続けば、神を冒瀆するような考えにつながる不平や不満が出てきて、扇動家の口から、「そそのかされた人」に伝わるに違いないと信じたからだ。ほんのわずかな証拠のみが、この主張を証明するという。

Dr. シュルツェ (Schulze) 教区監督は、とくに、「国民学校における道徳と宗教」(ザルツンゲン) に関する講演で述べた。彼の見解によれば、この授業はドグマ的な性格よりは、信仰心を起こさせる性格をもっていなければならない、また、子どもの年齢に相応していて、年齢段階の教養程度と矛盾する何ものをもってはならなかった。ディースターベークは同様のことを述べた。両者に関して、彼らは青年を惑わし、宗教を蔑ろにしようとしていると言われた。

子どもの友の Fr. フレーベルは、「社会主義システムに親和的」な彼の幼稚園理念によって、子どもに「無神論の基盤」を接種しようとするものとされた。ヘッセン侯国のビルマル (Bilmar) は、集会を「邪悪」なものともなし、議論を「いかさま」と明言した。—『ヘッセンの国民の友』(1853年1月)によると、ザルツンゲンに数百人の革命家が集まっていた。参加者の大多数は、

幼稚園に賛成だった。「幼稚園で行われる幼稚園教育は、革命に貢献するものだ—そして、言葉もしくは行為によって幼稚園に賛成するものは、革命家そのものである」と述べる。(革命の政治目標を追求ユリウス・フレーベルと、教育家フリードリッヒ・フレーベルが取り違えられたので、フレーベルの名前は、幼稚園問題を非常に深刻にし得るものだった)。同時期、教員は、とくにドイツの国民学校教師は、学者や「文化史家」による厳しい非難や自尊心を辱める批判そのものに耐え忍ばねばならなかった。

「不信心」な全ドイツ教員集会の成長は、60年代において、敵対者に対して、死に体を装っている教員集会に、言葉のみならず行為でもって敵対行動をとらせた。全ドイツ教員集会がマンハイムでその旗を広げたその同じ時に、敵対行動として、「キリスト教」教員集会がアイゼナハで開催された。福音派の学校組合の首脳 (ミュールハウゼンの Dr. ラスパー (Rasper) 副校長) によって、全ての「十字架のキリスト教徒の友」が招聘された。当地では、自由にオープンに協議され、何らの秘密ももたれなかったが (全ての議事が速記されたように)、ここでは、深い秘密に身を包まれていた。

#### 全ドイツ教員集会の議事内容

##### 1. アイゼナハ

あらゆるドイツの地方から来た約 300 人が、偉大なるドイツ教員同盟 (Bund) の設立を助けるために、目覚めたザクセンの同僚の隊列の呼びかけに、喜んで従った。1848年9月28日にアイゼナハで最初の会議が開催された。アイゼナハの上級教会役職者 (Oberkonsistorialrat) トラウトフェッター (Trautvetter) が、アイゼナハの名において、歓迎をした直後に議長に選ばれた。共にライプツヒ出身のギムナジウム教師 Dr. ケヒリ (Koechly) と教師チェチェ (Zschetzsche) が議事をはじめた。(記録係には、アイゼナハのシュレーミルヒ (Schloemilch) 教授、イエナのツァイス (Zeiss)、ケーテンのバルダムス (Baldamus)、ゴータのジーフェルス (Sievers)、ダルムシュタットのフェルジング (Foelsing) とエシュバーゲのリーバーマン (Liebermann) が任命された)。

委員会によって立案された次のプログラムは、審議の

たたき台として役立った。

- ①全ドイツ教員組合の規約
- ②全ドイツ学校新聞の創設
- ③ドイツ教員会議の招聘
- ④ドイツ国民学校組織についての全般的概要
- ⑤公開質問

以下のことが決定された。

①について：

1) 「全ドイツ教員組合」は次の目的をもつ：

- a) ドイツの様々な学校の全ての教師の親睦。
- b) 国民的・ドイツ的、倫理的・宗教的国民教育のための組織化された学校・教育制度の成立と継続教育。

この目的の確定は、4時間に及ぶ論争の成果だった。

すごい論者が次々現れた。「真のドイツの国民教育・青少年教育を創造するという組合の目的は、キリスト教精神によって担われねばならない」と主張される一方で、他方では、「キリスト教精神」の表出は、既に多くの誤解の誘因になったこと、国民教育とキリスト教教育は既に共にあること、キリスト教精神は自明であること、キリスト教教育は真のヒューマンイズムの原則に立脚するものであること、が主張された。だが、キリスト者とユダヤ人、聖職者と教師は「兄弟」であり「友人」だと呼ばれることについての論議では、大きな思いやりが支配した。この歴史的記憶を取りまとめる狭い文量のなかで、個々の論者の詳細をスケッチすることは不可能である。もっぱら、論議の活気を特徴付けるために、どこから参加者がやってきて、どんな人がどのようにこの「偉大な理想」について語ったかある程度示すために、とりわけ論争者が挙げられる。マグデブルクの校長のDr. レーデブール(Ledebur)、ベルリンのDr. ミュッケ(Muecke)、ニュールンベルクの上級教師ミュラー(Mueller)、ライプツヒの校長ユリウス・ケル(Jul.Kell)、プラウエンのフィンケ(Fincke)、ライプツヒのDr. フリッケ(Fricke)、アンナベルクのゲーツ(Goetz)、ドレスデンのステグリッヒ(Steglich)、ベルリンのヒンツェ(Hintze)、ドレスデンのベルトヘルト(Berthelt)、カッセルのDr. クレーメン(Clemen)、ハイデンハイム＝ゾンダーハウゼンのラビナー(Rabbiner)、デッサウのエルツェ(Elze)、エアフルトのティーロー(Thilo)、ビュルテンベルクの牧師ヴルム(Wurm)、デッサウのケーラー(Koehler)、ハンブルクのエッカー＝マン(Ecker=mann)、ハイニヘンのフェルドナー(Feldner)、チッタウのブローシング(Broesing)、プレスラウのケーラー(Koehler)。

- 2) 組合は領邦組合の合体によって設立される。
- 3) 各領邦組合は、領邦もしくは州の教員組合を含むが、それらの教員組合は委員会－領邦委員会－によって結

びつけられる。さもなくば、領邦組合は、自らの裁量で形成され、組織だてられる。

4) 全教員集会は、次々とあらゆる集会から幹部(Vorort)を選ぶが、幹部の委員会は、全組合の頂点に立ち、さしあたり、領邦委員会と結びつかねばならない。(手段と目的)

5) 通常、毎年「全ドイツ教員集会」が開催されるが、その時期と場所については、リーダー委員会(leitender Ausschuss)の理由ある提案に基づいて、前年度の集会で決定される。組合の問題では代議員のみが投票権をもつ。緊急の場合には、領邦委員会の大多数がリーダー委員会に賛成するかぎりにおいて、リーダー委員会は、全体集会を告知する権限をもつ。

②について：

6) 「全ドイツが新聞」は、あらゆる組合問題の常設の中心をなす。

7) 幹部は、絶え間ない経費を保障するために、時々、自由意思による分担金を要求する。

規約の承認後、議長は長く続く歓声のなかで宣言した。「全ドイツ教員組合は結成された！」。ドレスデンは、その異議にもかかわらず、幹部に任命され、そして次の集会の時期と場所としてニュールンベルクと翌年の聖ミハエル祭の週に決定した。

③について：

この組合問題が片付いた後、ドイツ教員会議(Lehrertag)が提案され、根本的に論議されて、4つの章に規定された。チェツェ(Zschetzsche)によって起草された国民議会への請願を基礎にした、ドイツの教育と学校に関する基本権の箇所に関する協議は、それについてドイツ教員会議が開催されるまで、中断すべきものとされた。教員会議のメンバーは、ある定められた選挙方法(それによると、約200名の代議員が集められることになる)によって選ばれた全ドイツの大学、ギムナジウム、実科学学校、専門学校、初等学校の代弁者であるという。教員会議の課題は、全てのドイツの学校規定を設計すること。それによって、ドイツの教育と授業の主要原理が確立され、学校組織が定められ、学校と国家や教会との関係についての、ならびに、教職の養成と外的地位についての提案が為されるというものである。この教員会議は－可決すると－少なくとも6週間でその仕事を終えることができ、コスト(認められた日当)は、帝国政府が特別な国家から支給されるというものであった。

(陳情書は、多くの署名を集めて送付されたが、メルゼブルクの副校長ヒエッケ(Hiecke)によって起草され、7月17.18.19日にライプツヒに召集されたギムナジウム教師で、ナーメンの副校長Dr. リプスイウス(Lipsius)によってフランクフルトに送付された陳情書に比べて、

成果はほとんどなかった。この業務はちゃんと始められたのだが、「状況の切迫」がこれを実行不可能にした)。

④について：

ドイツ国民学校の組織に関してDr.ケヒリー(Koehly)は、ドイツ教員集会の様々な論議や決議、陳情書や請願書から、一般的な基本的特徴を集約した。それは、あらゆる詳細な点を十分に協議してから、次のフレームにまとめられた。

- 1) 幼稚園から高等教育機関(Hochschule)へと上がっていくように分類された、共同の人間的で国民的な基礎に基づく統一的ドイツ国民学校は、他の国家施設と同等の権利と責任をもつものとして、国家の全機構に組み込まれる。
- 2) 統合された国民学校の自立的管理は、次に従う—教員組合や学校会議による法的に確立された後見下で—公的な国民教育の特別な省庁、そのメンバー—教育評議会(Rat)—によって、ならびに、いろいろな国民学校を代表する学校実践家からのみ成り立つ郡や地区の学校評議会(Schulrat)。
- 3) 直接的にもっぱら、省庁の下で、国庫金からのみ維持される特別(besonder:高等)な国民教育施設がある—実科学校、ギムナジウム、専門学校、大学、師範学校—。一部は自治体の資金で維持される一般的な国民学校—幼稚園、初等学校、市民学校、補習学校(Fortbildungsschule)—それらを省庁は郡や地区の学校評議会を通じて管理し、自治体は、学校、家庭、教会の代表者からなる学校理事会(Vorstand)を通じて、法律で定められた影響を行使する、すなわち、教員選考や学校の外的事項の管理に関することである。
- 4) 一般的な学校では、授業料は徴収されない。また、特別(高等)な教育施設への無料通学は、能力と素質が備わっていて資産のない者に、一定のルールで保障される。
- 5) 教員に関して、適当な予備知識、試験、規則的な雇用と昇進、一定の市民的地位と資格証明、十分な報酬と年金、ならびに国庫からの教員の寡婦と孤児に対する支給金は、現代の諸条件に相応した教職にとって必要不可欠な条件である—だから、新たな国民学校の必要不可欠な条件！

会議三日目は、フランクフルトの基本権<sup>(1)</sup>の学校にかかわる条文に関する委員会提案の審議に取り組んだ。17章と18章のa.b.c.と19章のa.c.それから20章は変更なく受諾された。18章のd.e.f.は、次の条文に変更が求められた。d) 全ての公的な学校は国家施設であり、聖職者による監督は廃止され、今後、学校の実践家によって監督されるべきこと。e) 公的な教師は、無条件に国家官吏である。f) 国家は、自治体

の合法的な参加の下で、試験に合格した者のなかから国民学校の教師を選ぶ。19章bは、次のことが付け加えられるものとされた。「素質と能力をもつ」資産のない者。19章のd.とe.の箇所には、次のことが据えられた。国家は、国庫から適切な方法で、教師の俸給を支払う、そして、学校の他の必要なものに配慮しなくてはならない。

(1) フランクフルトの基本権は、その最初の草案では、次のような内容だった。

17章 学問とその教授は自由。

18章

- a) あらゆるドイツ人は、自らの道徳的、学問的もしくは技術的能力を、関係する官庁に証明したなら、教授をすること、教授と教育の学舎を建てることは自由である。
- b) ドイツの青少年は、十分に公的な学校施設を通して、一般的な人間的・市民的教育の権利を保障される。
- c) 何人も、その庇護する青少年に対して、最低基準の国民学校用に定められた教授水準に達することなしに、そのままにしておいてはならない。
- d) 全ての教授と教育の制度は、国家の総監督下にあり、かかるものとしての聖職者の監督からは免れる。
- e) 公的な教師は、国家官吏の権利を有する。
- f) 自治体は、試験された者のなかから、国民学校の教師を選ぶ。

19章

- a) 国民学校や低度の実業学校(Gewerbschule)においては、授業料は無償である。
- b) 資産の無いものは、全ての公的な教育施設で、無償の授業を保障される。
- c) 貧民学校は、行われない。
- d) 自治体は、適当な方法で教師の給与を支払う。
- e) 資力のない自治体は、これに関しては国庫に援助を求める。

20章 万人は、どのように、どこでも欲するままに職業を選び、そのために自己を育てることが自由である。

把握された決定を、大きく強調するために、これらを陳情団を通じて、帝国議会(Reichstag)の学校委員会で、口頭で序文にただし書きさせることが決められた。陳情団員として、ライプツヒの校長ケル(Kell)<sup>(2)</sup>、フランクシュ=クルムバッハの教師シュミット(Schmitt)、アルツェイの教師トロイテル(Treuttel)が選ばれた。彼らはまた、1848年10月15日にフランクフルトで開催予定の会議への参加を、全ドイツ教員組合に伝える課題を担った。(またこの1848年10月16-21日に開催された教員会議(議長はユリウス・ケル)は、教師にとってやっかいな第18章の規定(学校の監督や教員の地位)

とそれに関連する第19章の規定の整理を目的とした。10月17日の夕方、会議の委員会と帝国議会の学校委員会の会合がもたれた。協議のおかげで、とくに、1848年12月15日の基本権の最終読会めざして、多くの点で考慮すべきことが見いだされた。

(2) ユリウス・ケル。以前はキルヒベルクの校長で、国民とその青少年や教師のための作家。第2回ザクセン議会の議員。1849年5月28日、ライプチヒで死去。

会議三日目の協議の最終議題は、強力な少数派によって包括された、教会に対する学校の立ち位置 (Stellung) に関する提案だった。心の吐露は、非常に多様で、エネルギーで力強く多様な見地が主張された。最終的に、全ての提案に関して採決が為された。結果は次の通り。フィリップ・バッケルナーゲル (Philipp Wackernagel) の提案：

1. a) 国民学校は教会学校である。賛成4票。  
b) 国民学校は国家から独立する。賛成11票。
  2. a) 国民学校は必然的に宗派学校 (Konfessionschule) である。賛成7票。  
b) いわゆる一般的な宗教の授業は、国民学校から排除されたままである。賛成12票。
  3. 国民学校教師と教会の関係は、教会の状況に従って、その都度、定められる。賛成5票。
- ・ケーラー＝デッサウ (Koehler Dessau) の提案：  
宗教教授や他の教会の主要な業務との関係で、学校は  
－教会と国家の自由な協約の基に－教区の自治体と相

応な交流をもつ。賛成17票。

・ケーニッケ (Koenicke) の提案：

宗派の授業は排除される。賛成92票。反対11票。

・ベヒトホルト (Bexthold)、ハーゼンツァール (Hasenzahl)、リップス (Lips)、ロート (Roth) の提案：

これまで存続した宗派学校は、地域学校 (Kommunalschule) に転換される。賛成81票。反対17票。

まだ多様な問題が、その処理について、未来の盟主都市に委ねられた後で、「最後に議長から、都市アイゼナッハに、その全き友情に対して、その場の責任者に、その尽力に対して、全ての！ 全ての！ もっとも暖かな感謝が述べられた。その際、とくに、なおチューリンゲンの鉄道当局の丁寧な友情に感謝の意向が示された。－ライプチヒの Dr. ホーゲル (Vogel) は集会の名において、司会者に、その素晴らしい司会に対する感謝が述べられ、それに対して議長ケヒリー (Koechly) は、集会に対してその模範的で礼儀正しい態度に感謝した」。

集会に関するある報告では次のように述べられている。「集会は、ドイツの教員界の統合に対するもっとも素晴らしい期待を目覚めさせた兄弟精神によって担われた。代表的な声は、全て、共和国のためのデモンストレーション以外の何物でもなかったことを、不思議に思っ

てはならない」。Dr. シュルツェ (Schulze) は、ウィーン集会で最初のアイゼナハ集会について説明した。「例年の全ての集会のように、熱狂的な論議を伴う熱狂的な集会だった。だが、ドレスデンの Prof. Dr. ケヒリー (Koechly) の素晴らしい司会で、迅速で非常に上品で生産的な話し合いが続けられた」。



## 4) W・シュミット編『図説 1848 / 49年ドイツ革命史』より 「ザクセンの革命」

### ザクセンの3月事件

(Die saechsischen Maerzereignisse)

ドイツ連邦で、最も発達した産業国の一つであるザクセンでは、ライプチヒが指導的中心地として、3月動乱の頂点に立った。都市は反封建的の反対勢力の中心となった。というのも、城内ではザクセンの商業ブルジョアジーの重鎮たちや、政治的に積極的な手工業徒弟や労働者の主要メンバーが住んでいたからである。重要なことは、当地では反封建的陣営が、バーデンと同様に、小市民民主主義グループと、大ブルジョアジー・リベラル派グループに明瞭に分かれていたことである。小市民や労働者が、1845年以來ザクセンの反対派の最も有名人であるローベルト・ブルームをリーダーと見なしていたのに対して、穏健リベラル派の代表者はカール・ビーダーマン (Karl Biedermann) だった。

最初の行動はリベラル派から起こった。ライプチヒでは、フランスの2月事件が知られるようになった後、ビーダーマンは3月1日に、都市議員の集会で、国王に向けた上奏文の提案をした。それは出版の自由と、連邦議会におけるドイツ国民の代表を要求するものであった。この上奏文によって、ビーダーマンは民主派を凌駕しようとした。

36歳で、小市民的境遇の出自であるビーダーマンは、哲学と歴史の大学教授だった。金銭的な理由から、彼は早くから出版の活動に従事した。多くの雑誌の編集者として彼は、リベラルな企業家と親密な個人的、政治的関係を結んだ。憲法改変や、検閲廃止に対する彼の支持、および絶対主義に対する批判によって、彼は、裁判にかけられ、ライプチヒ大学の教職を剥奪された。ビーダーマンは、リベラルなプロイセン主導下での国家的に統一されたドイツという思想を、力強く主張した。穏健な野党としての名声を彼は、政治的变化に向けて大臣ポストを維持するために喜んで使っただろう。たいていの彼のザクセンの同志と同じ野心家として、彼は、とくに戦術的手腕を発揮した。

ライプチヒ市庁の超満員の会議場で、ブルームはリベラル派の上奏文の日和見性と怯懦性を批判したが、賛成することに決めた。三月前の政体との闘いにおいて、リベラル派との共闘が彼にとっては重要だったから。で

も彼は、革命の勃発を機に、民主的勢力の運動を強め、彼らが自立的に行動できるようにしようとした。彼によって指導された弁論協会 (Rede-uebungsverein) が、今や毎晩ライプチヒの射撃場で開催した国民集会の助けで、彼は民主派に影響力をもった。3月1日の第1回集会は、フランス2月革命の勝利を讃えた祝祭だった。祝祭には、1,000名を超える市民、とくに、労働者、手工業者、学生が参加した。彼はここでもっと広範に広がる諸要求を認めた。彼はその要求を、3月3日に、自らの『ザクセンの自由主義者に告ぐ』で要約し、回状として全領邦に広めた。民主派の綱領の中心には、今現在の全ての閣僚の即座の辞任への要求があった。

ライプチヒの出来事は、領邦中に大きな反響をえた。都市議会の上奏文やブルームのサークルを糸口に、西部や南西部のザクセンの工業地域の都市の申請書運動が始まった。だが、ザクセン国王は、反対派の圧力に屈しようとはしなかった。自らの暗黒的独裁から彼は、都市の代表者たちに、政治問題を論じたり、要求する権利を認めなかった。3月3日夜のフリードリヒ・アウグスト二世の拒否的答弁が知られたとき、ただ、ブルームの演説のみが、多数の群衆の激昂や不満を鎮めることができた。ライプチヒの市庁のバルコニーから、ブルームは、全閣僚の辞任を求めた。このスローガンを、一層の上奏文を国王に届けた都市議会が即座にバックアップした。

3月6日に、政府は見せかけの容認を行ったが、同時に、この見本市都市の近くに、軍事行動を起こさせるために、軍隊を集結させた。ライプチヒには、一大示威行動によって、国民の希望に反する王の抵抗を破砕する計画が生じた。民衆の代表団は、ドレスデンに向かうこととなった。ブルームは、その発起人に属した。既に指導的委員会が形成され、約5,000人が参加を約束し、他の都市が支持を確約した。だが、この企てはライプチヒのリベラル派の抵抗で潰えた。彼らは流血の闘争の発生を恐れた。彼らの影響下、ブルームはその小市民的臆病さ故に、共闘を拒んだ。

大衆の行進の準備に対して、ドレスデン政府は、ライプチヒ周辺への一層の軍隊の集中で応えた。王の代理人として、3月12日、司法相アルバート・フォン・カルロヴィッツ (Albert v. Carlowitz) が都市に現れた。彼はすぐさま、ブルームを逮捕させるという彼の計画が実

現不可能であることを悟った。それにもかかわらず彼は、当局に、4点に要約される最後通告を行わせた。それは、都市でのあらゆる公的な政治的アジテーションを止めさせようとするものであった。この企ては、リベラル派と民主派の共闘で潰えた。カルロヴィッツは、軍隊は信用できないとする報告によって、とくに影響された。自らのミッションを、彼は、反対派の諸要求に応じるようにと王に推薦することで終えた。3月13日、反動的閣僚が罷免された。3日後、新たなとくに穏健リベラル派の政治家からなる内閣が任命され、改革綱領が告示された。

## ザクセンにおける民衆の抵抗

(Volksaufstand in Sachsen)

1849年4月29日、ザクセン政府がベルリンを真似して、第二院を解散したとき、政府は、プロイセンの援助を頼りに、政治的危機からの反革命的逃亡を前面にはじめた。

ラインラントに次いで産業的に最も進歩したドイツの一部ザクセンでは、広範で多様な民主的運動が広がったが、その中核は労働者階級が担った。多くの労働者友愛会 (Arbeiter-verbüderung) 組織は、その中央委員会がライプツヒで活動したが、戦闘的階級組織へと発展した。労働者の政治的活動の重点は、もちろん、小市民的に指導された祖国協会 (Vaterlandsverein) の内部に留まったが、彼らはここではラジカルな民主派を支持した。

帝国憲法キャンペーンをリードしたのは、ザクセンでも、まずはリベラル派と穏健民主派だった。議会解散後、彼らは、帝国憲法の承認と民衆の内閣の招聘を求めて上奏文キャンペーンをはじめた。とくに大都市の市町村役場に支えられて、彼らは、リベラルなブルジョアジーの積極的な参加を示した。裁定が下されるに違いなかった王宮では、運動の頂点には、穏健民主派によって支配された祖国協会委員会がいた。委員会は、ヴェルテンブルクの憲法運動を模範とし、しかも国王への圧力を強めたが、暴力的な闘争は忌避した。それ故、ちょうど、5千名を数えるドレスデン市町村警護隊を集めようと画策した。3月3日に計画されたパレードは、帝国憲法をデモしようとするものであり、同時に、増大する国民大衆の興奮をなだめようとするものであった。

国王フリードリヒ・アウグスト二世と彼の閣僚は、プロイセンの支援を当てに、決戦を模索した。あらゆる陳情は拒絶され、市町村警護隊のパレードは、直前に禁止され、ドレスデンとその周辺に駐屯する兵士を、兵舎に確保された。とくに、ザクセン政府は、即座の軍事的援助をベルリンに求めた。

3月3日の午後ドレスデンで、この情報が知られるや、大騒動となった。労働者や決定的な民主派の怒りは、かつて、市町村警護隊の多くが、プロイセンの介入が差し

迫っているにもかかわらず、彼らと見解の違いを見せていたときよりも、はるかにでかくなった。兵器庫の前に興奮した人々が集まり、プロイセン軍と闘うために、武器と弾薬を求めた。16時ごろ、手工業者職人と、労働者が格子門を押し破った。仕立て職人のペーター・カプラー (Peter Kappler) は、黒赤金の旗を手に、軍隊に兵器庫の明け渡しを要求した。そのとき、駐留軍は警告なしに銃火をあげ、第一線の戦士を撃ちたおした。今や多くの人々が、兵器庫に流れ込んだ、なかでも、最初のバリケード建築に従事した労働者が。急を聞いた市町村警護隊が、民衆の側につくか、民衆の敵対側について介入するかを決めかねていたとき、労働者と民主派は新たに突入した。彼らは、馬車を使って、真ん中の中央門をぶち破るところまで来た。司令官は、いまや、散弾砲撃を命じた。20名以上の死傷者が血に染まった。

兵器庫での軍隊による流血行為は、ドレスデンにおける全ての蜂起の合図となった。労働者と民主派が武器と弾薬を求めて市役所に集まった。旧市街区中が、防御を固めた。通りは、剥がされた舗道石や家具で作られたバリケードのために封鎖された。短時間のうちに、100以上のバリケードが生じた。彼らの防壁には、黒赤金の旗に並んで、社会的共和国の赤い旗が見えた。

武装体操家や他の民主派が、ほとんど武器も無しで闘いを始めた手工業者職人や労働者を支持した。抵抗側には、エルベの文化都市の知識人の著名な代表者もいた。多くのバリケードは、建築家ゴットフリート・ゼンパー (Gottfried Semper) の指示のおかげで、強固なものとなった。蜂起に情熱的な関心を示したのが、礼拝堂楽長で、既に作曲家として著名だったリヒャルト・ワーグナーと、音楽監督アウグスト・レッケル (August Roedel) だった。早朝、ザクセン王と、彼の反動的閣僚が逃げた。彼らは抵抗を恐れて逃げたのだが、それは、交渉を断固として拒絶することも意味した。民衆は、このことを徹底して挑発と理解した。夜間、部分的に置き去りにされたバリケードが、再び占拠された。軍隊との闘いが、再び燃え上がった。休戦状態が終わったことが知れ渡ったとき、市庁舎の前には、再び多くの民衆が現れた。彼らは、「矢も楯もたまらず、軍隊への抵抗へと導かれた」。

ドレスデン市庁舎では、不確実性と混沌が支配していた。3月3日午後、市議会は祖国協会の穏健な民主派の指導のもと、安全保障委員会 (Sicherheits-ausschuss) を誕生させた。同委員会は、プロイセン軍からドレスデンを守るべく幾ばくかの対策をとったが、ザクセン軍に対する確固たる闘いの継続には、恐れをいだいた。抵抗する民衆と、委員会に降りかかる責任に対する恐れから、安全保障委員会は、リベラルな市参事と協働した。それどころか、同委員会は、「法律の土壌と、秩序の道を決して踏み荒らすな」と民衆に命じた。

市参事会と協力して、安全保障委員会は軍司令官と共

に、5月5日の午後までと期限を付けられた休戦を締結した。彼らはそのことによって—国王と政府によって指示も無く取り残された—軍隊指令官や市庁が、不安定に動揺しているところで、蜂起をすぐさま継続する機会を逃したが、大衆は感激し、闘いを決意していた。軍司令官は、自らの軍隊を再び秩序付け、強化させる時間を得た。特に要請されたプロイセン連隊が近づきつつあった。蜂起軍は、まず、結束し、武器を調達し、援軍によって強化せねばならなかった。だが、彼らは休戦を同じようには利用できなかった。つまり彼らには、国王政府と妥協が期待できるという幻想が新たにわき上がっていたのだ。

## 暫定政府

(Die Provisorische Regierung)

断固たる民主派は、自発的に勃発したドレスデン蜂起に、必要な指導を与えようとした。その頂点に、パウツェン (Bautzen) の弁護士サムエル・エルドマン・ツシルナー (Samuel Erdmann Tzschirner) がいた。彼は、決断力、疲れを知らないこと、精神的エネルギーにおいてドイツにおけるほとんどの小市民民主主義的政治家を凌駕していた。彼は、ザクセン領邦議会の極左派のスポークスマンで、民主的祖国協会の中央委員会のメンバーで、ザクセン最大の民主的組織のリーダーだった。3月前では、ローベルト・ブルーム派のリベラル派左派だったが、1848/49年の階級闘争においてラジカルな民主派となり、労働者のなかでは民衆運動の主力として知られた。彼は熱心に帝国憲法キャンペーンに関与したが、彼にとっては、憲法は勃発した闘いの最終的目標ではほとんどなかった。彼の政治的目標は、勤労大衆からなる蜂起派の希望とともに、勤労大衆の社会的利益を実現させる共和国に向けられていた。闘争が先鋭化するにつれて、彼はドレスデン5月蜂起の大衆のリーダーとなった。

安全保障委員会ではリベラル派の市参事が激しく揺さぶられたので、ツシルナーと彼の友人は、委員会を指導しようとした。市町村警護隊の指令官が、弾薬の提供を拒否したとき、彼らは委員会に対して指令官を更迭させた。彼らは、バリケードにいる人々の武装に苦慮し、周辺にいる義勇軍を呼び寄せた。だが、さしあたりツシルナーと彼の友人たちは、ドレスデンの蜂起軍が孤立して、プロイセン軍やザクセン軍と武力衝突をせざるを得なくなることを回避させることに全力を尽くした。

彼らは、武器庫での殺戮にもかかわらず、ザクセン軍が、民衆の統一行動によって、蜂起側に付く可能性を期待した。彼らは信じた。ザクセンにおける軍隊と住民の共同行為は、プロイセンを介入から遠ざけると。そして、プロイセンそのものや、ラインやシュレーゲンやベルリンでの運動を当てにした。このような、明らかに反動

の闘いの決意を軽視した考えから、ツシルナーと彼の友人は、5月4日のザクセン領邦議会で、暫定政府を創設させた。

暫定政府は、ザクセン中の首都において始まった闘いを斟酌し、帝国憲法の旗の下、革命を志向する労働者からリベラルなブルジョアジーまでの住民を統合しようとした。さらに彼らは、他のドイツ地方における憲法運動、とくに国民議会での支持を得ようとした。それ故、暫定政府では、ラジカルな民主派の賛同を得て、全く違った政治色からなる3人の領邦議会大臣が選ばれた。極左のリーダー：サムエル・エルドマン・ツシルナー。郡役員で穏健左派：オットー・レオンハルト・フォイブナー (Otto Leonhard Heubner)。そして、暫定政府参事で、リベラル派の代表：カール・ゴットヘルフ・トート (Karl Gottfried Todt)。

この連合政府は、革命的権力機関として行動することは出来なかった。彼らは、ザクセンで政治的権力を得たのではなく、帝国憲法の完成や、民主的要求の実現のための運動をしたかっただけである。武装闘争をする代わりに、彼らは、政治的・道徳的圧力によって、ザクセン政庁やプロイセンに闘争を放棄させようとした。だから、暫定政府が一方において一層の市民武装をドレスデンに呼びかけながら、他方において、軍事的対決のための組織的な準備をほとんど行わなかったことが説明できる。だから、暫定政府は、市参事や安全委員会のメンバーが、国王の下から戻った閣僚と談合することを黙認した。

リベラル派と穏健民主派が運動で結びつこうとすることで、決定的な民主派であるツシルナーは、労働者や勤労大衆の革命的エネルギーを動員する多くの可能性を行使できなかった。しかしながら、ザクセンの5月蜂起の運命にとって決定的だったのは、ザクセンのリベラルなブルジョアジーが民衆蜂起に一致して対立し、また、小市民主義者の大部分が暫定政府を熱心に支持しなかったことである。

リベラルなブルジョアジーは、暫定政府が合法的な枠内に留まろうとしたことで、運動に対して何らの一層の協力をしなかった。ドレスデンで民衆が武装闘争へと蜂起するや、彼らは公然と裏切った。リベラルなブルジョアジーが、政治的に力をもっていたザクセンの大抵の大都市は、蜂起に距離を置き、暫定政府を認めなかった。ライプチヒがそうだった。同市は、ドレスデンと西ザクセン産業都市の間であって、見本市都市や交通拠点としての大きさと重要性から、蜂起の進行にとっては特別な重要性をもった。他方、小規模もしくは中規模の産業都市や、フォークトランドやエルツ山地の地域で明らかだったことは、そこでは、小市民民主派が市参事や市議会の多数派を占め、祖国協会が政治的重要性をもっていたことである。ここでは、防衛委員会 (Verteidigungsausschüsse) や安全委員会が生じた。彼らは—しばしば

リベラル派と激しく対立したが、市町村警護隊や義勇軍をドレスデンに送った。だが、小市民主義の熱狂もすぐさま冷めて、まずは闘争の機会を日和見し、何らの危険を追わないでおこうとする考えに変わった。だから、急いでドレスデンを救おうとしたのは、多くのプロレタリアートたちだった。

暫定政府の政治的希望から、ザクセン軍を自らの側に付かせようとする試みも挫折した。バリケード戦士によって取り囲まれ、民衆によって圧迫されていた兵器庫守備隊では激しい変動が起こった。だが、暫定政府はそれを見くびった。将校は兵士を手中に収めた。このことが可能になったのは、とくに蜂起軍の守勢的行動によるもので、とりわけ、市民的な市町村警護隊の臆病な行動からである。彼らのうち、ほんの数百人しか集まらなかったのだから。5月5日の午後、軍隊がバリケード戦士に発砲したとき、力関係は軍隊の優位に変わった。

### ドレスデンをめぐる闘い

(Der Kampf um Dresden)

ドレスデンをめぐる闘いでは、反革命はすぐさま5,000名の重武装兵士を投入した。そのうちのほとんど半数がプロイセン軍だった。民主派の側には、援軍が到着したにもかかわらず、3,000名を越えることは決してなかった。バリケード戦士の3分の1が武装したにすぎなかった。さらに3分の1は、ピッケル、槍、鎌をもった。残りは、舗石や棍棒をもたねばならなかった。蜂起軍の全火砲は、鉱山労働者がブルグク (Burgk) の男爵から奪った4つの小さな大砲だった。でも、最大の弱点は、暫定政府から無視された軍事的組織だった。市町村警護隊の新たな司令官に任命されたハインツェ (Heinze) は、ツシルナーが、ギリシャの軍務におけるかつての中佐として、彼にかけた期待に、ほとんどこたえなかった。

それ故、蜂起軍は防御に専念し、軍隊に主導権を与えざるを得なかった。軍隊の司令部は城内にあり、暴徒の司令部はほんの数メートル離れた市役所にあった。軍隊は、民主派と決着をつけようと、2回の側面攻撃によって、ノイマルクトやツピングャーを越えて、旧市街を包囲しようとした。だが、民主派は激しく抵抗した。

ドレスデンの闘いは、軍事的には、通常の市街戦の様相を呈した。蜂起軍は烏合の衆だったにもかかわらず、バリケードを一緒につくり、ドレスデンでの旧市街地で、かどの住宅の出窓や、狭い通りや高い住宅の裏窓や屋根から射撃して、しばしば有効な防護をした。だが、反革命軍の指揮者たちは、パリ7月革命の闘いから学んでいた。彼らは、可能な限りバリケードへの突撃を避け、むしろ砲兵に攻撃させた。その間に、歩兵隊と工兵隊が市街に投入して、防火壁を打ち破り、家から家へと攻撃し、バリケード戦士をくまなく銃撃した。

ドレスデンの闘いは、当初から、プロイセン軍が反革命テロリズムに酔いしれ、抑制がきかないリンチに駆りたてられたことに特徴付けられる。ザクセン軍を教化するために、プロイセン軍が彼らのなかに混じった。いろんなかたちで民主派征伐が声高に叫ばれ、軍には、反乱軍を裁判にかけることなく、「簡単な裁き」にかけるという合い言葉が伝えられた。蜂起軍によって傷付き、捕虜になった者は、大抵は殺された。そのなかには、野戦病院の全ての患者も。たくさんの捕虜が殺された。多くが呻きながら死に、窓から投げ捨てられ、四肢がこごなになって路上に捨てられた。50人の捕虜が搬送の際に、エルベ橋から突き落とされ、すぐ溺死しない場合は、射殺された。虐殺され、殺戮され、辱められたが、全ての者が闘いに参加したのではなかった。老人であるか、女中であるか、罪のない旅人であるか、誰も確かめてはなかった。

反革命の雑兵に抵抗したのは、ザクセンの民主派の最良の人々だった。その信頼できる闘士だったのは、ドレスデンの手工業職人、体操家、市町村警護隊の狙撃中隊、アカデミー軍、ならびに、ザクセンの首都近郊の農民、そして、ライプツヒ、プラウエンの鉱山、ケムニッツの機械・紡績工場の労働者たちだった。それに対して、ドレスデンのブルジョア的市町村警護隊は、燃えさかる死闘から即座に完全に身を引き、小市民のほとんどは、臆病にも住居にもぐり込んだ。帝国憲法キャンペーンが盛り上がったときのように、ドレスデンでは、すでに、「蜂起軍には労働者からなる真の戦闘的中核があった。彼らは何よりも武器を取り、軍隊と渡り合った」。

暫定政府は、闘争がはじまると仲違いした。リベラル派のトート (Todt) は、口実を設けて、すでに5月6日にはドレスデンを見捨てた。それに対してツシルナーやヒュープナー (Huebner) は、まだ監獄に入れられていないとき、まっすぐな民主的信念、人としての勇氣、そして彼らの呼びかけに応じた勤労大衆への忠誠を示した。彼らは今や革命的対策を決意した。それは、早い時点で、蜂起にある全く別の活気を与えうるものであった。彼らは5月7日に、ザクセン市民に要求した。「暫定政府の命令を正確ではないが、躊躇なく自らの影響力が及ぶ範囲内で真真正直に実行している全ての郡長、役所幹部、財務官、郵便局長、市長、市参事、警官ならびに全ての官吏」が、即座に、抵抗している彼らを逮捕しないこと、そして、彼らに代わりに新たな役人を選ぶこと。

ほとんど援軍も無く、団結して闘っているバリケード戦士のために、とりわけ、ツシルナーは努力した。その際、彼は、ミハイル・アレクサンドロビッチュ・バクーニン (Michail Alexandrowitsch Bakunin) やシュテファン・ボルン (Stephan Born) を、拠り所とした。ロシアの革命的民主派で、後の戦闘的な無政府主義の創設者は、当時、ドレスデンから、スラブとドイツとフランスの民主

派の同盟のために活躍した。彼は既に5月4日に、ツシルナーによって、武装蜂起に参加した。ある種の司令として、彼は最後まで持ち場を離れなかった。

労働者がますます闘いの重責を担ったのと同じく、労働者の幹部も、多くのバリケードや街区の指導を担った。「闘っている党派たちの中間にあるダルダネレン通り」である城前通り、そこのライプチヒの労働者によって占拠されたバリケードに命令を下したのは、シュテファン・ボルンだった。彼の慎重な差配によって—彼はバリケードの左右にある家々の内壁を破らせ、軍隊を近寄せず、戦士を背後に回らせた—この重要地点は確保された。無能な司令ハインツェ (Heinze) が捕虜になった後、ツシルナーはボルンをバリケードの指令官に任命した。ドレスデンの防衛は、とくに、労働者階級や勤労大衆の無名のヒーローたちの賛歌だった。彼らはブルジョアの帝国憲法のみならず、労働民衆の解放のための困難な道程での闘いに打ち勝つために、命をかけて堡壘で闘った。何度も言及したドレスデンの労働者の子でヒロイン、少女パウリーネ・ブンダーリッヒ (Pauline Wunderlich) は、二度の負傷にもかかわらず最後までヴィルスドゥルッファー通りのバリケードで闘った。その後、仕立て職人である彼女のフィアンセが、武器庫で彼女の亡骸を発見した。だから多くのドレスデンの徒弟は、ガブローシュ(※ユーゴ「レ・ミゼラブル」に登場する少年戦士) に劣らなかった。「…自由のためには闘うことが大切だ。貴族は何らの庇護者ではない」と、後に16歳の石工徒弟モーリッツ・ヒラー (Moritz Hiller) は、秘密の通信で、牢獄から両親に書き送った。彼のあらゆる年長の同志が

目前で虐殺されたが、彼は、たどたどしい筆跡で次のように書き添えた。「…それ故、我々は再び打ち倒されることがあっても、恐れることはないのだ。団結した力で我々は勝利するに違いないのだ」。

かかる精神で充たされていたから、ドレスデンの戦士は4日間の間、優勢を保つことが出来たのだ。数、組織、武装のどこで優勢だったのかは言えないが。多くの闘争拠点で彼らは激しい戦闘を行った。例えば、革命派の右翼で突出した位置にある婦人大通りにあるホテル・シュタット＝ローマのバリケードで。左翼では、最後の防衛点であるヴィルスドゥルッファー通りのバリケードで。最終的に彼らは、整然とした退却を始めた。5月8日、まだ都市からの出口が一つだけ空いていたとき、ドレスデンからの退却を組織するという市役所の地区指導者の協議が成立した。このことは、ボルンやバクーニンの指揮下で成功した。残留した戦士が、慎重に、近づいてくる敵を阻止している間に、5月9日の早朝、2千人の戦士がフライブルクへ隊列を整えて去った。多くの者が自由意思で命令を拒否した。彼らは長い闘いに疲れて、もはや持ち場を離れようとしなかった。

蜂起軍の殉職は約250名だったが、「上流階級」に属していたのはたった11名だった。ドレスデンの唯一の公式な調査が示す869名—ザクセン全体では約9千名—のうち、半数が労働者だった。彼らに対しては、エンゲルスの名誉を讃える判断が有効だ。「ドレスデンの戦士は、優勢なる敵に勇敢に戦って打ち負かしたのだ。さもないければ、闘いは帝国憲法キャンペーン内に留まっていたらろう」。



## 5) W・レム編『ベルリン学校史』(1987)より、「ベルリン市立師範学校でのディースターベークの活動」および「1848・49年の市民民主主義革命におけるベルリンの教師たち」

### ベルリン市立師範学校でのディースターベークの活躍

1826年以降、ベルリンの初等学校のための市立教員養成学校を設立する様々な努力があった。だが、全てのこれらの試みは、市庁の拒否的態度によって潰えた。州の学務局の推薦ではじめて、市立学校教員のためのゼミナール(師範学校)が設置された。7人の教師と、17人の師範生が教員養成のために募集され、旧ヤコブ通り120番地に授業目的に2～3の部屋が賃貸されてから、1831年1月6日に、市立学校教員のためのベルリン師範学校が公的に開設された。なお同年、オラニエンブルク通り29番地で家屋が購入され、そこへ引っ越した。

この師範学校の歴史で、重要な局面は、最初の校長であるF・A・W・ディースターベークの教育活動によって始まる。1832年5月15日の就任演説で、彼は、国民教授と国民教育に関する考えを述べた。その際、彼は「教育の目的として、さらには、教師教育の目的として、自主性(自己活動)・・・高貴さと善良さの勤務における」を強調し、それによって、ドグマ的な暗記学習の誤った実践に反対した。

ディースターベークは、若者たちを、「新しい学校」での仕事のために、専門的な教育や、教授学的方法論的能力によって、武装させた。

未来の教師に、彼らの課題解決の能力を付けさせるために、ディースターベークは、師範学校に直接リンクした初等男子学校を設置させた。同校は、1832年秋に2クラス、1クラス約30人の子どもで、開校された。同校は、模範学校を表明し、師範学校生は、最初の2年の教育課程では聴講し、3年目に自ら授業ができた。他に、同校は、ギムナジウム入学のための準備学校でもあった。

ディースターベークによって展開された市立師範学校の新傾向は、州の学務局の保守的見解や、プロイセン政府の政治目標と対立した。とくに、授業への聖職者の影響をなくすこと、および、教会と学校の結びつきをやめることといったディースターベークの要求は、1840年から、当局によって懲戒の対象となった。

1845年10月23日に、ディースターベークは、「彼が、国家、教会と学校の関係に関する自らの見解を表明することを止めなければ」、師範学校長職を辞職するように、

強く求められた。ディースターベークは、自らの理想に忠実であろうとしたので、プロイセン王は、1847年7月1日に、この功績の多い教育者の罷免を決定した。彼は、ベルリン以外で他の公職に就くこと許されたが、彼は、ベルリンから自らの学校政治的闘いを継続することを決意した。

ディースターベークは、市民民主主義的学校に関する自らの見地を、強化して宣伝するためにも、三月前期に蓄積された経験を、1848年革命期や、反動の復古的的局面において活用した。反動勢力は、ベルリンの教師や市民への彼の影響をなくそうとしたが、引き続いて失敗した。そのことは、彼が、市議会やプロイセン議会(1858年)に選出されたことでも明らかである。両議会で彼は、教師の社会的境遇の改善に尽力し、進歩的な学校政治の代弁者に属した。

ディースターベークが、市立師範学校から締め出された後も、長きにわたって、そこでは彼の理想が生き続けた。1879年4月22日に、フリードリヒ通り229番地に新しい師範学校の校舎が落成したときに、胸像とともに、次のような賞賛が起こった。「ディースターベークという教師は、弟子たちの心情を、魔力でもって惹きつけ、彼らを教職に感激させ、国民学校教師にも、公的な生活での地位をあてがった」。教師と師範学校生は、ディースターベークの意味するところで活躍することを誓った。

### 1848/49年の市民民主主義革命におけるベルリンの教師

1848/49年の市民民主主義革命は、ドイツにおける市民的大変動の頂点であり、ベルリンは革命的行動の中心となった。900を越えるバリケードで、1848年の3月18日、19日、ベルリンの労働者、手工業者、また徒弟や生徒たちが民主主義と社会進歩のために闘った。

イエガー通りのバリケード闘争について、目撃者はこう語った。

「たった二人の手工業者風の若者が、恐れも知らず、胸壁のうえにもたれかかって、近づいてくる敵を待った・・・大隊が近づいた。二人の堡壘を守っていた年長者、19歳の錠前職人グラウセヴァルト(Glasewald)が、す

ぐさま、自分の猟銃を突進者に発砲したが、ほとんど同時に銃撃を受け、不利な闘いを継続することが不可能になった。バリケードは、いまや、たった一人の戦士をもつだけとなった。1830年9月8日にベルリンで生まれた錠前徒弟のエルンスト・チンナ (Ernst Zinna) だ。

軍隊が押し寄せてきたとき、バリケードから突然、少年が走り出てきて、やみくもに先頭で行進する将校の一人に向かっていき、力の限りを振り絞って、自分の銃で将校の首に大きな一撃を与える。その結果、予期せぬ攻撃を受け、非常な勇敢さに驚いて、将校は傷付いて後退したようだ。しかし、すぐさま、6か7の銃がこの勇敢な少年に向けて発砲されるが、彼はその間、敏捷に屈みながら、避けられない死から素晴らしく幸運に逃れる。そして彼は急いで3つの大きな舗石をつかみ取って、それらを、次から次へと、タウベン通りに急迫する軍隊に向けて、遮るものがない前面で投げる。素晴らしい回避を、また、試みたが、それは失敗し、彼に発砲された多くの銃弾のなかの1弾が彼を倒した・・・」

革命の両日、おびただしい犠牲者が出た。大抵は、労働者や手工業者の職人だった。また、3人の義務教育年齢者もいた (Carl Eben, Carl Kuhn, Albert Leitzke)。そして、5人の徒弟 (Augst Fehrmann: 絵描き屋、Carl Pahmann: 鍛冶屋、Louis Schulz: 靴紐屋、Carl Lemcke: 籠作り屋、Ernst Zinna: 錠前屋)。彼らは、自らの勇気を自らの命で代償せねばならなかった。

2万人を超えるベルリン市民が、1848年3月22日に、革命軍をフリードリヒスハインの最後の休憩場所に案内した。1848年の若き革命家の栄誉をたたえて、ベルリン市庁は、1957年以来、毎年、若き改革者、若き合理化貢献者、若き芸術家に、卓越した業績に対して「Ernst Zinna 賞」を与えている。

市視学官シュルツェ (Schulze) は、市庁から戦死者の栄誉ある埋葬の責任者とされたが、3月20日の市庁の会議で、確言した。

「新しい時代がはじまった。古い王権は、終わった。新しい支配がはじまる。今や国民が支配者なのだ。だから、古い統治者は消えなくてはならないし、今までの議会の指導者は彼らと同じなのだ」。それ故、大市長クラウスニク (Krausnick) が職務を解かれ、それでも数日後には、再び任命されたが、シュルツェは、彼の命令に従わなかった。

さて、どれくらいのベルリンの教師が革命に参加したのか？彼らのバリケード闘争への直接的な参加については、何も知られていないが、たぶん多くの教師が、自らの民主的意識を発展させるために、革命的活動に貢献しただろう。

1848年3月18/19日の後、一連の労働者集会や教員集会が起こった。それらのなかで国民教育の改善が協議された。大きな集会の一つが、1848年3月26日に、シ

ェーンハウザー門の前で行われたベルリン国民集会だった。多くの弁士が、そこで、教師の未来の課題について語った。そして、出版業者ブリル (Brill) は、「国家の経費による国民教育」を支持し、さらに論じた。「我々は皆、アイヒホルン相を知っている・・・彼は全ての地域 (Gemeinde) に聖職者と教師を送り込んだが、彼らは子どもを聖書の文言で餌付けし、馬鹿にしなければならない使命をもっていた。このような教育によって刷り込まれた人には、何らの救いもない。人の救いは、人のなかから来る。万人は、自らの胸に救世主を有している！」。

ベルリンの教職者の代表として、第14自治体学校 (Kommunalschule) の教師であるテオフィール・ビットコウ (Theophil Bittkow) は、次のように宣言した。「私は、夕方に、労働者階級に無料で授業をすることを申し出る。そして、多くの私の同僚が私の例に続くであろうことを断言する。だが、労働者階級が、良き授業を得たいと望み、労働者の地位が高められることを求めるのなら、彼らは、教職者の地位も改善させねばならない・・・」

1848年8月23日から9月3日までベルリンで開催された労働者会議でも、教育問題が審議され、労働者階級の最初の学校政治的綱領が可決された。それは、24の条文からなり、国民学校や補習学校の教育と、教師の社会的立場の安定化への要求を含むものであった。

革命後の数ヶ月間、ベルリンの教員協会 (Verein) は、偉大な活動によって抜きん出ていた。「ギムナジウム教員協会 (Gesellschaft)」は、1848年4月における多くの審議において、学校制度の再編を要求した。教師助手 (Hilfslehrer) たちは、4月16日に会合し、市立学校の全ての正教師との社会的平等を要求した。ベルリン教師と、プロイセン各州 (Provinz) の代表者の全体集会は、1848年4月26日に召集された。それは、「チボリ (Tivoli)」において開催され、最初の自由なプロイセンの教員集会だった。それには600名を超える教育者が参加した。6時間の審議後、一致して、以下のような要点をもつフランクフルト国民議会議員宛の陳情書が採択された。

「・・・現状を望ましいものへ導くために、以下のことを提案する。

1. 僧職からの学校長職の分離。
2. 教会奉仕からの教職者の解放。
3. 学校監督者からの聖職者の分離および教職者からの学校視察者の任命。
4. 個々の学校の管理問題のために、教師と市民から選ばれた委員会の即刻の設置。
5. 教育研究者の指導の下での、教師の理論的・実践的継続教育のための定期的会議の設立。
6. 可能な限りすみやかに、教師の報酬を、生活するのに必要な最小限 (250—400 ターラー) まで改善すること、なお、退職者に特別な考慮を行うこと。



7. 教師のための授業料の廃止。ならびに授業料によって傷付けられていることの廃止。

だが、このような市民民主主義的要求は、プロイセンにおける半絶対主義的権力機構の反動的学校政治と対立した。革命の敗北後、彼らは全力で古い状態の再生に取り組んだ。それについては、1849年1月22日の学校代表団の回状命令のように、多くの指示が示している。回状命令は禁じた。「青少年が学校の教師によって、政治的問題にかかわること、そして、そうして政治的な党派闘争に組み込まれること」。他の決定は、教会と学校の結合を求めた。

ベルリン警視総監ヒンケルデイ (Hinkeldey) は、この関係で、教師の尾行をはじめた。1849年10月14日、95名の教師の名前が載っているリストが公開された。「彼らは、政府に敵対する党派に味方したか、その疑い

があるものたちだ」。授業で明らかに民主派として表現した教師は、この「疑い有る者」にされた。例えば、第6自治体学校の教師オットー (Otto) やリール (Riehl)、市立師範学校教師ヒンツェ (Hintze)、「職人という扱いの教師の組合」(Geselliger Lehrerverein) の議長コッホ (Koch)。だが、これらの教師は、例えば授業で詩「民主派に反対して兵士のみを助ける」を学ばせていたし、革命を侮辱し、革命に煩わされなかったのだが。

1848/49年の市民民主主義的革命は滅びたとはいえ、革命勢力の闘いは、教育政治的領域においても、ベルリン学校史の進歩的伝統に属している。

※本稿邦訳にあたっては、筆者のドイツ民主共和国留学中 (1988—89年) に、ベルリン・フンボルト大学の指導教授であったレム本人から快諾を得ている。



## 6) ヘルムート・ケーニツヒ「1848・49年の市民民主革命の闘いにおいて民衆側にいた教師たち」

1848/49年のドイツ市民民主主義革命は、敗北に終わり、革命前からあったいかなる歴史的課題も解決されなかったが、それはドイツ国民史におけるもっとも偉大な進歩的事件に属している。革命は、封建制から資本主義への移行における階級闘争の頂点であったし、資本主義の最終的な勝利のための諸条件や、それと同時に、労働者階級の編成と彼らの革命党への組織化にとって重大な前提を形成した。ドイツの革命は、ヨーロッパの市民民主主義的諸革命の部分だったが、それらの影響のなかであって、その立場で、他国の事件の経過に影響を及ぼした。革命は、市民的変革期における革命勢力のもっとも高度な拡張期だった。この過程のなかで、教師も完全に団結した。市民的歴史書において、また、1945年以降の我々の文献においても、革命における「教育運動」が取り上げられるとき、これらの文献では、「教職者」(Lehrerstand)を、革命の経過を階級闘争の頂点と定めた階級や階層と同等かそれ以上に据えようとする傾向が明らかとなる。

シュテファン・ボルン (Stephan Born) が、自らの「労働者組織の定款」で、皮や火などを扱う労働者と並んで、教師にも団結を呼びかけ、教師の代表が「労働者委員会」に送られるものとされたとき、1848年の第2回バーデン会議で、議員が国家の下僕の中のプロレタリアートとしての国民学校教師について、生きるにはあまりに収入が少なく、死ぬにはあまりに多くのものをもらっていると語るとき、当時の出版組織で次のように言われるとき、つまり、マイニンゲンでは「あらゆる公僕、教師、何らかのものを失わねばならないまったく堅実な市民階級」が市民協会に組織されて「秩序維持のための黨員」となっていると、また、ルードルシュタットから、12人のギムナジウム生が多く教師とともに、遠く離れた村で「破壊された秩序」を回復するために、市民軍の出陣に参加したと報告されるとき、我々が、このわずかながらの事例から洞察することは、1848/49年革命での教師の活動を考察するにあたって、この時代の階級闘争における彼らの社会的地位に相応した、個々の教師もしくは個々のグループの立場から出発せねばならないことであり、ここから教育運動を判断せねばならないことである。以下の詳論では、この視点で、「19世紀半ばの教育的政治的運動」というシンポジウムの全テーマのフ

レームのなかで、いかに、ヴァンダーのような当時の進歩的教師が、国民大衆の立場にたつて、革命の各々の段階で活動的になったかが示される。

ドイツが革命前夜にあったとき、エンゲルスの『ドイツにおける革命と反革命』によると、「いろいろな養成課程を経た教師」も、政府に敵対した勢力に属していて、その際彼らのなかではディースターベークとヴァンダーが抜きこんでいた。この教師の敵対的立場は、例えば、政府に対する217名のワイマールの教師の請願書に表れた。この要求は「お願い」として宣言されていたとしても、また、ワイマールの教師が請願者として現れていたとしても、この請願は民主的要求を伴う学校政治的綱領である。この民主的要求は、革命と一括りとなっている課題の解決との関連においてのみ実現されるものだった。起草者エドゥアルド・ツァイス (Eduard Zeiss) 博士は、イエナの市民学校校長で、有名な技術者カール・ツァイス (Carl Zeiss) の兄弟で、革命では彼もまたドイツの進歩的教員運動の頂点にいたが、彼はこの関連を前文における次の言葉で明瞭にした。「私によって意図された陳情書は、ただ単に個々の弊害に向けられるべきものではない。例えばもし、ただもっと豊かなパンをと、お願いするだけだったとしたら？ これは、まったく、教師をインテリや信条正しいものにせず、教師の足枷となっている地位から彼らを抜け出させることもせず、国民学校をABC学校から…偉大なる教育舎へと転換することも不可能にするにすぎない」。カール・ナッケ (Karl Nacke) は、1848年に自らの『ドイツ国民学校教師のための教育年報』において、1847年を次のように振り返る。「圧政の時代において、留まることなく現れた自由と自立への欲求は、今年の学校の活動をも特徴付けた」。彼は次のように指摘した。「国民福祉の偉大なる学校の代弁者は立ち上がった。学校の重大問題とは—つまり、如何にして学校がもっとも自由に発展しうるのであった。重大問題は、学校の全ての友人の心を動かした。重大問題は、彼らに著作と言葉で説明するように駆り立てた。また、彼らに直接、間接の禁止にもかかわらず小さな集会を開く勇気を与えた」。この言葉が一方で示すことは、ワイマールの教師の陳情書は、教師の敵対的立場の証明書としてのみ見なされるべきことだということであり、他方では、支配的で封建的で反動的勢力は、教育

制度におけるあらゆる真の改善や教育的進歩に抵抗したこと、そして支配の道具、つなわち警察の助けと、彼らと結びついていた聖職者の助けで、教師の間のあらゆる自由な運動を弾圧したということである。ナッケは、例として、ディースターベーク、ヴァンダー、グラードバッハ (Gradbach) やランゲ (Lange) に関する嫌がらせの扱いを引用した。統計資料に基づき、皮肉な鋭さで、ナッケは教育制度の悲劇の状態を非難したが、それは、ちょうど、市民民主主義的な意味での革命の成果との連関においてのみ変革されうるものだった。

市民民主主義的の革命の重要課題は以下のことにあった。貴族的ユンカーの支配制度を打破すること、市民民主主義的の秩序を形成すること、封建的な国家分裂を克服すること、統一的な市民民主主義的のドイツ国民国家を創造することである。これらの課題には、次のことが教育政治的・教育学的領域で組み込まれた。つまり、封建的足枷を排除すること、すなわち今日まで教会によって精神的権力器具として、封建的絶対主義体制における階級支配を維持するために利用された学校を、教会からもぎ取ることである。教育政治的の領域で、市民民主主義的の秩序を形成するということは、封建的身分制学校のところに、市民的階級学校を完全に打ち立てるということである。つまり、全ての子どものために、大学まで継続する教育制度の土台として、義務的な市民民主主義的の統一学校 (国民学校) における普遍的で平等で無償の基礎教育を保障することであり - 就学前施設を基盤としうる学校である。市民民主主義的の国民教育は、統一的な市民民主主義的の国民国家において市民的国民形成を推し進めねばならなかったのである。

革命の事件に対する教師の参加を話題にする前に、革命において行動する階級や階層に対する教師の立場について言及しよう。教師の多くは、小市民に属した。それは、自らの矛盾した経済的立場やその結果としての従属関係に相応して、ブルジョアジーとプロレタリアートの狭間で揺れ動く立場をとった。村の学校教師は、貴族の学校パトロンや、封建的反動的階級の精神的権力を表出する聖職者に依存していたため、高等教育の管理職や、大部分は師範学校やギムナジウムの校長たちと同様に、地方の多くの教師も、支配的封建階級の利益を代弁した。ブルジョアジーは、革命を指揮することを求められた階級だったが、革命大衆に対する恐れから、とくにその力を現したプロレタリアートに対する恐れから、革命の道を取るのではなく、改革や古い国家権力との妥協を通じて好都合な経済的条件や政治権力を得た。彼らの利益は、例えばフランクフルト国民議会で、大学や高等教育機関の約 120 名の教授や教師の多数によっても支持された - 全ての「市民的自由主義者の名士がここに集まった」とフリードリヒ・エンゲルスは書いた。プロイ

セン国民議会のみならず、革命期に選出された他のドイツ諸領邦議会においてもそれは見られた。進歩的教師の多数は、小市民・小市民民主主義の代弁者であり、当時の、そこにおいて小市民的知識人が指導的役割を演じた、重要な革命勢力として数えられる。小市民民主主義的運動におけるもっとも穏健派か、ラジカルな共和派かといった革命において生じる細分化過程は、教師たちの間にあってはあからさまだった。農民や農場労働者は、ドイツの多くで、革命の重要な原動力だった。とくに、南西ドイツの領邦並びに、チューリンゲン、ザクセン、メクレンブルク、シュレージエンで、「1848/49 年の革命の最中、ドイツ農民戦争以来のもっとも大きな農民反乱が起こった」。カール・マルクスがフランスに関して断言したように、地方の多くの学校親方 (Schulmeister) は、ドイツにおいても、「農民階級の受容家、スポークスマン、教育者、訳者だった・・・」。この個々の「知識人のプロレタリアート」、都市や農村の国民学校の教師、しかしながらまた高等教育機関のそれも、革命において決定的に民主的勢力、労働者階級への道をたどった。労働者は、あらゆる武装闘争において最前線に位置した。労働者階級は、当時は未だ、革命の指導を担う位置にはなかったが、「唯一の階級として・・・首尾一貫して民主的共和国のために」闘い、「それによって、国民をリードせよといった歴史的要求に応えた」。1848 年 3 月の「ドイツにおける共産主義者党の要求」によって、当時約 200 名から 300 名の積極的なメンバーを抱えた共産主義者同盟が、「革命を完全な勝利に導く徹底した民主的綱領」を作成した。マルクスとエンゲルスは、『新ライン新聞』で、反革命と闘い、共産主義者の諸要求の実現のために断固闘う」機関紙をつくった。教師は労働者集会に積極的に参加し、労働組合や労働者教育組合に参加した。

さて、1848/49 年の市民民主主義革命で、いかに教師が国民大衆の側で闘ったか、若干の実例を示そう。3 月 18、19 日のベルリンで、プロイセン王に軍隊を都市から引き上げさせた労働者、手工業者、小市民そして学生の武装闘争が、革命の頂点だった。我々は今日まで、教師がバリケード闘争に参加したか否かを伝えることは出来なかった。19 世紀後半の売れっ子のドイツの小説家で、しばらくの間、ギムナジウム教師でもあったフリードリヒ・シュピールハーゲン (Friedrich Spielhagen) は、小説の主人公に「もっぱら反封建的で反聖職者の態度をもつ知識人や社会的・・・改革思想家」をすえたが、彼の最初でもっとも重要な小説、オスバルト・シュタイン (Oswald Stein) 博士における『問題ある自然』(1861) で、一人の教師を描いた。彼は「反動的な、お上による後見に対して精神的に闘っただけでなく、48 年革命家としてバリケードでも闘い、そこで斃れた」。彼は、この小説で、3 月の殉職者とともに埋葬された - だ

が、殉職者のリストにはいかなる教師も含まれない」。だが我々が知ってることだが、ケルンの実科ギムナジウムの校長エルンスト・フェルディナント・アウグスト(Ernst Ferdinand August)は、ケルン市役所の大通りのバリケードで、機械工職人ジューゲリスト(Siegerist)指揮の下、負傷者を介護しながらバリケード戦士たちを支えた。革命家たちに弾薬が無くなったあと、彼らはバリケードを放棄せねばならなかった。暴兵たちは恐るべき殺戮をはじめ、アウグスト博士をも容赦しなかった。同時代の報告では次のようだ。「ケルンのギムナジウムの校長は…おぞましい最も不当な扱いを免れなかった。そして、家族の一人とともに、銃床下で、あらゆる傷を負いながら、捕らえられ引きずられた。将校が彼の顔を剣で刺し、血が飛び散った。この平和を望む知識人の頭の上で、ドラムのスティックが打ち砕かれた。彼の甥、ヘルマン・フォン・ホルツェンドルフ学生(Hermann von Holtzendorff)は、途上で、市民が彼を引きずっている兵士の手から解放しようとしたとき、近衛兵によって撃ち倒された」。アウグストは、バリケード闘争を支えたことによって、1848年においても、1813年の時と同じであることを証明した。1813年、彼はギムナジウム上級生としてヤーンの体操指導者に属していた。ヤーンの指示で彼は、ロシアでのナポレオン敗戦の後で、有名な嘲笑歌「人と馬と車と一緒に、神は彼らを打ち負かした」を創作し、志願兵としてリュッツォー義勇軍で戦った。

2月末から3月半ばの革命活動において、ブルジョアジーの裏切りによって、権力問題が民主的勢力の利益にならなかったとはいえ、大衆は有用な成果を勝ち取った。出版の自由、集会の自由、結社の権利、選挙の権利といった本質的な市民的権利と自由の導入がその成果だった。それらは進歩的教師にも有効だった。既に1846年に、ヴァンダーは、市民がいわゆる「自然権つまり思想、言論の自由、結社の権利など」をもつとする市民民主主義的国家について記述した。

教師サイドは、出版の自由を、十分に活用した。ナツケ(Nacke)は、1848年に関する自らの年報で、本、パンフレット、記念誌および他の刊行物など149の公刊されたものを概観している。独立したものとして現れた著作で把握されたものの数は、確かに相当数にのぼった(約350)。さらにヴァンダーの著作『古い国民学校と新しい国民学校』が加わる。同書を、ドレスデンの「K.F.W. ヴァンダー」教育大学が、美しい復刻版で我々のヴァンダー顕彰祭で提示した。既存のあるいは新たに刊行された教育雑誌における論説の数は、計り知れない。ナツケは、雑誌を次のように集約して、読者の読み方の負担を軽減した。「左翼は無条件に進歩の原則に忠実で、右翼は保守主義に、また隠蔽された後退の原則にも忠実で、その一方で中間派は、両者を穏健な方法で満足させようとするフランス議会の構成に従った」。

三月革命の日の精神をさらに全く明瞭にした最初の著作は、1848年3月31日付の、ハムのギムナジウム校長フリードリヒ・カップ(Kapp)博士による『ドイツ国民教育改革への呼びかけ』だった。1848年5月22日付の第2回改訂版では、カップは、「色あせたロマン主義」に対する、「復興への渴望」に対する、「絢爛な反動」に対する、「専制政治、貴族制、正統派信仰(オーソドクシー)」に対する自らの考えと闘争心を、より具体的に、より強く述べている。カップは、同書で、反動的教育制度批判を、国家的粉碎に結びつける。彼は、30個の条項で、全ドイツにおいて有効な、母親学校で始まりアカデミーで終わる統一的な教育制度において実現される国民教育の綱領を構想した。そのための前提は、全ての教員団の高度な教育である。それ故、国民学校教師も大学教育を得ていなければならないとされた。その目標、内容、方法が、ヒューマニスティックで民主的な思想によって刻印されたこの教育制度は、あらゆる段階で、教会とのあらゆる結びつきから解放され、国家によってのみ管理されるものとされた。その際、教師の地位は、その管理までを、教育省(Unterrichtsministerium)に委ねられる。

『呼びかけ』は、広範な広がりを見せた。というのも、それが歴史的要件に相応して、市民民主主義的綱領を含んでいたからだ。ディースターベークは、この呼びかけを、「多くの重要な留意すべき提案を含み、一層普及させたいと願う」著作の一つと数え、自らの『ライン新聞』に掲載した。プロイセンの上級教会会議役員(Oberkonsistorialrat)リュットゲルト(Luettgert)は、それに対して1924年、プロイセンの1848年の教員運動に関する彼の著書で、『呼びかけ』を「ラジカルな火書としては唯一のもの」と述べた。呼びかけが、このような著作のなかで唯一のものではなかったにせよ、リュットゲルトは、確かな方法で、徹底的にものごとの核心を表した。カップの『呼びかけ』は、1848年3月の日々の革命精神の息を吐き、この精神において行動することを呼びかけた。

驚くことはない。カップの名前は、40年代や革命期に、リベラルで民主的な、いな、社会主義的なサークルにおいてさえ、有名だった。彼の息子フリードリヒ・アレキサンダー(Friedrich Alexander)は、「真の社会主義」の支持者で、マルクスと出会っている。彼はベルリンから父宛に、「カップの名前は、当地の保守派や教会派にとっては、何ら良き名前としての響きはない…敬虔なクリスチャンが悪魔と聞いて十字を切るように、彼らは、カップの名前を聞いて同様にする。カップの名前は、彼らにとって、ならず者(Bauer)やフォイエルバッハ(Feuerbach)などの系列上にある」。革命の勃発をまえに、我々がカップたち—アレキサンダーやエルンストの兄弟並びに従兄弟のクリスチャン、あらゆる教授たちやギム

ナジウム教師たち、そして記述した息子ーに見いだすことは、ーもっとも多様で、当時の進歩的で政治的な潮流の代弁者としてー小市民民主派を超えた、近代的ブルジョアにつながるリベラル派を超えた「真の社会主義者」についてである。フリードリヒ・カップは、1848年革命では卓越した役割を演じた。とくに、学校政治的領域で。既に革命前に彼は、ブレスラウの教授ニース・フォン・エゼンベック (Nees von Esenbeck) と親交を結んでいた。教授は、1848年3月にブレスラウで労働者協会を設立し、ベルリンではボルン (Born) の労働者友愛会 (Arbeiterverbruederung) に積極的に参加した。そして、教師でマルクスのもっとも親しい友人ヴィルヘルム・ヴォルフ (Wilhelm Wolff) と一緒に、プロイセン国民議会に選出された。既に3月29日には、カップは教員集会を召集した。『呼びかけ』にならって彼は、教員集会から教員集会へと渡り歩き、教師たちを組織化し、ディースターベークやプロイセン国民議会の進歩的議員と共に、有名な自由主義的民主主義的綱領である7条項を起草した。進歩的勢力に認められるや、彼はすぐさま、反動によって攻撃された。反動は、彼が「革命やバリケード建設」に関する講演のために、職人や徒弟に彼のギムナジウムの教室を提供していると責め、さらには、ハムの職人たちに、「労働時間の短縮と賃金の倍増を親方に要求すること」をそそのかしたと疑った。1852年、とうとう彼は逮捕された。1848年の活動を振り返って彼は、次のように述べた。「本当によく闘い、最後の一人となるまで耐えた。8ヶ月間の戦いのなかで8回の戦闘と、多くの小競り合いがあった。戦史において全く前代未聞じゃないか?」。

カップの例で明らかだが、教員集会は、革命的大衆闘争において達成された集会の自由の現れだった。すでに、反動的なプロイセン政府のそれまでで最も大きな敗北後の数日に、その敗北はベルリンの革命的民衆がプロイセン政府にもたらしたもののだが、約200～300のベルリンの教師たちが、1848年3月26日に、はじめての教師親睦団体 (Geselliger Lehrerverein) によって召集された集会に集まった。この集会で、あらゆる学校種の15名の教員からなる委員会と、国民学校教師ヴィルヘルム・コッホ (Wilhelm Koch) が座長 (Praesident) として選出され、彼はまた後の集会を主催した。ベルリンの警察署長 (Polizeipraesident) ヒンケルデイ (Hinkeldey) の教師に関する1849年10月14日のリスト「政府に敵対した徒党行為に責任もしくは疑いがある者」では、コッホは「共和主義者」と記されている。1849年、彼は二度の警告を受けたのみならず、ファルツの一揆を支持したとの名目上の理由で、三ヶ月間の刑務所の拘禁を宣告された。服役後、彼は大声を上げる民衆に迎えられ、バンドのメロディーのなかで自宅に入った。このコッホによって

主催された集会では、とくに、「プロイセン教師への呼びかけ」が採択され、それは、「1848年4月中旬」の日付とともに、単行本として出版され、ディースターベークによって彼の『ライン新聞』にも掲載された。特徴的なことは、この「呼びかけ」が、革命闘争の感銘のなかで生じたものであること、バリケード戦士が、「革命は終わりだ。改革がはじめられねばならない」という、もちろん誤った見解から抜け出てーいまや、その教育政治的綱領を議論に据えたことである。それは民主的綱領である。そこでは、教育省と、教育制度の専門家によるリーダーシップが最も要求され、封建的絶対主義的反動の代弁者も、聖職者も何らの地位を見いだせなかった。これらの当局は教師と極めて最も親密に協働しなくてはならない。国民学校から大学まで明瞭に区分された民主的な統一学校への要求は、「全ての学校は万人のために」のモットーの下にあり、「カネ袋」か特権に依存している高等教育への批判である。全ての教師は、大学で教育され、人間の尊厳を無くすような国民学校教師の経済的社会的地位は排除されるべきものとされた。この呼びかけの作者が誰か分かったら、その内容にも文体にも驚かない。それは、進歩的なベルリンの教師の頂点にいたディースターベークの同僚で友人だった師範学校教師エドゥアルド・ヒンツェ (Eduard Hintze) だ。既述した警察の報告書では、「前年の騒動のはじまりから骨の髄まで共和主義者。彼は、手工業者組合における重要教員でアジテーターの一人である」とある。1848年以前、彼は青年ヘーゲル派と交流し、学生時代にはカール・マルクスとも知り合った。1848年4月26日のいわゆるベルリン・チボリ (Tivoli) 集会では、2～3百人のベルリンの教師と、3～4百人のベルリン外の教師が集まった。コッホが主催したこの集会には、ディースターベークも大歓迎された。ヒンツェは、この時点まで継続された協議に関する報告を行い、呼びかけの詳細について説明した。長い議論の後、「プロイセン国民の代表者に向けた1848年4月26日のベルリン・全教員集会の陳情」が採択された。ナッケによれば、この陳情は、「たぶん、たいていのその後の教員集会に、基本的なものとして役だったに違いない」。そのことは、「1848年3月の日々からのドイツ国民学校領域での改革努力史」のタイトルで、320頁にわたって集められた、1848年4月から全ドイツで起こった、小さな村や全領邦の教員集会の事件集で明らかとなる。ヒンツェの呼びかけから生じた陳情は、1848年3月後の勢力関係に明確に反映する。呼びかけの多くの要求は、進歩的な意味でプレゼンされたが、かかる一句も存在した。断固たる民主派は教師達のなかでは、もはや十分に活躍することはできないだろうと。この陳情はまず第一に、民主的綱領として見なされ得たものだがー反動的勢力は十分に麻痺させられ、その活動が制限されたが、打倒はされてなかったー教師のなかの

ブルジョア自由主義の支持者も、すでに反動的勢力との結びつきを探していた。『呼びかけ』でのヒンツェの要求は、革命が徹底的に成し遂げられた場合においてのみ、実現されるものであった。民主的教師たちは、自分たちの要求が、全ての関係の民主化に対する要求の部分としてのみ評価されるうること、だから、重要なことは国民大衆を、これらの民主的目的のために、教師と同様に、教育政治的分野に動員することであることを十分に認識していた。このような教育者に属してたのが、ベルリン・貧民学校教師のテオフィル・ビットコーヴ (Theophil Bittkow) だった。彼は、アルテンブルクの教師 Dr. アドルフ・ドゥエー (Adolph Douai) と同様に、労働者運動と親密な関係を維持し、3月4月の国民集会でも教育政治的問題について発言した。ある聖職者の報告には次のようにある。「ほんの暫くして、いくらかの近隣の村落にも、アルテンブルクの男どもが現れ、その虚偽的行動を通して多くの支持者を得た、とりわけ、下層階級で支持者を得た… あらゆる警告にもかかわらず、学童が国民集会に行くことを避けることは出来なかった」。この「男ども」に、アルテンブルクの共和主義者のリーダーの一人ドゥエーがいた。ある報告によると、彼の「1848年のアルテンブルクの共和主義者の国民カテキズムは、ほとんどの家にあるようになった」ことから、1848年6月27日の公示によって、この国民カテキズムを生徒に触れさせないようにとの指示が出される結果となった。「というの、さもなければ、あらゆる奇跡と豊穡の宗教書(カテキズム)が無くなっていくだろうから」。ドゥエーはマルクスとエンゲルスの影響下、社会主義者に成長したことで、彼については他の箇所でもう一度述べることになる。

都市や農村における国民集会は、教員の集会と同じく、3月革命後に成長した、「広範な大衆が引き込まれた」巨大な政治的生活のための表出だった。これらの集会は、「革命的活動や政治運動を通して3月革命の成果を確かなものにし、広範な民主的対策を徹底し、封建的状况を完全に排除する」という国民大衆の企ての一部だった。

国民集会も教員集会も、いかに3月において獲得された「結社の自由」が利用されたかを、いたるところで、明瞭にした。国民集会の多くは、国民=祖国協会によって普及され、実施された。そこでは、小市民民主主義が支配し、頂点にはしばしば教師も、とくに国民学校教師がいた。教員集会は、一部は、いたるところで生じた教員組合 (Verein) によって召集された。ナッケは、自らの「改革努力史…」で、「ドイツ教員=教育組合」について概観している。約900名の教師がドレスデンに集まった第2回ザクセン教員集会では、1848年8月8日に、かの有名な、ヴァンダーによって起草され、彼らやエドゥアルド・ツァイス (Eduard Zeiss) によっても署名

された「全ドイツ教員組合」設立の呼びかけが定められた。同組合による最初の全ドイツ教員集会は、1848年9月28～30日にアイゼナハで行われた。そこで公表された学校政治的綱領は、民主的要求と自由主義的要求が混在していて、その本質的には進歩的特徴にもかかわらず、教師間にも小市民民主主義の細分化されたプロセスが作用し、また、ブルジョア自由主義の代弁者は「団結化のための理論」(Vereinbarungstheorie) の意味で、自らの立場を強化したことを明瞭にした。ブルジョア自由主義の最も有名な唱道者の一人、市民学校長カール・マーゲル (Karl Mager) は、集会に関する自らの報告で、達成された統一的な教員組織であるにもかかわらず、階級によって制約された断絶が、教師のなかでどうだったかを明瞭にした。彼は述べた。「さらに、若干の国民学校教師、すなわちシュレージエンとザクセンの連中が革命に酔った演説を行った… ドイツ教員組合が設立された後、集会の大部分の連中が、ちょうどアイゼナハに居合わせた学生たちや、アイゼナハの住民の一部と一緒に、ワルトブルクへの隊列で団結した。当地で、また、夕方遅くまで町で、多くの演説がなされた… それを聞いた人々は、他日の朝に起こった当地の一部兵士の反乱を、その演説のせいにした」。

小市民民主主義による国民=祖国協会の設立や、大ブルジョア自由主義による立憲主義の旗の下での市民協会などの設立は、1848年3月の終わりから6月の終わりの革命の第2段階、つまり、議会形式の代表者団体のための選挙準備という段階において有効だった。小市民民主主義は—それがドイツ国民議会によるものであれ、個々の領邦の類似の委員会によるものであれ—革命の十分な成果をこの議会に期待したが、「議会外の革命闘争を組織し、指導すること」は出来なかった。「選挙」は、非民主的な制限を備えていたとはいえ、3月革命の成果だった。はじめて教師たちも議会に入った。パウル教会では、ドイツ国民議会議員として約120名の教授と教師が議席に着き、プロイセン国民議会では、17名のギムナジウム教師と11名の国民学校教師、ハノーファーでは第1議会に3名の教職の代表者、ザクセン州議会では8名の教師が選ばれ、ザクセン・ワイマール・アイゼナハ州議会では3名、アルテンブルクではたった1名であるが、シュバルツブルク=ゾンダーハウゼンでは14名の議員中4名だ。ほんの実例をあげただけだ。小市民民主主義派に、とくにラジカルな共和主義派に属したのはごく少数だったとはいうものの、教育政治的諸問題が詳細に論じられ、「極左派」が政治的領域での彼らの要求を、学校政治的要求を含めて議会の演題から告げたのは、とくにこれら教師達のおかげだった。ドイツ国民史概要では、こう述べられている。「1848年4月5月の選挙で生じた議会は、国民闘争の最も重大な成果だった。最初の

ドイツ市民議会の形成は、偉大なる進歩だった」。フリードリヒ・エンゲルスも、自らの論説シリーズ『ドイツにおける革命と反革命』において、ドイツ国民議会在「ドイツ革命の最初で最後の創造物」であり、その召集が「ドイツで革命が実際に起こった… ことの最初の確かな徴候であり…」、議会は、この近代ドイツ最初の革命が終息しないかぎり存続したことを指摘した。しかし同時にエンゲルスは、この議会の活動の限界を指摘し、ドイツ国民議会と他の議会、ここではとくにプロイセンとオーストリアの議会との差異について言及した。これらの議会の編成は、フランクフルト国民議会に一致していたし、その発展も同様だった。相違は、エンゲルスが言うように、以下にあった。「ドイツ国民議会は、想像上の国の議会だった… そして議会は、議会自身によって創造された想像上の政府の、決して実現されるはずのなかった方策を議論していた。そして、議会は誰も責任をとらない想像上の決定をした」。他の領邦では、「立憲主義的団体は、少なくとも、実際の政府を倒し、任命した実際の議会だった」。その際、議会は最終的には国民を裏切り、権力を「封建的、官僚主義的、軍国主義的専制の手中」に置いた。「しかしながら議会は、同時に、少なくとも直接的利益に関する実際の課題を論議するように強いられたし、フランクフルトのおしゃべりどもが、『夢の空世界 (Luftreich des Traums)』で暖かく包み込まれる以上に、幸福なんて決してなかったときに、他の人々とこの世で生活することを強いられた」。この議会で論じられた「直接的利益に関する実際の課題」には、教育制度に関係した課題もあった。

しかし、まずは、もう一度ドイツ国民議会に戻ろう。国民議会は1848年の終わりに基本権を、1849年3月には帝国憲法を可決した。そこでは、適当な条文ではじめて、市民階級学校の統一的な基礎をドイツ中に創造する試みがなされた。それは左派議員の功績だった。彼らは、学校問題や国民教育のための委員会である国民学校制度部門の頂点にいた。すなわち、ターラントの教授エミール・アドルフ・ロスマスラー (Emil Adolph Rossmassler) とボイツェンブルクの国民学校校長ルドヴィヒ・ラインハルト (Rudwig Reinhard) である。彼らは適切な希望を委員会に届けることを求め、入手された資料を精読し、1848年10月16日から21日までフランクフルトで開催されたドイツ国民学校教師会議の代表者と協議した— はじめてドイツで、教職の代表者と議会の協働が行われたのである。学校問題に関する国民議会における論議そのものは、決議案と同様、確かに評価されてはいけな。議員である校長リュエメルン (Ruemelin) は、学校委員会のメンバーでありながら、議会について次のように語った。「彼らは学校についての議論を、苦悩と骨折りで行った。議論がはじまるや、議場は空になっ

た」。この問題について彼は次のように報告した。「だからこれらの基本権では、全ての基本的なものであっても、個々では全く基本的でないことが生じている。議会の大多数は、問題について何も理解しておらず、目下のところ、問題を詳細に認識しようというつもりはない。そして、投票にあたっては、偶然と瞬時の判断が、決定に大きく関与する」。だから我々は、このようなフリードリヒ・エンゲルスによれば、「その多数は、自由主義的な法律家と教条主義的な教授たちから構成された」議会における教師の活動について詳細に言及することはやめよう。そして、もう一度、疑いなく小市民民主主義のラジカルな共和主義派に属していたラインハルトの行動について注目しよう。例えば、学校の課題は、財政上の問題から潰れねばならないという反対意見に彼は、次のように答えた。「兵営を建てるとき、新しい軍服やヘルメットを調達するとき、お金をどうするなんて言わずに、そうしなくちゃならないからと即座に言うだろう。この課題も、同じ答えが与えられる場面さ」。この陳述は、ナッケが自らの年報であげた金額を知ることによってはじめて、完全にその意義が理解できる。それによれば、プロイセン連合州議会の予算では、初等学校制度用には33万4千588ターラー、軍用には2千577万502ターラーが計上されていた。ラインハルト、彼は既に1849年6月には政治活動故に教職を追われていたが、議会誌に次のような告白をした。「革命は、雷雨と嵐のように必然であり有益である。あらゆる革命は、国民の倫理的憤りのなかに、そのレゾンデートルをもつ」。ドイツ国民議会のラインハルトのように、既に言及したライン管区のオーデンタールの教師アントン・グラードバッハは、既に革命前から手配され、迫害され、ケルンでは投獄され、1848年3月7日には再び解放されるはずだったが、彼はプロイセン国民議会の「最左派」の数少ない活動的な代弁者に数えられた。カール・マルクスが1849年2月18日の『新ライン新聞』で、1849年2月11日にケルンの労働協会によって開催された「民主主義者の饗宴」で、「フランス、イングランド、ベルギー、スイスの闘いに参加したドイツの労働者について」語ったことを我々は知る。さらに、次のように述べている。「このドイツの労働者は、真に国民の利益の代弁者である特別な協会の一人、グラードバッハに乾杯を捧げた」。グラードバッハ自身は、「解散した国民議회를回顧して、エネルギーな講演で、その弱さ、その優柔不断さ、その革命の理解不足を批判した」。同じくこの饗宴に参加したエンゲルスは、プロイセン国民会議の議事に関する『新ライン新聞』の報告で、この教師を、小市民民主主義の決定的な代弁者として、その業績を讃えた。彼は、1848年6月30日の議事において、グラードバッハの活躍について次のように書く。「喜ばしいことは、とうとう、左派議員が良くまとめられた質問と断固たる振る舞いに



よって、大臣たちを罰し、そしてフランスやイギリスの議会の論議を思い起こさせるシーンを呼び起こすことに成功したことだ」。1848年8月11日のケルンでの民主団体の総会については、次のように言う。「嵐のような喝采とともに登場した代議員グラードバッハは、さらに、ベルリンの議会によっても、フランクフルトの議会によっても、救いが期待できないことについて論議した。エンゲルス氏は、いかに、グラードバッハが常に自由意思と勇敢さで…卓越していたかを強調する。ここでグラードバッハは、三度の万歳を得た」。プロイセン国民議会の21名の代議員が、ディースターベークやカップの助言下で、議会も教師も満足しない1848年6月26日の憲法草案に対する代替案を、全体討議のために提出したとき、グラードバッハの署名も欠けてはいなかった。

ドイツの小さな領邦の個々の議会では、学校制度の問題、とくに国民学校の課題が取るに足らない大きさで扱われたのではなかった。その際、重要だったのは、社会的原則的課題ではなく、「実際の課題」だった。つまり、市民民主主義の統一学校の建設や、市民民主主義的な国民教育によって、全ての教育制度を民主化するというのではなく、徹底して重要だったのは、教師の待遇改善をどうするかであった。原則的な課題では、とくに、学校と教会の関係の課題が論議され、その際、合意するための論理として問題になったのが、教会をただ、政治的経済的な権力を求めるブルジョアジーの要求に利用させることであり、それと同時に、学校と教会の分離を求める民主的な考えの教師たちの要求に応えることであった。「聖職者それ自身」から学校監督を取り上げるべきだという定見は、見つけ出した呪文のように信奉された。これらの学校問題が十分に論議されたのは、考察してきたように、教師たちも同僚の利益を議会で主張したからであり、そのみならず、とくに、幾百の教員集会によって、教員組合によって、個々の教師による適切な要求によって、とりわけ待遇改善を求めて、建白書、陳情書、パンフレットなどの類が議会に届けられたからである。各種委員会がスタートし、それらの提案が議論され、国民学校法の草案が練られたチューリンゲンの小領邦たちは、さらに、共通する法律を完成させようとしたところどころ合意を得たが、最終的な合意は、ただ、このチューリンゲンの国民学校法案について専門家が述べているように、「教師を悲劇的な境遇にさらしている危難を、教師から取り除くためには、政治的変革において、教師の境遇が悪くなるよろも、むしろ改善されることの方を教師が期待している」ということだった。グラードバッハとは違ったかたちで、議会で活躍した教師の多くは、小市民民主主義者に加えられるとするなら、彼らに最も適切な旗幟は、古い権力との妥協という意味での改革を志向するものであった。そのような者に属して

いたのが、例えば、タムバッハの教師で、ザクセンコーブルクゴータの領邦議会議員リッター (Ritter) だった。彼は、たしかに、新たな市民的状况に向けられた教育制度の原則的課題を提起し、活発に、既存の不幸な学校の状態を非難したが、経済的・政治的・反動的な根拠に触れることはなかった。彼は、ゴータの教員組合の代表として、改革を求めて闘ったが、「最も穏健な道」をたどった。そのことを、当時の反動的な新聞が、次のような言葉で、当地の教師みんなに証明した。「ゴータで開催された教員集会に我々は熱心に参加した。新鮮で、健康な精神、平穏さ、慎重さ、そして遵法精神、それは、我々の領邦の市民・国民学校の代表者のなかで述べられ、大いなる承認と偉大なる敬意を得た」。

これらの教師たちは、さらに、その最も「穏健な道」をたどった。例えば、ベルンシュタットの教師メツェ (Maetze)。彼は、プロイセン国民議会議員として左派にあって、「32条」の呼びかけに署名した一人だった。その呼びかけは、フリードリヒ・エンゲルスによれば、「集会を嵐から…学校教師の生活を静かな海に導くものであった」。そして、革命の第三段階、つまり1848年6月末から12月はじめの時期において重要だったことは、次第に強化されてくる反革命の様々な形で現れる攻撃を撃退することだった。反革命を拒絶し、革命を継続することとの関わりで、シェーンハイデの学校教師マイネル (Meinel) は、1848年11月23日のオーバーシュテュエングリュンの祖国協会の集会で、反動がラジカルで共和主義的な民主派を「扇動家」と言っていると述べた。マイネルは、大いに誇って次のように告白した。「そうだと、我々は、暴政の構造を破壊し、暴政を埋葬するために扇動しよう。反動は、我々を共和主義者と言う。そして、そうだと、それは恥ずかしいことなのか？共和主義は、完全な国家の形である。そしてそれは、いつも、我々の努力の目標であり続ける…反動は、我々が既存のものを転覆させようとしていると言う。しかし、古い構造があまりに悪すぎるなら、それが覆され、新しいものがそこに生じるべきじゃないか」。1849年2月24日、フランス2月革命の記念日に、2～3百人の参加者で記念祭が行われた際に、グラードバッハは、「ケルンの民衆に、起こりうる議会への新たなクーデターでは、代議員を守るために立ち上がる」ことを求めた。

ほんの少し経って、1849年の5月はじめから6月終わりにかけて、帝国憲法闘争が、「ドイツ革命における最後の大きな武装対決」として起こったとき、少なくとも教師たちが国民大衆の革命活動を支えた。ここドレスデンでは、1849年5月3～9日に、1万人の労働者、手工業者、知識人が、バリケードで優勢なザクセンとプロイセンの軍隊と闘ったとき、彼らのなかには、没100年

のときに、ここドレスデンでその榮譽を共和国中で讃えた建築士ゴットフリード・ゼンパー (Gottfried Semper) と並んで、ツピッカウのギムナジウムの副校長エドゥアルド・リンデマン (Eduard Lindemann) や、ドレスデンの体操教師養成校幹部の L・レーマン (Lehmann) がいた。彼は、ある報告によると、「5月3日から9日まで、ここで起こった蜂起ならびに、軍隊との戦闘において、司令官として参戦し、数多くのバリケードを指揮した」。マーゲル (Mager) によって編集された『教育誌』 (Paedagogisch Revue) では次のように述べられた。「残念だ！残念だ！主として国民学校教師が大活躍した調停者であり、蜂起を急いで知らせた使者だった…。」公文書や他の同時代の報告書から明らかなように、これらの教師は、国民集会で臨時政府の承認や、ドレスデンへの援軍を求め、それがためのポスターを広め、弾薬や輜重を組織し、ドレスデンへの武装隊を指揮した。この最後の武装闘争の他の中心地、王宮、バーデン、ビュルテンベルクや他の地域で、教師たちは参加した。「少なくとも学校教師が、彼らの公的な地位や活動とは全く結びつかない方法で、王宮での運動に参加した」と、『教育誌』は述べる。さらに、そのような教師としてあげられるのが、ランゲンザルツァの副校長で、当地の民主派の指導者で、プロイセン国民議会議員の Dr. カール・シュラーマン (Karl Schramann)。『教育誌』の同じ箇所、バーデンにおける教師の闘争への参加について次のように述べている。「様々な監獄に捕らえられた者の中に、とくに、多くの教師がいる…40名を超える学校教師が…ぶち込まれたらしい」。例えば、教師マッテルン (Mattern) は、「ザクセン人の軍団の中隊長」だった。ビュルテンベルクについてはこうある。「様々な報告によれば、先月の騒がしい運動や政治的逸脱には、とくにまた、国民学校の教職の関係者が参加していた」。

プロイセンでは、1848年5月31日の指令を通じて、領邦議会議長の下で、また学校視学官、それ故聖職者の指導の下で、郡 (Kreis) や管区 (Provinz) の教員会議を招集して、教師の進歩的な活動をコントロールしようとした。既に1848年の終わりには、反革命の強化の現れとして、プロイセン大臣フォン・ラーデンベルク (von Ladenberg) によって、進歩的教師への迫害が文字通りの意味で開始された。革命の挫折後、プロイセンのみならず、あらゆる他の諸国で、迫害が始まった。それは、懲戒処分に関する警告から、免職、死に至る投獄へと数えた。例えば、バーデンの蜂起に参加した教師カール・ヘーファー (Karl Hoefler) の銃殺のように。幾百人の進歩的な教師、とくに国民学校教師が、当時、学校から追われた。一方で幾人かは、逃走や移住によってのみ、反革命から逃げる事が出来た。その反革命は、学校教師を教職から追い払えというプロイセンのユンカー・プファイル伯爵 (Graf von Pfeil) の命令に従って、「教師が

学校を失い、ガルゲンフェーゲル (Galgenvoegel) のように、教師を国から追い払う」ことをした。当時の郡の管理区ツピッカウ (Zwickau) では、たった13名の教師があわせて104年の懲役刑を受けた。また、反革命の法廷の前では、進歩的教師たちが、彼らの革命的行動を表明した。例えば、ドレスデンへ進軍した義勇軍の頂点にいたヒルシュベルクの教師ゼルラー (Soeller) は、法廷のホールで、「ドレスデンへと向かった援軍を引き起こした状況は、私には、教職よりも崇高なものだった。私はまったく正義を行つたと確信している」。

1848/49年革命の断固たる民主的勢力は、あらゆる闘争で最前線に立っていた若いドイツのプロレタリアートだった。その前衛である共産主義者同盟は、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』の導きの下で、『ドイツにおける共産党の要求』において、革命の勝利のための首尾一貫した民主的綱領をもち、労働者階級の歴史的使命を描いていた。そこでは教育政治的領域の諸要求も含まれていたが、それについては、このシンポジウムで多様な側面から論じられるだろう。最後に、いかに教師たちが、革命において、革命を通じて労働運動の側に立ち、最終的には労働運動の隊列へ入り、労働運動のなかで闘ったかについて論じよう。我々は既に、グラードバッハが小市民民主主義のラジカルな共和主義派として、いかに、マルクスやエンゲルスと親密に協働したかを述べた。ベルリンでは、約15名の教師が、警察署長のリストに「赤い思想家」として描かれていたが、その際、少なくとも彼らの内、数名は労働運動と繋がっていたと推量される。ベルリンの手工業者組合では、教師ボルマン (Bollmann)、バーム (Boehm)、エドゥアルド・ヒンツェ (Eduard Hintze)、ヘルトヴッヒ・ゲレーケ (Hertwig Gereke)、テオフィール・ビットコウ (Theophil Bittkow) そして、マルクス・エンゲルスの友人カール・フリードリヒ・ケッペン (Karl Friedrich Koeppen) が、活動していた。ビットコウは、派遣代表者としても、ベルリンの労働者会議に参加した。共産主義者同盟のメンバー・シュテファン・ボルン (Stephan Born) の指導の下、ここで、多様なドイツの労働者組織のはじめて地域を越えた連合としての「労働者友愛会」 (Arbeiterverbrüderung) が誕生した。それはまた、教育政治的綱領を発表した。アルテンブルクの共和主義者のリーダー・アドルフ・ドゥエー (Adolph Douai) は、北アメリカの合衆国に移民したが、当地で、彼はマルクス主義的労働者党の共同設立者に、そして、第一インターナショナルのアメリカ支部に所属した。そして、様々な活動において、フリードリヒ・フレベルのヒューマンで民主的な思想に肩入れした。共産主義者同盟には、クレフェルトで、マルクス・エンゲルスと結びつき、革命の期間、ケルンやトリーアで活躍した教師ペーター・イマント (Peter Imandt) と並んで、ヴィルヘルム・ヴォルフ (Wilhelm Wolff) がいた。彼は

まだ、教職を目指して勉強中に、煽動者迫害において投獄され、公的な教職には就けなかったのが、家庭教師としてずっと過ごさねばならなかった。マルクスやエンゲルスと面識を得て、彼は、共産主義者同盟の幹部となった。1849年後、イギリスでの亡命の間、彼は再び家庭教師として教えた。フリードリヒ・エンゲルスは、1876年に彼を、ある論文集で特別に評価した。そこでエンゲルスは次のように結論付けた。「マルクスと私は、最も信頼できる友を亡くした。ドイツ革命は、掛け替えのない男を亡くした」。この論説でエンゲルスはヴォルフを、政治家で卓越した出版者としてのみならず、自ら熱烈な、そして人を熱烈にさせる教育者として触れている。エンゲルスは「子どもを扱うのが上手で、子どもから好かれる」彼のずば抜けた手腕について触れている。そして次のように述べる。ヴォルフは「その高貴さ、責任感、明るい愛すべき性格によって、生徒たちから崇拜され、年長者も年少者も、ドイツ人と同様にイギリス人からもみんなから尊敬され、愛された」。

最後にたどりついたが、バーデンの革命への参加について— 1848年9月の共和主義者による蜂起、および1849年春の闘争への参加— ヴィルヘルム・リーブクネヒト (Wilhelm Liebknecht) は、以前は、スイスでカール・フレーベルの模範学校で活動しており、自らを「職業的学校親方」と自覚しており、教師に常に友情を抱いていた。1850年にはロンドンで共産主義者同盟に。彼は、当地で、エンゲルスやマルクスと親交を結び、彼らの影

響下、19世紀の後半三分の一の時代におけるドイツの革命的社会民主主義者の最も卓越した指導者の一人となり、同時に、この時代における社会民主主義者の最も重要な学校政治家となった。

以上挙げた人たちとともに、100年以上にわたるドイツ労働運動で実証された有名無名の教師が続く。その伝統を我々ドイツ民主共和国の教育者は守る。同時に、我々はここではほんの少ししか挙げることが出来なかったが、K・F・W・ヴァンダー (Wander) のように、1848/49年の市民民主主義革命において、国民大衆の側にたって闘った教育者との結びつきを感じる。彼らは、すでに当時—今日の、西ドイツや他の資本主義諸国の進歩的教育者のように— 職業禁止で迫害され、同様なさらに強い報復措置にさらされた。我々は、1848/49年革命での教師たちの革命的活動が証明できる我が共和国のこの地で、また、これらの活動を、我々が教師と生徒の革命的伝統の育成に向けて、歴史意識の発展のために、彼らのなかに共に注ぎ込ませるべきであろう。それは、ドイツ社会主義統一党綱領の要求、つまり、「あらゆる偉大なるもの、高貴なもの、ヒューマンなもの、革命的なものを、現代に生き続ける課題として、守り、継続すること」を達成することへのさらなる寄与となるだろう。1848/49年の市民民主主義的革命闘争での国民大衆の側にたった教師たちに関する私の講演が、このことに若干の刺激となることを願う。



## 7) ヘルムート・ケーニヒ:19世紀前半におけるフリードリヒ・フレーベルと小市民民主主義の結びつき 第二部

### 4. 1848/49年の市民民主主義革命におけるフレーベルと彼の同志の政治的表現と活動

ヨーロッパにおける市民民主主義革命の一部としての、1848/49年のドイツ市民民主主義革命は、市民的変革の全過程における頂点を形成し、資本主義の完全な勝利のための新たな条件をつくり出した。革命は、王侯、貴族、ユンカー側と、国民大衆側との決定的な対立だった。革命の課題は、一つは、反動的封建的支配制度を打破し、資本主義的社会秩序を勝利に導き、市民民主主義的秩序を整えることにあった。二つ目は、封建的領邦的分裂を克服し、統一的な市民的国民国家を建設することだった。ブルジョアジーは、これらの課題解決にあたっては、指導的役割を引き受けねばならなかったが、革命は、改革のみで、古い国家権力との妥協に終わった。最も決定的な民主勢力は、未成熟なドイツのプロレタリアートで、指導的勢力となるには、まだ、充分には成長していなかった。ドイツのいくつかの地域では、農民も、革命の重要な原動力だった。小市民大衆に、我々は、フレーベルと多くの彼の同志を数えることができる。

彼の政治的表現や、小市民民主主義は、重要な革命的能力を表現した。だが、小市民の革命的可能性は、産業資本主義の進歩的発展の制約下に限定されていた（「ドイツ史概説」1979）。

フレーベルによって育てられた最初のそして最も重要な幼稚園教師アマーリエ・クリューガー（Amarie Krueger）は、ハレ近郊のクエツから1848年3月25日に次のように書いた。「私たちの素敵なフレーベルが言うことを、ただ、毎日ここで記していますが、あなたが近くにいたなら、私たちと喜びを分かち合うために、とくに、呼び戻されているでしょう。ええ、私たちはみな知っていますよ。カイルハウ人は自由のために熱狂することを、古いリュッツォー義勇軍兵士がその先頭いることを」。

フレーベルは、革命を小市民民主主義の偉大さと境界の意味において、熱狂的に迎え入れたと、我々は断言できる。彼のポケットカレンダーに、1848年3月に書き込まれたことは：

13日にベルリンで騒動が始まる。そこから17日18日19日、大衆の完全なる勝利の成果。プロイセンはいまや、以前のバーデンのような、立憲主義的王国。

これから、手紙やスケッチなどの日付には、マルの印で囲まれた1848年が強調された。マルクスが、1848年7月に、「民主的な党派」の特徴と説明したように、彼の感激、親戚、友人、生徒の感激は、疑いなく「はじめての勝利の陶醉」に由来した。それは次のように述べることから明らかだ。

1848年3月18日、フレーベルは、彼の友人フリードリヒ・ホフマン（Friedrich Hofmann）に次のような手紙を書いた。民主主義者ホフマンは、ヨーゼフ・メイヤー（Joseph Meyer）の同志で、書誌学学校の創設者で、「会話事典」の編集者。

我が大切な愛すべき兄弟よ！ 我が民族と祖国の幸福と至福のために、二つのドイツ人の燃えたぎる心臓を、一つの心臓のように、強固に結びつけさせるために、例え精神的にせよ、私の心臓に君自身をぶつけてみてくれ…。

1848年3月20日のムーメ・シュミット（Muhme Schmidt）への書簡。そこで彼は、「怒濤の暴風」について、全ての生活状況が根源から改善されることを期待して、次のような追伸を添えた。

3月21日には、今や自由な祖国に幸福が！3月22日の朝には、ドイツ民族の、自由なドイツ民族の春の朝に迎えられるでしょう。自然の春、天上の春と共に、地上では、ドイツ民族の、祖国の春がはじまるのです。神の世の永遠の支配に祝福あれ。君より若き従兄弟、Fr.Fr。

とくに興味深いのは、フレーベルと、シャルカウ（Schalkau）の初等教員で市のオルガニストであるヨハネス・シュタンゲンベルガー（Johannes Stangenberger）の書簡である。フレーベルは彼を、アイスフェルト教区のスポークスマンに任命し、シュタンゲンベルガーは、

革命ではザクセン・マイニンゲン・ヒルトブルクハウゼン公国の民主的な教員運動で卓越した役割を演じた。1848年3月19日のシュタンゲンベルガーへの書簡でフレーベルはこう述べた。「私の大切な友よ、ドイツは、精神的にはすでに、多面的に唯一のものだ。絶えず、行動的であろうじゃないか」。

どれくらいフレーベルが、この「行動的であること」を、自分自身のために理解しようとしていたかは、同じ手紙の以下の内容が示している。

あなたは正しい。民族の生活のなかで、民族のために、権利と榮譽を守ろうとすること。その気持ち。例え、他人は無くしてしまっても、そのような気持ちに駆りたてられたなら、私は35年前のように、もてるもの全てと血をもって、そのことを行うでしょう。

書簡の他の箇所で明瞭になることは、彼が革命闘争への若者の参加にどれくらいの関心を向けていたかである—おそらく、もっと分かってくるように、彼は身近な若者の参加を確かに誇らしく思っていたのである。ウィーンでの闘いに関して、彼は確めた。「工業学校の生徒たちが、素晴らしく勝ったが、多くの血も流れたということだ」。1850年に、フレーベルの重要な同志ルドルフ・ベンフェイ (Rudolf Benfey) は、カイルハウで、Dr. ジークフリード・シャフナー (Siegfried Schaffner) が、年長の生徒たちに、「1848年10月のウィーンでのアカデミー義勇軍としての自らの運命について」語るのを目撃した。多くの異論にもかかわらず、エンゲルスによれば：

アカデミー義勇軍は、3千から4千人で、強力に良く訓練され、確かな規律をもち、勇敢で、熱情に溢れ、軍事的視点から、成果が見込まれる唯一の戦力であった。(エンゲルス『ドイツにおける革命と反革命』)

ローベルト・ブルーム (Robert Blum) と、フレーベルの甥ユリウス・フレーベル (Julius Froebel) は、義勇軍の名誉戦士で、リーダーとして軍団を指揮した。シャフナーは、フリードリヒ・フレーベルの姪エリーゼ (Elise) と結婚し、20年以上カイルハウにいて、それからグンペルダ (Gumperda) に教育舎を建てた。

若きバリケード戦士に対するフレーベルの感激は、以下の記録からも明らかとなる。

1848年3月26日、フレーベルはルードルシュタットのベルンハルディーネ・ベーリング (Bernhardine Baehring) から手紙を受け取った。彼女は、カイルハウに隣接するオイヒフェルト (Eichfeld) の牧師の妻で、彼女の6人の子どもは、通学生としてカイルハウ学園に通学していた。彼女は、自分の手紙に、ベルリンでバリ

ケード闘争に参加した彼女の息子ヴィルヘルムの1848年3月19日の手紙を同封した。フレーベルは、彼女の手紙を、1848年3月24日のニュースとして、書き写した。

…我々のヴィルヘルムについて、私に宛てた手紙でテレーゼは私の夫に次のように言ってます—あなたの義理のきょうだいである W. ベーリングは、よく闘いましたが、味方は50人が斃されました。だから彼は兵士の前から屋根伝いに逃げました。

かつての生徒の参戦に感激してフレーベルは、『母の歌と愛撫の歌』の見本の献辞のための草案として次のように書いた。

ドイツの自由のための立派な同志に  
ドイツの正義、ドイツの倫理、ドイツの誠実を  
ベルリンの流血の日々における  
真のドイツの若者に  
私の勇敢な弟子で、私の素敵な妻の価値ある代父に  
ヴィルヘルム・ベーリング  
彼は、行動を通して、我々の気高い詩人の確信を証明した  
「思い切って人生をはじめないなら、人生を得ることはできない」と  
また彼には、あらゆるドイツの婦人に捧げられたこの本が手渡される  
彼のドイツ魂の承認として  
彼の未来の愛すべき花嫁である妻への贈り物のために  
彼のかつての不断に誠実な養父  
フリードリヒ・フレーベル

カイルハウ、24日、1848年の春の朝

また多くのカイルハウ人が、1848年3月にはまだベルリンに留まっていたが、闘争に参加するかどうかは保留していた。若きデンマーク人、マリウス・ベンゼン (Marius Bensen) は、1845年から47年までカイルハウの生徒で、続いてベルリン大学で数学を学んでいたが、1848年2月1日に、フレーベルに長い手紙で次のように書いた。

これ (真の国民の覚醒—筆者) によって、政府が立脚している土壌が崩れようとしています。政治は自滅し、新たな高貴な場ができるでしょう。だから、何らの革命をもはや必要とはしません。時代精神は、他のこと全てが失敗したとしても、このような国家体制を維持してきたのです。

続けて彼はフレーベルに、如才なく警告した。

だから、愛するフレーベル。大きな声をあげないように気を付けてください。なぜなら、あなたが危険な煽動者だと気付かれたら、あなたは僻地スパンダウに送られるか、ほろ車でシベリアに飛ばされるでしょうから。あなたをアラブ人でキリスト教徒の敵アブデル・カーダー (Abdel-Kader) とセント・ヘレナ島に送ることだって可能性なんですから。お二人のような平和の錯乱者が、ここで、円満に共存できていたのですよ。

彼は、婚約者—アルヴィーナ・ミッデンドルフ (Alwina Middendorff)—が、幼稚園女教師としてハンブルクに行っていることを知ったので、次のように付け足した。

良かった。そこは自由な都市だから。そうでなかったら、彼女は煽動者として投獄される危険性にあったのです。

「ちょうど、ボルン (Born) 婦人 (バーロップの妹でカイルハウにいた—筆者) のことを考えましたら、彼女の息子がまさしく当地にいたし、彼やツェラー (Zeller) が静かに傍観していたなんて絶対になかったことです」と、アマリエ・クリューガーは、上述した手紙で書いて、それと共に、当時ベルリンに滞在していて、ボルン婦人の息子の一人で、1840年から1847年までカイルハウの教師だったツェラーについて述べた。フレーベルの上述した認識、つまり、「善と血」をもって革命を支持するということは、彼の非常に近くにいた者によって単なる口先だけではなかったことを、1949年のドレスデン5月蜂起に関連して彼の姪っ子ヘンリエッテ・ブレイマン (Henriette Breymann) が語っている。彼女は、1949年5月10日の日記に、次のように記した。「…もしフレーベルがドレスデンにいて、蜂起軍として立ち上がったら、私は彼の命を心配したでしょう。なぜなら、彼の激情や勇気は、青年のそれに劣るものではないからです」。

またフレーベルの当時における請願書や呼びかけへの従事は、革命に対する彼の激情を示している。1848年2月3日、シュタンゲンベルガーは、フレーベルにこう伝えた。シュタンゲンベルガーが、フリードリヒ・ホフマンに「我々の請願書を…印刷するように委ね、そしてはっきりと付け足しました…あなたのものを、とくにそのなかで配慮することを」。8日間でフレーベルは、いくらかの見本を手にするはずだったが、「二週間後に」、シュタンゲンベルガーは、「いますぐ公爵のところへ行こう」と。見たところ、企画は延期になっていた。というのも、1848年7月11日になってはじめて、シュタンゲンベルガーはフレーベルにこう書いた。

さしあたり請願書の一つの見本を同封します。J・メイアーは、大変喜んで印刷を引き受け、しかも無料で取り組んでくれました。でも、残念なことに、かれはただ、自分の機械を通してしか、技術的なことでしか、役に立つことが出来なかったのです。明日、私はキューネルト (Kühnert) とマイニンゲンに行きます…明後日は、ザルツンゲンへ。金曜日には、アルテンシュタインで公爵に献上します。

学校関係の事柄を越えて一層重要なのは、ヨゼフ・メイアーの1848年3月12日の改善された上奏文だった。それは、事件後、「あらゆるこれらの請願書のなかで最も重要で、最も包括的であり、公国中で多くの署名を集めた」。カイルハウでこの陳情書の受け入れについては、フレーベルのカレンダーに、次のような書き込みを見ることが出来る。

20日…シュタンゲンベルガーによるJ・メイアーの改善上奏文。夕方の賛成投票で、多くは賛成。バーロップのみ反対。ミッデンドルフ、フレーベル賛成。Pf氏(?)。…26日。メイアーへの賛成投票はフレーベル家の私以外で決議。ミッデンドルフ、それから、幼稚園女教師L・レフィンとアルヴィーナ・ミッデンドルフ。

「春(48)のM(三月)の28日」と記して、フレーベルは、甥っ子でシュタットイルムの医者で市長のアルトゥール・フレーベル (Arthur Froebel) と、呼びかけや陳情書に署名した市民に向けて、次のように書いた。

私の愛する甥っ子アルトゥールよ！ 私が手紙を書いて、さらに君にお願いすることで、さぞびっくりするでしょう。だが、時代は、この予期せぬことをでっかく、大きくもたらしているから、このことは、小さなことなかでも小さなことにすぎません。でもね、私は君に同時に打ち明けねばなりません。この時代の予期せぬ出来事と、ついに請願で呼びかけられたことは、最も近い関係にあるってことを。時代状況や生活状況を通して、君たち、シュタットイルムの市民は、次のことを求められていることを知るでしょう。例え、小さな国家であっても、国や私たち市民のみんなの本質的な要求を、ただ、高貴な言葉で公言し、書き、話すことを。君たちがしたことは、君たちを、また確かに私たちみんなの心をとらえました。いや、この狭い領域を越えて、民衆の幸福と、祖国愛に燃えている心を確かに掴んだのです。

私たちの郡でも、君たちの上奏文や君たちの行動が知られたとき、喜びに満ちたみんなの賛同が叫ばれました。私も、古いシュタットイルム人という確

かな関係で、君たちみんなへの本当に喜びに満ちた感謝の気持ちが満ちあふれ、それを止めることはできないのです。ただ言葉を書くだけにしても、そのことで私は部分的にしか言い表せませんが、感激しているのです。君が、陳情書や呼びかけをお上に送り、そしてそれらを—ちょうど時期を得たものであるとして—(私は君たちの正確な人間関係を知らないのだから、私は君に全てを委ねるのだが)—適切だと判断したこと、また、それらを目的に合った普遍的な使い方に委ねたことは、私の考えと同じでした。このことは、いま、言われている何らかの示威行為といった類のものでは決してなくて、真の温かな心情の表出といえます。その心情は、君たちの行動が私のなかに、ドイツ人として、かつての青年同志として、多くの確かな署名や行動を伴って呼び起こしたものであるのです。でも私が思うことは、個にとっても全体にとっても、自らの心情と同様に自らの確信を確実に認識することは、時代のために統一した行動に結集するためには有益であること…全体が現れるのは遅れてですが、全体は、私たちの静かな谷間でも、最近になって気づかれ始めたような事態の切迫にその基盤をもつのです。

シュタットイルム市民への呼びかけの二つの構想は、そのオリジナルがちゃんと手紙に添えられていたが、遺稿集の他の箇所にある。

1848年春と夏の間の「鈴かな谷間」カイルハウでの政治的活動について、1848年5月に姉妹と当地にいた、フレーベルの姪で卓越した女生徒ヘンリエッテ・ブレイマンが、自らの日記や手紙に重要な目撃を記した。まず彼女の目を引いたのが、「数多くの少年たちの間に…多くの青年が、ひげを生やした人たちが座っていたこと」—ブレイマンの伝記によれば、「疾風怒濤」のベルリン人が、フレーベルの郡にもいて、カイルハウにもちゃんといたことだ。

ヘンリエッテ・ブレイマンによると、学園では、多くが政治化されているが、どの党派に所属しているかは、彼女は正確には知らない。

「だから、統一された自由なドイツであるべきだということは、十分に理解しました…」「私はもはや政治には全く関心はありませんが」と、彼女は他の箇所書きながら「でも、ここで男の方々が、政治について話すのを聞くことは楽しく、また、自らの正当性を表明するために、いかに彼らが、しばしばお互いに怒ったり、飛び上がったり、机を叩いたり、とうとう怒鳴り合ったりすることは、私を楽しませてくれます。とくに、教師でスイス人で共和主義者ツェラー (Zeller) 氏は、国王と王制に対する

自らの弁舌で熱心です」。(H・ブレイマンの日記)

彼女がびっくりしたことは、部屋に、ヴィスリセヌス (Wislicenus) の肖像が、「真実に反対することは出来ない」という署名と一緒に掛けてあったことだ。聖霊降臨祭でミッテンドルフは、「ローベルト・ブルームの生活史から講演し、後で、説教師ヴィスリセヌスについて語った」。フレーベルについて彼女は、彼がマリウス・ベンゼン (Marius Bendsen) と散歩するとき、黒・赤・金の花で飾ったと述べている。一層感激して、彼女が1848年6月2日の手紙に書いたことは、カイルハウ人が、「議会開設を祝って、かがり火や花火を燃やすために」山頂に登ったことだ。彼女は、ある確かな疑いをもって付け足した。「彼らは、祝祭の終わりの際に、彼らの真ん中に灰を巻かなくてもいいのかしら」。カイルハウの射撃祭の終わりには、ある政治的皮肉が欠かされなかった。H・ブレイマンは次のように描いている。赤・黒・金の鷲が撃たれたあと、お供を伴った射撃王とその王女 (Luise Levin) が、ツェラーの指揮する「共和主義者」によって攻撃され、打ち負かされ、次のことを要求された。

王と、王女は民衆を楽しませねばならない…そして、両名は望むと望まないにかかわらず、部屋で、明るく笑っている観衆のなかで、ぐっちゃぐちゃの音楽で三つのダンスをソロで踊らなくてはならなかった (H. ブレイマン)。

ヘンリエッテ・ブレイマンは、オーソドックスな教会の家庭に育ち、貴族の家庭と親密な関係を結んでいたが、次のように告白した。彼女は以前は「上流階級や貴族を愛していた」が、いまや、カイルハウでは「貴族制の何らの痕跡」も感じる事が無いことに感激していると。革命とその擁護者に反対する聖職者は、彼女のこれまでの「信仰構造」に強い疑いを目覚させた。

私は、多くの箴言からでは何もすることが出来ません。主任司祭様が、私たちを無神論から遠ざけようと強い警告をなさるけど、全く何らの影響はありません。で、誰が無神論なの？ いったい誰が他人をそう呼ぶ権利を権利をもってるの？

彼女は、日記帳の同じ箇所にこう書いている。

呼びかけをもたらしたこれらの人々は、もしかして神の手にある使いじゃないとでも言うの？ もし、ああ、もし知っていたとしても、どう全てが関係し、全てが終了するのでしょうか？

不明瞭さや疑いが、全然ないとは言えないが、彼女の



カイルハウ時代のメモでは、1848年3月のメモと同様に、革命に対する共感が明瞭となる。フランス2月革命と関係して、彼女は1848年3月に次のように書いた。

私は、このような大変動の証人でありたいということをご否定しません。例え、民衆の行為を全面的には肯定しないにせよ、民衆は素晴らしい、崇高な党派、 Kommunismusへの努力をしています…

3月の他の手紙ではこう書いてある。

昨日、私はルイゼとユリウスから手紙をもらいました。ユリウスは、レンズブルクの義勇軍にいます。シュレースピヒ=ホルシュタインは失ってはいけません。そんなことになれば、ドイツにとって永遠の不名誉です！ 私が男だったら、義勇兵たちのなかにいるでしょうに。

少なくとも感激して、多くの諸点で、本人の政治的見解ではより明瞭に、アマーリエ・クリューガーは、自由信仰教団に属していたヒルデンハーゲン (Hildenhagen) 牧師の協力者だった。彼は、1847年にフレーベルの前で、ハレ近郊のクヴェツ (Quetz) で、有名になった子ども祭りを開催したが、彼の幼稚園をクリューガーが運営した。「あなたに、万人の心からの歓声と喜びを伝えるために、私は言葉をどう手に入れたらいいのでしょうか」ではじまる、1848年3月25日のクヴェツからの手紙で、アマーリエ・クリューガーは、ハレの市民の高揚について詳細に述べたが、同時に、たしかにプロイセン王の役割や実際にベルリンで当地の革命党にとって為されたことを誤解していた。

ヒルデンハーゲンが、ベルリンの第一報をもたらしたとき、彼は福音をもって、喜んで家に帰った。我々は勝ったのだ！ でも、すぐさま喜びは、恐るべき犠牲者の知らせによって妨げられた。そして斃れた者が流した血は、みんなの感じやすいところを激怒させた。誰も、もはや静かにしてなかった。みんなが同胞と、喜んで救援に急ごうとした。民衆がベルリンで勝利しなかったら、恐ろしい闘いが起こっただろう。老いも若きも、救援へと急かされているようだ。多くの兵士が、ハレ市内でもハレ郊外でも、民衆を引き留めなかったらよかったのに。民衆が、その自然な権利を、はじめから多くの血を流さずに手に入れ、王が大砲を使わなかったなら、どれくらい喜びは大きかっただろう…無様な官僚たちや、自分で逃げた貴族を、彼は注視した。

アマーリエ・クリューガーは、当時歌われた二つの歌

の写しを手紙に添えた。一つ目は、「さようなら大臣、新しい退任の歌」というタイトルで、二つ目の歌の最初の詩節はこう歌った。「我らは自由な人生を欲する／我らはもはや下僕ではない／天空では神が自由の王冠をつける／支配者はもう長くは笑えない／人間に神の法則を」。

なお、1848年、アマーリエ・クリューガーはゴータで、病気になった幼稚園女教師の幼稚園を引き受けた。その際彼女は、アマーリエ・マツフェルト (Amalie Mattfeld) によって援助された。1849年ドレスデンの5月一揆の後、アマーリエ・マツフェルトはフレーベルについて詳細に報告した。彼女は、当時、民主派の Dr. ヘルツ (Herz) 家に下宿しており、ヘルツ婦人の幼稚園業務を手伝っていた。

ドレスデンの事件に関する、そして、ヘルツ家とラウジッツ (Lausitz) まで逃走したことに関する彼女の描写は、再三再四、闘う民衆への共感を示した。バリケード構築について、彼女は次のように報告した。

私自身、三度、広場で築かれているのを見に行きました。そして、恐ろしくびっくりしたのは、どれくらいのエネルギーで、怒り、刺激された民衆が、自らの意思を貫徹させ、自らの意図を成し遂げるかを知っていたことです…私たちの家具から彼らは、ベット台や乳母車を取っていきました。博士夫人が、急いで階下について、乳母車を残しておくように懇願しました。その代わりに、木箱を提供しようと言いました。その願いは、もし、人から人へと大声で伝達されなかったら、顧みられることは困難だったでしょう。「早く、みんな、ヘルツ博士のご婦人だ…階上の彼女に乳母車を運べ、そして木箱を受け取れ」。

他の箇所では、彼女は「赤い暴兵」について、彼らがひどい破壊をしたことについて語った。

フレーベルが1848/49の冬に、ドレスデンで養成コースを実施したとき、彼は、参加者から署名入りの願い状を受け取った。それには、彼の年齢と加重負担を考慮して、1日ではなく2日間自習にしてくれとあった。この願い状からも、明白となることは、いかにフレーベルの協力者が革命運動に少なくとも共感していたかである。彼らは1849年2月6日に次のように記した。「民衆や領主は何も学ばず、何も忘却しなかった」。「民衆は、ばらばらのソフトなお願いや意見表明では何も得られない。そうではなく、いわゆる激しい陳情が全く素晴らしい影響をもつのだ」。

フレーベルの女生徒の多くが、本質的に革命に積極的な態度をもつ一方で、彼の最初の幼稚園女教師イダ・ゼーレ (Ida Seele) は、名前の通り、「Seelchen」(こころ

ちゃん) だった。彼女は、左派の指導者ローベルト・ブルームがウィーンで銃殺されたと同じように、フランクフルト国民議会の最右翼議員であるリヒノヴスキー (Lichnowsky) 伯爵の謀殺を遺憾に思った。

「私は民衆の興奮や不穏を理解も納得もしなかった」と、彼女は1888年に振り返っている。「なぜなら、私は政治には何らの見当を全くもってなかったからです。私は、私の国王を、私のプロイセン国を、ここから愛してましたし、また、ヘッセンの領主も私にとっては愛すべき価値あるものでした。なぜなら、私は彼のために尽くして、彼らから愛と善意をいただいていたのですから」。

既に名前をあげた人以外にも、多くのフレーベルの協力者が革命に参加した。とくに該当するのが、フレーベルの甥っ子であるカールとユリウスである。ここでは、後者について言及すべきだろう。ユリウス・フレーベルは、小市民民主主義の卓越したリーダーだった。彼の教育思想や活動は、その民主的位置において、基本的には、彼の叔父のそれと違わなかったが、今日まであまり注目されなかった。彼は、フランクフルト国民議会左派に所属し、1848年6月にフランクフルトで開催された第1回民主主義者会議の議長で、ドイツ民主主義者党中央委員会委員だった。彼は1848年8月の終わりに、ウィーンの民主主義者協会とカール・マルクスと出会い、ローベルト・ブルームと共に、左派の使命でウィーンに向かった。当地で、両名はアカデミー軍の幹部で、中隊指揮官に任命された。ウィーンの反革命の勝利後、ブルームとフレーベルは死刑判決を受けたが、フレーベルは、その連邦制的大ドイツ主義的意向ゆえに、恩赦された。ユリウス・フレーベルの著作『ドイツ共和主義憲法の根本』を、フリードリッヒ・フレーベルの教育的で同時に政治的告白(私の教育活動の全てをその最も核心において吟味してください-私は生涯の全てを共和国のために、共和国に向けて教育し、陶冶しています。私は共和的美徳を育成するために教育し、陶冶しているのです)と関連してみるなら、フリードリッヒ・フレーベルの二人の甥っ子への嫌悪は、根本的には、政治的、教育的見解の相違にあるのではなく、主観的領域、つまりフリードリッヒ・フレーベルの権威主義的な振る舞いに見いだされうる事が明白となる。チューリッヒからアマリエ・クリューガーが、1849年7月25日にフリードリッヒ・フレーベルに手紙を書いた。

私は、カール・フレーベルが反対することなく、私の力の限り、全くあなたの意向において活動できることを確信しています。カールは、私を全く自由に、無制限に行動させてくれますし、少しも、あなたに

対立することはありません…カール・フレーベルは偉大なる敬意と、愛情をこめてあなたについて語ります。彼以上に、自らの父について愛をもって語る人はいません…あなたに対立するような行動については彼の口からはありません。それどころか私は、あなたは多くのところで違っていても、主要なところでは彼と一致していると思います。ユリウス・フレーベルが当地にいて、そしてあなたの三人の弟子(三人目はテオドール・フレーベル-筆者)が共にいたとき、いかにあれやこれやについて、あなたに受け入れられようとしていたかを見ることは、私をいつも愉快にしてくれます。

上述した政治的・教育学的なフレーベルの信条告白を、彼は、教授カール・ハーゲン博士への1848年7月17日の書簡で行った。彼は、ユリウスと同じく、ポール教会の左派に所属していた。左派議員には他にも、ルーデルシュタット出身のフリードリッヒ・カール・ヘーニガー (Friedrich Carl Hoenniger)、ドレスデン出身の教授ヴィガード (Wigard) 博士、ターラント出身の教授ロスメスラー (Rossmessler) たちがいて、いろいろなかたちでフレーベルを支持した。上述した人たちのなかで少なくない人が、自由信仰教団やドイツ・カトリックのメンバーか指導者だった。例えば、フレーベルの同志エドゥアルト・バルツァー (Eduard Baltzer)、ヨハネス・ロンゲ (Johannes Ronge)、グスタフ・アドルフ・ヴィスリセヌス (Gustav Adolf Wislicenus) が準備議会のメンバーだったように。プロイセン国民議会では、ウーリッヒ (Uhlich) やバルツァー (Baltzer) と並んで、とくにハレ近郊のクヴェツ出身のヒルデンハーゲン牧師も、左派に属し、彼は、学務委員会の議長に選出された。

彼は、また、憲法構想の学校条項には同意せずに、21人委員会に所属した。彼らは、フリードリッヒ・カッパ (Friedrich Kapp) やディースターベークに依頼して、リベラルな譲歩を含んだ民主的な代替草案を、1848年7月21日に公表した。それは教職員たちに大きな反響を与えたが、激怒した反動勢力の攻撃を呼び起こした。ヒルデンハーゲンは、ハレの自由信仰教団の指導者で、アマリエ・クリューガーのおじであり、フレーベルの熱心な支持者の一人だった。既に1848年以前に、彼は、フレーベルへの書簡で自らの民主的な考えを隠さなかった。アマリエ・クリューガーは、書簡のなかで、フランクフルトやベルリンの国民議会の選挙準備でのヒルデンハーゲンの大活躍を述べた。「ヒルデンハーゲンは9日間で32回の演説を行いました。その結果、疲労で体調を崩しました。ハレでは、この民衆集会ではもっと多くの人が集まりました。約1万人が集まったのです…」。後の書簡で彼女は次のように述べた。

ヒルデンハーゲンは、「省庁で働き」そして、彼は、学校問題が話題になるや…あなたのために、親愛なるフレーベルさんのために、提案を行うのですよ。これが通ったら、あなたはプロイセンの味方も得たのです。ヒルデンハーゲンは、強敵（シュティール（Stiel）？ - 筆者）と闘わねばならなかったのです。この敵対者はあなたにただ個人的に反感をもっているというので、最善を尽くすことが望まれます。

例えば、同時期にヒルデンハーゲンはベルリンから書き送った。「われわれの事案を展開することを始めます。国民学校制度に関して、いま、多くのことが取り組まれます」。そしてヒルデンハーゲンは続ける。「ディースターベークは頂点に立っています」。彼は、1848年夏の多くの日付のない書簡にあるように、ディースターベークとフレーベルの結びつきとくに関心を示す。ヒルデンハーゲンは、上述の書簡でさらに続ける。

私は、ディースターベークとあなたについて話しました。彼は完全に私たちを熱くさせる考えにいます。来週、彼はエアフルトにいるでしょう。彼の義理の息子はチロ（Thilo）校長です。彼をゴータにお連れしたら、私は義理の姉妹を即座にそこに派遣するでしょう。彼はエアフルトであなたを待ちます。あなたはそこで、いつがいいのか、知らせを受け取ります。エアフルトでそうしてくださいますか？

1848年7月7日にヒルデンハーゲンは手紙を書いた。

私は数週間、無駄に過ごしています。私たちは目下、いかなる教育大臣ももちません。私たちの案件にそぐう人はいないので。だから14日以上なのです。ディースターベークはやってきたとき、あなたに自分で手紙を書きました。彼はなお数日間、旅行を延期します。

アマリエ・クリューガーは、ヒルデンハーゲンから、ゴータへ行くように依頼された。だが、彼女は「用件がディースターベークとのことであるという確信がなかった」ので、7月17日に当地に行かなかった。ヒルデンハーゲンは、ディースターベークとフレーベルが出会ったものと思った。「ディースターベークが早めここへ戻ってきたら、私は彼をお誘いしましょう」。筆者は、当時、上述の「23人の請願書」が公になっていたので、ディースターベークが実際に、エアフルトで彼の敵対者ティロ（Thilo）のところにいるかどうかを知らない。ヒルデンハーゲンの手紙からは既に、プロイセンにおいて小市民民主主義者を捉えていた諦めが語られている。

私たちのつまらない省庁は、プロイセンを再びつまらないものにした。省庁にとっては、民衆の感激的行動は、雑兵の敵対的なデモよりも価値がないのだ。ドイツの大切な問題は、この省庁が潰してしまう。—ドイツは有機的統一体。プロイセンは生きた部分！ なんと明瞭な！ だが外交官連中はこの明瞭さを理解しない。だが、我々民衆は、それを理解するだろう。「この永遠なるドイツよ万歳！」はすぐさま鳴り響くべきだ。そして、大臣や国王は抵抗したところで、ぶちのめされるのだ。

アマリエ・クリューガーは、ヒルデンハーゲンが1849年の初頭に、ベルリンの下院に選出されたことを書いた。

それは、唯一彼を救うものだった。さくなくば、彼は職を奪われ、閉じ込められた。彼を陥れるためにあらゆることが為されたが、そうするための証拠が欠けていた。かっこよく集会を去るために生じたこの最良の機会を、彼は利用するでしょう。

4月にプロイセン議会在解散した。フランクフルト国民議会の右派自由主義的政治家として、バッセルマン（Bassermann）、ダールマン（Dahlmann）、フォン・ガーゲルン（Gagern）が、1849年6月末に、連邦院の選挙のために投票し、それによって、オーストリアを除いて反民主主義的な方法でドイツ統一を達成するというプロイセンの最初の企てを支持した。そのことによって、また、バーデンでまだ闘っていた革命勢力を裏切った。ヒルデンハーゲンは書いた。

私は、大変な世界事件、言語道断な血から目を転じよう…ドイツの花、最良の男たちは、ゴータでドイツの名誉と誠実を埋葬する墓穴を掘った—私が、画家だったなら、私は1849年のオールドゥルーフ（Ohrdruf）近郊の悲嘆にくれるドイツ人を描くだろう。かつては当地の精神は、古い異教徒の力を打倒したが、今は、異教徒の力が、良き民衆の精神と、その最も美しくて聖なる血を凌駕している。

フレーベルの若き後継者たちのなかで、ヘルマン・ペーシェ（Hermann Poesche）と並んで、とくにルドルフ・ベンフェイ（Rudolf Benfey）がいた。彼は、幼稚園を理論と実践において深化させた。彼は、革命が挫折した後の長い沈黙を、1851年6月10日のフレーベル宛て書簡で次のように詫びた。

反動の日々、私は良心的民主派として迫害されました。さらに、私は1848年には既に党では歓迎されて

ませんでした。あなたの理想を主張することが出来ないところにいました。反動は、私があるあなたの思想を激しく主張しようとするなら、できる限り、あなたの努力を私のものと一緒にめちやくちやにしようとうします。だから、私は今なおあなたの立場に公的には立てないでいることを謝らせてください。でも、私が無為のままにいたとは思わないでください。

ベンフェイが、まさしくフレーベルを支持することは危険であったと指摘したが、そのことは確かであった。というのは、ベンフェイは、当時、成長しつつあった労働運動に繋がっていたからである。1848年8月18日に、ベルリンでステファン・ボルン（Stefan Born）の指導下で招集された第1回労働者会議（※）への、ハノーファーの労働協会の請願書を、彼は、「オーソリティーのある委員会」の一委員として署名した。1848年10月には、彼は、ケレーダ（チューリンゲン）の国民協会の代表として、ベルリンの第2回民主主義者会議に参加した。1850年、彼は、シュテッチンの「ボンメル市民新聞」の編集者であり、国外追放後は、しばらく、ハノーファーの北ドイツ労働者協会の中央委員の執筆指導者だった。彼はさらに、ベルリン、ハレ、ライプツヒで活躍し、当地でローベルト・ブルームと親交を結んだ。後にベンフェイは告白した。「私は、左派で民主派に属していた。そして、プロイセン議員ヴァルデック（Waldeck）が、すぐさま民主派の願望を適切に代弁した見解を支持していた」。ベンフェイはまた後に、この確信を主張した。

ベンフェイと同様に、有名なヒンケルデイ（Hinkeldey）警視のリストで「赤の思想家」と記されたベルリンの教師テオフィール・ビットコヴ（Theophil Bittkow）も、組織化された労働運動に参加した。彼は、上述した第1回労働者会議で、ベルリンの「労働者階級の幸福のための地方協会」の代表者であり、「ベルリン手工業者協会の機関紙ドイツ労働者新聞」の共同編集者だった。同時に、彼はベルリン教員組合（verein）の幹部だった。デュースターベークの紹介で彼は、フレーベルに、フレーベルの刊行物のいくつかを論評していいかとお願いした。「…私たちは、まさしく、あなたの素敵なアイデアを大変嬉しく思っているのです」と彼は結んで書き、フレーベルをベルリンに招待した。

フレーベルと彼の同志たちの政治的見解や活動はこれほど多い。フレーベルの学校政治的、教育学的活動は以下に詳しく述べられていくだろう。

（※訳者注）ベルリン労働者中央委員会（国家による無償教育が綱領の一つ）：8月に労働者大会開催、全ドイツ的な労働者友愛会（Verbruederung）が成立。

## 5. 革命期におけるフレーベルの学校政治的・教育的活動

フレーベルは、革命期における進歩的な政治的努力と、自らの学校政治的・教育的活動を結びつけようとした。たとえ、ここではやはり、市民民主主義の意味における社会状況の変革に際しての、教育の影響力に関して、過大な評価が見受けられるとしてもだ。三つの領域で、フレーベルの進歩的な学校政治的・教育的活動が、彼の政治的活動との関連で例証されるだろう。

1. 民主的な民族教育や国民教育の必然性の宣伝。
2. 1848年のルードルシュタットの教員祭の準備・実施を通しての民主的教員運動への積極的な参加。
3. 1848年終わりから1849年はじめにかけての、ドレスデンにおいての幼稚園女教師養成コースの実施。

1848年4月8日にフレーベルは、以前のカイルハウの生徒で、その時はアイゼナハ近郊のワルトブルクの城主であるヘルマン・フォン・アルンスヴァルト（Hermann von Arnswald）に書き送った。「…私たちはこの時代に最善を尽くそうと思います。とくに、私は、あなたが知っている私の目標、つまりドイツ統一に真の基礎を据えるという目標を遂行することによって」。さらに1848年7月7日の手紙でフレーベルは、アルンスヴァルトに、革命を自らの学校政治的・教育的目的に利用するという自らの決意を述べた。

十分に確かなことは、いま、種まきのために畑が掘り返されていることです。私たちがいま、発芽をもたらすことが出来なければ、後には、大きな困難が生じてくるでしょう。だから、あらゆる状況を利用しなければなりません。全てに実りがくるのです。

フレーベルは、1848年に、政治と教育の統一の問題に熱心に取り組んでいた。たぶん、彼がシュライエルマッヘアーの講義を聴いた時の影響がまだ残っていたのだろう。シュライエルマッヘアーは、講義のなかで、教育を政治と並ぶ学問と特徴付けた。フレーベルは、ルードルシュタット集会を準備する際に、シュタンゲンベルガー（Stangenberger）に対してそう述べたに違いない。なぜなら、シュタンゲンベルガーが1848年2月3日次のように述べているからだ。

教員集会で、とりわけ、教育が政治的で、政治が教育的にならねばならないことは、自明のことです。Fr. ホフマンは、このようなあなたの言葉を大変喜んでみます。

同じように、フレーベルはハーゲンに対しても述べた。既に1847年2月2日に、ハーゲンはフレーベルに、幼稚園の経験を政治雑誌で公表することを求めた。「そうすることによって、教育の成果を、自らの政治的重要性において認識するから」。1848年7月17日、フレーベルはこの考えをもう一度取り上げ、ハーゲンに次のように指摘する。「政治と教育は（それぞれ包括的な意味で）人類生活や国民生活の夫婦と同じであり、政治と教育のカップルから、偉大な人間的徳や、共和國的徳が生じうるのです」。

シュタンゲンベルガーが、「私は、時事問題については教育的なものよりも、純粋に政治的なものに引き寄せられると感ずる」と述べたとき、フレーベルは、政治における有能な先駆者はいるが、教育には少ないこと、シュタンゲンベルガーにルードルシュタット集会で「教育的なものから、政治的なことを取り去ることは全くないだろう」ことを理由に注意した。この「政治と教育のカップル」では、フレーベルの考えでは、教育が優位に立つ。「我々の祖国に、全面的な政治的進歩を確保したのであるなら」、—そしてシュタンゲンベルガーにとっても課題であると考えられるが—「民族と国民の教育（Volks-u.Nationalerziehung）が切り開かれねばならない」。フレーベルはこの書簡を次の言葉で締めくくる。

民族・国民教育は根本精神において同じもの。これを私たちは呼び起こし、創設せねばなりません。私たちは、私たちの民族の努力、平和、捜し物をえた喜び、すなわち、全体と同様個人にとっての真の自由の感情と意識が確かなることを望みます—全ては、ドイツの政治的、国民的、民族的な学校のために!!! 全ては、真のドイツのすなわち根本的精神的  
民族・国民教育のために!!!

それと共に、フレーベルは、「カイルハウ小論集」で明らかにし、また、40年代に構想したような、市民民主主義的国民教育に関する考えを続けた。それは、既に「民族・国民教育」と名付けることで明瞭となるような民主的内容を一層強調したものであった。フリードリヒ・ホフマンへの1848年3月16日の書簡のスケッチで、フレーベルは、この民族・国民教育を実際に実現させるための計画を示した。彼はこの計画への助言と協力を求めた。

この計画を私は、来る5月で42年間、不断に人生のそれぞれの段階において育んできました。そして、この計画はちょうどこれらの日に…徹底して熟した果実として、私の人生の樹から落下したのです。

革命の政治的事件との結びつきを確かなものにするために、このスケッチの他の箇所では次のように書かれて

いる。

…でも、若い時の思想、理念、計画が、その真の完全な成熟性をはじめて持ったように、まさしくいま、はじめて真の時代が、全体の（明瞭で、全面的で完全な）実現のために生じたように思われます。

1848年3月18日付けのフリードリヒ・ホフマンへの書簡から、既述部分に引用した文書に、さらに彼は次のように付け足した。

でも、大切なことは、感情を盛り上げることではなくて、十分な行動を行うことです。だから次のような状況も同様です。根本的な精神からなる民族・国民教育のための学校を実現させることによって、児童期を通して私たち民族が新たになるという状況。それを約束した書簡をあなたは受け取るのです。

この学校—フレーベルは、括弧で「そもそも真の人間性の教育」と付け加えた—以下のようなものとされた。

1. あらゆる関係において模範的なドイツ幼稚園からなる。
2. 幼稚園女教師や家庭で子どもの養育や教育にあたる女性たちのための理論と実践が生き生きと結びついた教育舎からなる。
3. 明確に特徴付けられる家族・民族・国民教育のための機関紙誌によって、常に精神的に生き生きと結びつき、同じ目標を明らかに理解し合っている親、子どもの友、教師たちの補習教育の場となること。
4. あらゆる参加者を、技術的にも美的にも、そして知的にも道徳的にも十分に教育し、そうすることによって、ヒューマンで時代に適した原理に基づく工房学校（Industrieanstalt）からなること。その工房学校は、かの民族・国民（そもそも根源的精神における人間）教育によって、求められる発達に即した教育的な直観的教材や作業教材もしくは遊具教材や教育教材を作成するもの。
5. 最後に、この学校は、その完成において、上述した目的の精神における学術出版社や、その精神そのものから構成されるべきである。というのも、ドイツの民族・国民教育を、あらゆる方面にわたって、多様な民族的、国民的、祖国的利害と一致、調和させるためであり、とくに、真の精神、自由で、自立的で、自分自身の内外に宿る工房的で、知的で、道徳的で、美的な民族に相応しい精神を、私たちの民族学校制度や国民学校制度そして、これらの教育過程にもたらすために。

このような学校が備えるものとして、フレーベルは、次のことを前提とした。

1. 周囲が教育に協力的であること。
2. 世界と交通で繋がった場所であること、したがって、鉄道が敷かれていること。
3. 構成員は、例え素朴であっても、努力する精神と、活発な創造的意思をもつものであること。
4. とくに市当局が、このような努力や企てに好意的であること。

1848年3月18日の書簡に同封された別稿が、明瞭にすることは、いかに、フレーベルの計画が小市民的思考によって規定されているかである。それは、確かにドイツの資本主義的発展を志向したものであっても、同時に、社会改良理念によって充たされたものであり、それによって、フレーベルは勤労大衆とくにプロレタリアートを支えようとしたのである。提案された工房学校(Industrieanstalt)は、彼の考えによると、「全てのコンクール」に耐え、その生産品(すなわちフレーベルの遊具-筆者-)によって、「大きな、自力で外国の世界マーケット」を開くであろう。フレーベルは書簡の他の箇所次のように述べる。

この学校はたくさんのパンや労働を必要としている様々な教育段階にいる世界中の兄弟姉妹に、等しく教育的で、陶冶的で、人間的に高揚させる、平和と喜びを与える生活手段を開き、確かなものにするという確かな目的、明確な目標をもちます。

だからこの学校は、以下のようにになるとフレーベルは述べる。

プロレタリアートの諸要求を根本的に充たすものになるのです。すなわち、労働とパン、同時に、教訓、教育によって、それと共に、人倫や倫理、節制、克己といった、そもそも社会的なものを授け、人間的な徳を与えるものなのです。このことが、私の全ての努力の究極の目的なのです。

フレーベルと同様に、彼の同志も、市民民主主義的民族・国民教育に対するフレーベルの諸計画と、彼によって優先的に喧伝される幼稚園に、親密な関係を認識した。ヘンリエッテ・ブレイマンは、1848年9月3日の姉妹宛の書簡で、ルードルシュタット教員集会の興奮がまださめないなかで、次のように書いた。

全くもって正しいと言いうことは、私はここで心から、教育に関係する全ての生活の源泉となる心か

ら、私たちの時代の差し迫った要求としてここで認められることは、教育は、他の、新たなものに変わるに違いないということです。私のまわりは激しく動いています。古い学校親方(Schulmeister)は眠りから目覚めました。はっきりと認識されることは、新しい、何らかの国民精神は、尋常の国民教育を通してのみ、生み出されうることであり、そしてフレーベルの幼稚園は、その基礎として、教員集会で認められたということです。

フレーベルの幼稚園は、多くの教員集会で、市民民主主義的教育制度の第一階梯として求められた。このような熱狂的な教員集会に、1848年8月17～19日にルードルシュタットで約250～270名の教師があつまった集会も挙げられる。この集会はとくに幼稚園をテーマにしたとされる。「叔父は、疲れることなく活動しています。彼は、昼となく夜となく手紙を書き、そしてその間、あちこちをかけずり回っています」と、ヘンリエッテ・ブレイマンは述べる。日記帳の他の箇所では、このように書いてある。

叔父は、何らの休憩を取りません。夕方には彼は、しばしば、何人かのカイルハウの子どもたちを連れて、オイヒフェールドやシャーレに、遊戯の練習に行きます。その遊戯は、教員集会で上演されるというのです。彼のかつての教え子の何人かは、そのときの助手としての役割を期待されています。

自らの友人であるフリードリヒ・ホフマンへのこの教員集会への招待状でもって、フレーベルがまず最初に期待したことは、ホフマンがこの招待を南ドイツの新聞で広めてくれないだろうかということ、もう一つは、ホフマンが集会で話してくれないだろうかということだった。

ヴァンダーは歓迎の言葉を送り、そのなかでこう述べた。

こころ豊かな歌や寓話で満たされているチューリゲンへの幸せな旅を、精神的で心情的な生活を子どもたちのなかに、目覚めさせ、育てさせようとしている親身なあらゆる人に！そして、装いの豊かな幼稚園を目の当たりにしてただ言えることは、理性や経験から形作られた原則に忠実であれということ。つまり、子どもは、子どもらしく、質朴で、自然に育てられる場合にのみ、そして、彼らの一つ一つの歩みが先走されることなく、遊びでも自由に動き、自由に遊ぶときにのみ、すくすくと育つのである。

フレーベルとヨハネス・シュタンゲンベルガー (Stangenberger) の往復書簡でも確認されているが、第2回ザクセン教員集会 (1848年8月4日5日) の期日が決定された。その集会では、ヴァンダーによって起草された「全ドイツ教員組合設立」のための「ドイツ教師への呼びかけ」が約900名の参加者によって採決された。フレーベルは、とくに、ライプチヒにおけるユリウス・ケル (Julius Kell) や、ドレスデンにおけるグスターフ・チェチェ (Gustav Zschetzsche) や、Dr. ヘルマン・ケーヒリー (Hermann Koechly) と並んで、ザクセンで民主主義を志向する教師たちのリーダーと話した。ルードルシュタットにおいて、「民族の教師たち、ドイツの国民教育、とくに幼稚園の友人たちの集会への招待」に署名した10名の教育者に、フレーベルやシュタンゲンベルガーと並んで、ケルやチェチェ、フレーベルと親交があった教師ホイジンガー (Heusinger) がいた。彼らは、ドイツ教師への呼びかけに署名していた。

ユリウス・ケルは、1848年8月9日のライプチヒからの書簡で、フレーベルに、ルードルシュタット教員祭実施にあたって若干の助言を与えた—例えば、それぞれの国の代表団は、色で識別できるバンドを、ボタンの穴にとめればいい、またそれとは違って、「祭典実行委員」は、「黒・赤・金の飾りかバンド」をつければいい—しかしながら、メインは、次の言葉でもって、第2回ザクセン教員集会の成果と、そこから生じる必然的な活動を指摘した。

私は、あなたに、少なくとも数行で、私たちのザクセン教員集会の素敵な経過をお伝えすることなんて出来ません…ザクセン地方教員組合は設立され、既に組織化され、ドイツ中央組合が始まりました。間もなく、あらゆるドイツの地方組合が中央組合に集結され、9月の終わりには、アイゼナハで、全ドイツ地方からなる設立集会があるでしょう。私は、なおルードルシュタットに行き、そこで公国関係者のために働けることを嬉しく思います。そして、最後にはまた、出席者たちによって、組織化がなされます。私たちや友人たちはみな、いたる所で、同じ目的に向かって活動し、解決の糸口を見いだすために団結しているのです。

ケルは、集会の一日目をとくに、全ドイツ教員組合設立の呼びかけを宣伝すること、そして、この設立を、教育政治的・教育学的諸要求と同じく、革命の政治的関係のなかに据えることに使った。その後、フレーベルの幼稚園は、理論と実践において、激しい議論の中心に位置した。多くの意見の相違にもかかわらず、集会は、「ドイツ政府と、フランクフルトの帝国議会」への陳情書を決議した。それは、「幼稚園の理念をまず最初に検討し、

多くのフレーベルの教材を利用して幼稚園の設立ならびに幼稚園女教師の養成を、できることなら資金援助を通じて、促進すること」を求めるものであった。ミッペンドルフの著書『キンダーガルテン。時代の要請。若干の民衆教育の基礎。ドイツ国民議会の評価に据えられたもの』(ブランケンブルク1848)は、A・フランケンベルクのパンフレット「若き女性のための職業学校としてのキンダーガルテン」(ドレスデン1848)と同様に、これらの取り組みを支えた。

全ドイツ教員組合が設立されたアイゼナハ集会によって、市民的統一学校の意味における市民民主主義的・自由主義的学校綱領が採用され、その第一階梯に幼稚園が置かれた。フレーベルは、この集会から帰ったとき、チューリンゲン教員組合の構想に熱狂した。彼は既に、この考えをルードルシュタット集会で表明していたが、その設立を、イエナの市民学校長エドゥアルド・ツァイス (Eduard Zeiss) —カール・ツァイスのきょうだい—が進めようとしていた。ツァイスは、ザクセン・ワイマール・アイゼナハ大公国の教員団の頂点に立っており、1847年の初頭にはすでに、217名の教師によって署名された政府や領邦議会宛の陳情書を提出していた。フレーベルは、「教員組合」(Lehrerverein) という命名に対しては留保した。なぜなら、「教育」がもっと強調されるべきだと思ったから。それ故、「チューリンゲン民族教育同盟・教員同盟」協会と名付けることを提案した。しかし、原則的には、計画に賛同し、この意味で、同志 Dr. フェルスベルク (Felsberg) に「ツァイスの努力は、だから、私のものだ…」と書いた。

ヘンリエッテ・ブレイマンによれば、「1848年8月のルードルシュタット教員集会の最も重要な結果」は、ドレスデンからきた多くの人々が、以下のお願いをフレーベルにしたことである。

フレーベルの教育思想について講演するために、冬期にドレスデンに来て欲しいと。…フレーベルはこの提案を喜んで、いな、感激して同意したのは当然だった。彼には、活躍のさらなる場が開け、長年彼を縛っていた狭い桎梏から彼は解放された。

フレーベルは、家の [1848年] のカレンダーに、ヘンリエッテ・ブレイマンとドレスデンに行った10月のところに、「新時代 (Neue Aera) 1848」と書き込んだ。

ザクセンや、とくにドレスデンでより大きな、影響力の大きな活躍の場を見いだそうするフレーベルの希望は、多くの点で、間違っただけではなかった。この産業的に最も大きく成長したドイツ領邦では、すでに1831年には、領邦等族用の憲法が消滅し市民的立憲的領邦に適した憲法が成立したのだが、その年以來、政府や議会によって、国民学校制度を時代に適した形に変える試みは

じまっていた。その試みは、1835年の学校法において、最も適当な方法で表れていた。教員運動も、ここでは最も強力に成長し、陳情書や意見書を議会に提出した。ユリウス・ケルによって編集された「ザクセン学校新聞」がこの動きを伝えた。1847年に、Dr. ケーヒリーの指示で、ギムナジウム (Gelehrte Schule) の規則が公表された。1848年1月には、1835年教育法に関する解釈法案が。1848年にはドレスデンで、我々が見てきたように、最も重要な教員集会が開催された。Dr. ケーヒリーの指導下、新たな学校法への取り組みがはじまった。この取り組みは、いわゆる三月内閣の解散後も、中断されることはなかった。なお、1848年12月の領邦議会選挙では、民主派が下院で絶対多数を獲得した。この学校法での市民的統一学校構想は、次の通りだった。まず、4歳から6歳までの子どもは、幼稚園に通園。その上に、以下の市町村 (ゲマインデ) 学校。つまり6歳から10歳の子どもの学校。10歳から14歳は少年少女学校 (Knaben-u. Maedchenschule)。14歳から17歳は男女のための補習学校 (Fortbildungsschule)。

フレーベルが有した人間的結びつきは広範だった。フレーベルが、バード・ブランケンブルクに作業と遊びの学校というかたちで最初に幼稚園を設立したちょうどその年 (1839年) に、アドルフ・フランケンベルク (Frankenberg) は、ドレスデンに自らの私立学校に附属して、フレーベルの臨席のもとで、同様な幼稚園を開設した。1845年にフランケンベルクは結婚するが、フレーベルも参加した。1843年にフレーベルのところで訓練を受けたルイゼ (Luise)・フランケンベルクが、この幼稚園を運営した。フレーベルは、アドルフ・ペーターズ (Adolf Peters)、ゴットフリート・ゼンパー (Gottfried Semper)、アーノルド・ルーゲ (Arnold Ruge)、そして音楽教授レーベ (Loewe) やレセルフ (Lecerf) によって支持された。フランケンベルクは、1842年に非合法で、第1回男性合唱祭を実施した。そして、1844年にはケーヒリーとザクセンに最初の体操協会を設立した。ケーヒリー、チェチュ、ケルは、Dr. ハイリッヒ・ヘルツ (Herz) や彼の妻、フレーベルの熱烈な支持者と再び交友した。Dr. ヘルツは、地域の有識者でありヘンリエッテ・ブレイマンにとっては「ドレスデンで最初の民主主義者」だった。彼は、「左派クラブ」に所属し、「祖国協会」(Vaterlandsverein) の会長で、そこでDr. ケーヒリーや作曲家リヒャルト・ワーグナーと積極的に活動した。また彼は新たに創刊された「ドレスデン新聞」の筆頭執筆者だった。Dr. ヘルツは、ウィーンで虐殺されたローベルト・ブルームの葬儀で、フラウエン教会で弔辞を詠んだ。

フレーベルは、1848年10月から1849年4月末まで、短い中断を挟んで養成コースを実施した。そして、妻が幼稚園を経営し、娘を養成コースで学ばせたがっていた

ルードヴィッヒ・シュトルヒ (Ludwig Storch) に、フレーベルは、その娘を養成コースに入学させてもいいと考え、手紙を書いた。

多くの知識や経験をもち、感激するところをもち、勤勉で誠実に学ぶことができる生徒や女生徒が集まってくるのが困難ななかで、幸福で、ともに好意的で、幸せな関係性をもつ多くの人のなかで確実に最も有能な者の一人になるだろう人、私によって、資質を与えられるだろう人…40人を超える生徒や女生徒が、私の周りに集まりました。それは、未婚女性だったり、既婚女性だったり、女性の教育者や女教師や母親だったり、青年や成人男性や教育者や父親だったり…

男性の参加者の中では、とくに、自らの幼稚園を実習教育の場に提供したアドルフ・フランケンベルク、さらに、私立学校長 Dr. ブルーノ・マルクヴァルト (Bruno Marquart)、フランケンベルクの学校で女生徒の体操に貢献した体操学校校長グスタフ・アウグスト・ヘルマン・リッツ (Gustav August Hermann Ritz)、そして母の歌と愛撫の歌の作曲家ローベルト・コール (Robert Kohl) を挙げる事が出来る。コールは、女性たちに自らの作曲を伝授した。また、フレーベルの甥っ子カールも、当時はドレスデンにいた。ヘンリエッテ・ブレイマンは、1848年12月23日のマリウス・ベンゼン (Marius Bensen) への書簡で、「昨日、私は、いどこであるチューリッヒのカールと面識を得るために、キュストナー (Kuestner) 嬢の食卓にいました」と書いた。フレーベルの弟子であるアマリエ・クリューガーは、1848年12月27日に、非難しながらフレーベルに書いた。

私はあなたにもう一日、ここにいてくださいと頼みましたね。というのも、あなたが、ヨハンナ・キュストナー (Johanna Kuestner) やカール・フレーベルと仲良く語り合っただけで欲しかったからです。でも、残念ながらそれは出来ませんでした。あなたは終日、不在でした。私はクリスマスイブをキュストナーのところで過ごしました。そこで彼らは婚約者として自己紹介し、幸せに過ごし、私たちは昨日、真の友としてお別れしたのです。結婚式は復活祭のときでしょう。彼らはあなたに手紙を送ります。だから、親愛なるフレーベル、可愛い姪っ子が期待することが出来るような心のこもった返事をヨハンナにあげてください。カール・フレーベルが、あなたを深く傷付けたとはいえ、悪事に善事をもって報いることは、その逆よりもはるかにベターであることは事実なのであります。



67歳のフレーベルは、早朝から夜遅くまで休み無く活動したが、そのことは、とうとう、彼の弟子たちに、上述した「嵐のような慌ただしい幼稚園教育内容の紹介」をさせることになった。ホテル・シュタットウィーンで、フレーベルは彼の全ての遊びと作業の道具の展示を行った。彼が不在中の短い間、ヘルツ婦人と、ヘンリエッテ・ブレイマンは「様々な養成コースに従事し、そのなかで、Dr. ヘルツ夫人が旅行中に、有名な体操家シュピース (Spiess) のところで習得した運動遊戯を教えた」。

フレーベルも、シュトルヒへの書簡で満足して以下のように確かめたとき：

幼稚園によって真のドイツ国民教育を創造することが私たちの課題だって話してから、どれくらい事態が変わったことでしょうか。このことに関して、全てが、なんと変わったことだろう。あのときから、なんとこのテーマに共感する人が至るところで増えたでしょう…。

彼が、他の箇所でも次のように指摘したことは全く間違っていない。つまり、「国民の著作」や「日刊紙」では、国民教育の問題は「政治を凌駕しており」、「政治的論議では、とくに、創造しつつある真の国民教育が重大問題として扱われている」ということ。しかしながらまずは、ドレスデンでの努力、とくに養成コースによるものは、その第一部は1月に終了したが、良好にスタートした。

「まずはここで、Dr. ヘルツ夫人は、民衆のなかで、貧民の子どものために生き、彼らにクリスマスの喜びを与えたいと思っています。できることなら君は、君のクリスマスツリーをほんの少し、この子どもたちのために出来る限り早く贈ってもらえないだろうか」とフレーベルは、1848年12月10日にフリードリヒ・ホフマン宛に手紙を書いた。

ヘルツ婦人と、Dr. マルクヴァルトは、1849年5月1日に、それぞれ幼稚園を開設しようとした。ヘンリエッテ・ブレイマンは、1849年1月の母親への手紙で次のように述べた。

明日、大臣さんたちが私たちのところにやって来て、数時間居合わせるおつもりです。フレーベルは、ザクセンの大きな都市の全てに幼稚園が設置されることを望んでおります。そしてあなたは、彼がいま、

かれのことをほとんど知らなかった人たちから承認されているなんて、信じないでしょう。彼の養成コースを受講したいという人がたくさん出てきます。ほどなく、二人の若い女性が、遠方からやってきます。また、先日は、若いアメリカ人が来ました。彼は、ここドレスデンで全く貧しくて荒れた子どものために、いままでとは違った幼稚園を設置しようとしています。Dr. ヘルツ夫人は、責任者を引き受けるでしょう。

1849年4月16日に、彼女は両親に報告している。

ほんとうに仕事が順調なんです。Dr. ヘルツ夫人の計画は省庁によって採用され、広く普及しています。4つの幼稚園が設置されるということです。Dr. ヘルツ夫人は、園長を引き受けるでしょう。

養成課程を終えた幼稚園女教師たちは、コース終了後は、それ相応のポストを少なくとも約束された。修了式は、フレーベルの誕生日のように祝われた。フレーベルはドレスデンに留まり、上述した国民幼稚園に、教員養成コースをリンクすることを求められた。「というのも、領邦は多くの若い女性たちを育てて欲しいと思ったからです。でも、フレーベルは断りました。というのも、彼は国家の下僕であることを望まなかったからです…」。疑いなくフレーベルは、小市民民主主義勢力による支持があったとしても、ザクセンの政治権力が黙っていることはないことを知っていた。それ故、彼は、さし当たりリーベンシュタインで見つけようとした「自由な空間」をしばしば探していたのである。プロイセン軍の援軍による、1849年ドレスデン5月蜂起の敗北は、全ての進歩的な政治的萌芽を潰した。その萌芽は、まさしく国民教育制度の領域で、とくに幼稚園によって浮かび上がっていたものであった。

※本稿の「フリードリッヒ・フレーベルと、19世紀前半における小市民民主主義との結びつき」の第一部 (Helmut Koenig; Friedrich Froebels Verbindung zur kleinbuergerlichen Demokratie in der ersten Haeftte des 19. Jahrhunderts. Teil I) は、『福岡大学人文論叢』第39巻第3号において掲載した。本誌6) 7) のケーニヒ論考の邦訳は、筆者がドイツ民主共和国のベルリン・フンボルト大学留学中(1988-89年)に、本人から直接快諾を得ている。なお紙幅の都合から脚注は全て省略した。